239
Mi36
3
289-Mi 36-3ウ
1200500732128

始

34.3.18

289
Mz36
3

中山太郎著

學界偉人

南方熊楠

東京 冨山房

昭和十六年三月廿六日 購入

翁の遺族と親戚故舊

前列中央松枝未亡人，右へ令嬢文枝子，令弟
氏郎四畔小へ左りよ人亡未枝松。氏楠常方南
。氏郎次貞賀雜（裝和）央中列中。氏翁松上
（影撮念記てに邸同後了終儀葬翁）

田邊新屋敷の南方邸の外觀

959
34

序に代へて

◇一代の碩學、南方熊楠翁の易簀されたのは、昭和十六年十二月廿九日朝であつたが、其の日の午後に東京日々新聞記者が私方に見え、翁の略歴、學績、逸話等に就き語れとの事に、私は無限の悲みを胸に抱いて、懷ひ出すまゝを次第もなく話した。明けて同十七年の一月に私は、學會の集りで、翁に就いて二回の講演を試み、更に覓めらるゝまゝに雜誌「大日」、「明治文化」、「旅と傳說」、「歷史地理」へ、同じやうな翁の學績と逸話とを寄稿し、都合、一新聞、二講演、四雜誌の七回に達した。回數元より多きと云ふにあらず、行文必ずしも全貌を盡したとは云はぬが、私は、文星西に流れて、南紀の天、爲に暗く、邦家の損失これより大なるはなしとまで、翁の學業を禮讃したのである。勿論、これは翁にとつては最負の引倒し、却つて有難迷惑である事は云ふまでもないが、私としては、幾分でも翁の學恩に報ゆることが出來たと、竊に自己滿足に浸つて居たのである。

◇越えて二月に入ると、出版界に堅實を以て著聞せる富山房編輯部在勤の學友

市村宏氏が來宅され、南方翁評傳とも云ふべきもの起稿してくれまいかとの依頼であつたが、私は即座に、第一は翁に關する資料の足らぬ事、殊に粘菌の方面に就いて。第二は翁の近親又は門葉により、眞傳なるものが刊行さるる事。第三は一時にせよ私が翁に接近して居たので、曩に「南方隨筆」を編輯した際に、翁の略傳とも云ふべきものを執筆した事があるので、何んとなく樂屋から手を叩くやうに、痛くもない腹を探ぐられる事の三點を理由として、勇敢に謝絶したのである。

☒然るに兩三日を經て、同房の宮川寶龜氏の來訪あり、書肆の立場としては、南方翁が獨學を以て在外研究十有五年、畏くも御前進講の光榮を擔ふに至つた、其の勉學、其の努力、其の精勵こそは、實に學徒の龜鑑として現下の青壯年に聞かせなば、懦夫を起たせ怯人を動かすべきを以て、其の心構へにて執筆せられたし。南方翁の年譜を趁うて記述する眞傳の如き、又、粘菌採集や鏡檢寫生の如き學術的敍述は、他日、門葉の高足駿材の手に俟つも遲からじ、切に學界大偉人のプロウフィールだけでも描いて、人心を興起し世益を增進せんは、必ずしも翁の素志に戻るにも非ざるべしとの事であつた。斯う言はれると好人物の私として、それでもと拒絶するに辭なく、然らば兎に角に翁の高足の方に相談して、諾否の返事をなすべしと挨拶した。

☒それで私は、直ちに二十年來の舊知であつて、而も南方門の逸材である上松翁氏を訪れて其の事を諮ると、同氏も一存にては取計ひ難し、いづれ同門の者と談合して申送るべしとの事であつたが、約十日ほど經て來宅あり、南方翁の詳傳は吾々門下にて編纂する計畫あるが、さる意味の別傳ならば、故翁と生前交際ありし事ゆゑ差支なかるべしと決定せる旨を語られ、且つ資料の助力を爲すべしとて「紀伊新報」一束と、挿入の寫眞數葉とを惠貸され、更に質問の事あらば遠慮なく申越されよ、克明に回答すべしと、誠に厚意あるお話であつた。

☒私は上松氏の此の理解あるお話に勇氣を得て執筆を決心し、宮川氏と面談し約束を取極め、さて資料を整理しプランを立て運墨を始めたが、案の如く資料が足らず、先づ差當り翁の慈母の氏名すら判明せぬといふ有樣で上松氏を煩はす。同氏は在和歌山の翁の令弟常楠氏に飛札し返信を得て私に傳達する。更に故翁が發見したミナカテルラの綴りが分らぬ、やれ何が知れぬと、幾回となく御多用中を御手數をかけたのである。

☒然るに上松氏だけでは濟まぬ事が惹き起つた。それは紀伊新報社主催の座談會に出席した方々の職業を知りたいと云ふ一事であつた。それで私は、甚だ失

禮とは存じながらも、未見の學友である田邊市の雜賀貞次郎氏にお願ひする事にした。同氏も私の微意の有る處を汲みとられ、是れ亦、幾回かの質問に對し、毎に御懇簡をいたゞき、德孤ならず必ず隣ありと大に吾意を强うしたのである。

◇斯くて在る間に、雜賀氏より芳信のうちに、氏が南方翁に關し、長文の原稿を、雜誌「旅と傳說」四月號へ寄せられたと記してあつたので、私は一方に雜賀氏に對し、抄錄轉載の許しを竟めると同時に、一方には該雜誌發行所の萩原正德氏に乞うて、ゲラ刷りを借覽したが、流石に故翁と三十年の厚誼ありしだけに、私などの曾て知らぬ有益の記事のみであつた。

◇私は、斯うして兩氏の援助により起稿したが、巧遲より拙速に馴れて居るので、筆も乾かず一千言、約二週間にして初稿を書きあげ、更に淨寫に移つたとき、翁に關係ある事が一二湧起した。第一は翁を田邊まで往訪せられたほど懇親の、故白井光太郎博士の藏書が、帝國圖書館に購入された件である。私はこれを聽き藏書は兎に角として、翁が博士に寄せた書簡三卷、或は散逸するやうな事がありはせぬかと、直ちに同館に赴き、掛員大田榮太郎氏に面會し、其の事を質ねると、書簡の事はよく知らぬが、さうした白井家一切の文書類は、數名の監理者により保管されて居るので、萬一にも散逸するが如き事はあるまじ、との話で先づ安堵した。第二は鳥羽の岩田準一氏より來信あり、東京の某氏より、南方翁の研究せる十二支の記事を出版すべければ、岩田氏所藏の翁よりの書簡四冊、加入せずやとの申込みありしが、如何にすべきやとの相談あり、私は其の事ならば急ぐに及ばず、と申送つて置いた。翁の歿後、東京ではまだ此の外に一二目論見のあるを耳にした。

◇斯うした事で多少とも淨寫が遲れた處へ、或日、上松氏が翁の洋行前十九歲の折の寫眞（裏に翁の好きな大津繪と都々逸が記してある）と、キューバで翁が、孫文と一緒に撮つた寫眞の二珍品を持參惠貸されたので、私はとりあえず富山房へ往き宮川氏に同寫眞の復寫を賴み、其の折に南方翁が如何に古今獨步の博覽家だと云つた處で、抽象的の掛け聲だけでは讀者にピンと來ない。何か纏まつた一篇の論文なり考證なりを附錄として揭載しては如何と語りしに、同氏もそれこそ當方の望むところ、翁の蘊蓄を窺ふに足るものを選定されたしとの事なりしより、然らば「棉の神に就て」か又は「神社合祀反對意見書」か、二つのうち一を擇ぶべしと約して別れたが、段々考へて見ると、前者の樣な神の考證は、翁の學殖を知り得るとしても、餘りにも專門的であり學究的であるため、靑壯年向きで無いのに反し、後者の合祀反

對論は、翁が心血を濺いだものだけに、千古に傳ふべき大文字である。そこで私は、一度、書きあげた原稿を書き改める事として、本書の如き內容體裁とした。

〇こゝに本書の成りし經過を記して序に代へたが、更に擱筆に際し、座談會に出席して、貴重の資料を發表された各位に對し、深甚の謝意を捧げると共に、とりわけ上松・雜賀兩氏の厚情に對し御禮を申上げる次第である。

南方翁と刎頸の交りありし孫文先生の靈臟(肝臟)が、北京陸軍病院にて發見され、南京中山陵へ納安せられし三月二十六日、本郷弓街の玄外書屋にて

中山太郎識

凡例

一、本書は、主として青壯年の方々に讀まるゝやう執筆した。從つて記事の運墨に多少とも飛躍した點が無いではないが、想像や腰だめで書いた處は全く無い事を斷言する。

一、本書の資料は、曩に刊行した「南方隨筆」附錄に、筆者が記述した『私の知つて居る南方熊楠翁』を基調としたが、今は是れも、全然書き改めた程の多大の訂正を加へた。

一、改訂の資料は、南方翁の永眠直後に「紀伊新報」の主催で開かれた『南方翁を偲ぶ座談會』の記事を始めとし、續南方隨筆「雜誌「日本及日本人」「大日」「不二」「鄕土研究」「ドルメン」「民族」「民俗學」「旅と傳說」「和歌山縣人材錄」等を參照し、他に南方翁の書信等に據り、出典は出來るだけ筆尻に記入して置いた。

一、出典の記入無き談話記事は、前記「紀伊新報」の座談會記事、及び同新報の南方翁永眠當時の記事に據つたものである。

一、座談會出席者の氏名職業、及び南方翁との關係は、出來るだけ記事中に詳敍した

が、中には一二の氏名を省略したのもある。

一、著述の態度は、主に南方翁の自敍に據り、從としては諸種の文書手簡を基とし、出來るだけ客觀的に記述した。意の赴く處に筆の伴はぬは、不文の致す處とて慚愧に堪へぬ。

一、南方翁の記事及び書簡は、概ね片假名が用ゐられて居るが、こゝには便宜上平假名に書き改めた。

一、挿入の寫眞は、其の多くを上松蓊氏から借用し、且つ掲載の許しを得た。こゝに其の厚情に對し謝意を表す。

一、校正は筆者が當つたが、馴れぬ事にて魯魚焉馬の誤りの多いことを惧れて居る。改版の折に改訂したいと考へてゐる。

著者識

目次

序說……三
翁の生れた時代と其の環境……三
天下は武家政治の清算期……三
紀州藩の改革と徵兵令の實施……五
本傳……一一
南方家は代々庄屋役を勤む……一一
自ら毘沙門天の申子と稱す……一三
小學校時代の三事業……一五
中學時代と母の感化……一八
大學豫備門時代……二一
在米時代の數奇なる生活……二五
在英學名昂揚時代……三三
一、斷食して讀書する苦學……三三

二、苦學を征服した翁の心境……三八
三、龍動學會の懸賞論文に當選……三九
四、革命家孫逸仙を救ひ出す……四一
五、名物フロックコートの由來……四四
六、在英時代の翁の學績……四五
七、角屋先生と綽名さる……四七
八、英女王より研究費を賜る……四八
九、在外十五年にして歸國す……四九
田邊町學業大成時代……五一
一、生家の退轉と熊野三山の跋渉……五一
二、田邊町を永住の地と定む……五六
三、孫文來市すれども翁に會はず……五七
四、睡眠四時間と粗衣粗食の實行……五九
五、世界の四大蒐集家となる……六一
六、粘菌檢鏡の苦心と翁の悲壯の態度……六五
七、翁の强記博覽と民俗學的考證……六八

八、神社併合問題と翁の下獄事件……七一
九、翁の好學心は世界を光被す……七六
一〇、南方研究所設立と三十六年振りの上京……七九
一一、棉の神に就いての考證……八一
一二、聖上御進講の光榮を擔ふ……八六
一三、翁の偉大なる學績と超人的の書簡……九一
一四、翁の晩年と其の臨終……九七
逸話……一〇七
人間としての翁の風格……一〇七
一、翁の爲人と其の性格……一〇七
二、翁は國體明徵論の先驅者……一〇九
三、翁の學生時代を偲ぶ二三の物語……一一一
四、翁がヘコマサレタ話……一一五
五、翁の爲に水火を辭せぬ三百人……一一七
六、土宜管長に鼻汁かます……一一八
七、翁の博士無用論……一一九

目次

八、國學院大學の不講演事件……一二
九、蟹の研究で床屋に教へを乞ふ……一二三
一〇、リスター女史の震災見舞金……一二六
一一、紀州名產「革井紙衣」と翁の研究……一二八
一二、翁の面會嫌ひと非妥協性……一三五
一三、葬禮に代人を遣り自宅で御詠歌……一三七
一四、山本提督に安藤蜜柑の傳達……一三八
一五、翁の雅懷と其の作物……一四一

附錄

神社合併反對意見……一四九
自殺に就て……一六六
紀州田邊灣の生物……二〇三

序說

序說

翁の生れた時代と其の環境

國寶的存在として內外に高名を知られ、獨學を以て世界の植物學界に多大の貢獻を爲し、更に草莽の身を以て畏くも、聖上に御進講の光榮を擔うた、吾が南方熊楠翁は、慶應三年に紀伊國和歌山の城下町に呱々の聲をあげたのである。

時代は英雄を造り、環境は人格を培ふと云ふは果して眞か、若し眞なりとせば、翁の生れたる時代と其の環境とに就いて、一瞥を投ずるは、決して意義なしとは云へぬのである。

天下は武家政治の淸算期

慶應三年といへば、此の年正月九日に明治天皇御卽位あり、二月には德川幕府の

征長軍を解き、三年將軍慶喜、大阪に於いて英佛蘭の三國公使を引見し、同月小出信濃守、露都に於いて樺太の共有を約す。六月幕府は横濱の陸軍傳習所を江戸に移す。十月山内豐信大政奉還を幕府に勸告し、次で討幕の密勅を薩長二藩に賜る。同月慶喜將軍職を辭す。翌十一月幕府海軍傳習所を江戸に設け、越えて十二月二十九日王政復古の大號令が下り、攝政・關白・征夷將軍等を廢し、新に總裁・議定・參與を置き、鳥羽伏見の一戰を經て明治の改元となり、こゝに新政府の樹立となつたのである。

斯くの如き内憂外患に寧日なかりしは、舊勢力の德川幕府が倒れて、これに代る新興の明治政府が生れ出づる陣痛期なのであつた。實に此の慶應三年こそは、武家政治七百年の清算期であり、また明治維新史の中樞關鍵でもあつた。嘉永六年に米國使ペルリが浦賀に來たつて、鎖國の夢を破りてより以來、大速力を以て急轉直下せる國情は、全く此の年に至つて窮極に達した。即ち前年に將軍家茂薨じ、尋で孝明天皇崩御し給ひ、二百六十年間を通じ天下の侯伯を制壓して、政兵の大權を握りし幕府も、積弊の結果、外は米英佛露の威壓に屈し、内は防長再征に敗れて威信を失ひ、遂に倒幕に至れる大活劇は、殆んど悉く此の年に演ぜられたのであつて、皇國三千年の史乘中、此の年ほど變化多く且つ興味深きは、他に比儔を竟むべくもなく、恐らく世界興亡史に徵するも、其の類例なきものと考へる。

吾が南方翁は、斯うした時代に生れたのである。

紀州藩の改革と徵兵令の實施

紀州家は德川氏の親藩として、藩祖頼宣以來、南海の雄鎭を以て任じたが、殊に幕末に至り藩主慶福が宗家に入り、將軍職を嗣ぎ家茂となつたので、更に佐幕の空氣が蓋藩を覆ふに至つた。然るに幕府の勢力が地に墮ち、尊皇の大運動が興起するや、紀藩も他藩と擇ぶ處なく、藩論が幾つかに分れて相當の摩擦を見るやうになつた。そして、紀藩が如何に泰平に狎れて居たかは、嘉永七年九月十五日に、露國の帆船一隻が使節を乘せて、大阪に赴く途中、紀海を過ぎ加太浦に假泊せしに、此の報告に接した紀藩上下の驚愕は、言語に絶し、藩の動員一萬一千八百九十四人に上り、此の費用金四千七百三十五兩三歩と、銀二貫七百八十一匁一分五厘に達したが、露船は此の狼狽振りを冷笑するものゝ如く、十七日に何の素ッ氣なく、立去つた事件に

見るも明白である。紀藩はこれに自肅せしものか、安政年中に軍政を改革し、海軍にては元治元年に汽船明光丸外三隻を購求して面目を新にし、陸軍にては文久三年の大和の亂、慶應元年の長州征伐に出兵して、舊體制の物の役に立たぬことを覺り、新職制を設け、銃隊をも編成した。

然るに、當時の英國公使パークスは、薩長二藩に結んで、佛國の勢力に依存せんとする幕府に對抗したが、此の形勢を看取した米國公使デロングは、紀藩と結んで一勢力を張らんと企て英公使と對立した。斯くてデ公使は、自ら和歌山に赴き藩の執政者と會商し、これを耳にしたパ公使も、同じく和歌山に入り視察したと傳へてゐる。斯くて同藩では、獨逸より軍人カッピンを聘して藩士を教練させたが、其の頃の藩の子弟は、概ね蒲柳の質にて物の役に立たざるより、寧ろ筋骨逞しき農民商家の青年を教練するに如かずとなし、此の方針で兵卒を養成した。そして、同藩の津田出(後の陸軍少將)が此の教練法を踏襲し、明治二年に藩の大參事となるや、制度を改革して四民皆兵の成績を擧げた。これ我國徴兵令實施の先驅であつた。次で明治四年に陸奥宗光(後の外相)が、歐洲より歸藩し、權大參事となるに及び、當時の新知識である鳥尾小彌太(後の樞密顧問官)、小松濟治(後の横濱裁判所長)、星亨(後の逓相)、林薫(後の外相)などの諸雄が、相前後して和歌山に遊んだのは、四民皆兵の新式教練を見學せんが爲めであつた。これ和歌山藩が、加州金澤藩と共に、薩長兩藩に次で多くの陸海將校を出した所以である。

吾が熊楠翁は、斯うした環境で人となつたのである。

本

傳

本傳

南方家は代々庄屋役を勤む

南方熊楠翁は既記の如く、慶應三年四月十五日を以て、和歌山市橋町の商家に誕生した。父は彌兵衛(後に隱居して彌右衛門と改む)、母はスミ、西村氏。翁は其の次男であつた。

元來、南方氏は、信州小笠原氏の支流である三好氏に屬し、釘貫を家紋として居る。紀藩で編纂した「紀伊續風土記」に、名草郡三葛村(現今の海草郡紀三井寺の一大字)の南方てふ字は、もと御名方神を祀りしが、他へ其の社を移してのち、若宮八幡宮を氏神とす。此の地に南方氏甚だ多く、諏訪神を氏神とせるは、信州に緣あるものゝ如しと記せるは一證である。

斯うした南方家は、いつの頃か紀州に移住し、代々日高郡矢田村大字土生の庄屋を勤め、同地方に著聞した富豪であつた。傳ふる處に由ると、熊楠翁の幾代前かの

當主の折に、親戚なる大阪の豪商鴻池家で、結婚式用の金屏風を借受けたしと申込んで來たので、六曲一双を貸した處が、鴻池家では使の者を遣り一双では事足りぬ、もう二三双貸してくれとのことに、南方家では『折角だが、金屏風はそんなに持合せが無い』と斷り云ふと、『いや有る筈だ、貸し惜みするとは怪しからぬ』と問答の末、當主が『お前の貸せと云ふ金屏風とは、どんな物かね』と尋ねたので、使の者は『それは金箔を置いた屏風の事です』と答へると、『なんだ金箔の屏風か、私は金屏風と云ふから、純金の屏風の事かと思うて、一双しか無いと斷つたが、金箔物なら幾らでもあるから持つて往くが宜い』と、更に五双貸したと云ふ逸話が殘つて居る。此の一事から推すも、當時の南方家が如何に財産家であつたかゞ窺はれるのである。

熊楠翁の父彌兵衛は、此の豪家の次男として生れたのであるが、其の頃は德川の世盛りも過ぎ、南方家も以前の繁昌は漸く昔話となり、且つ土生村は僅に三十戸ほどの山村。かゝる猫額大の土地の庄屋の次男坊で納まつた處が致し方がないと見極めをつけたものか、十一歳の折に家を出て、諸方に年季奉公を勤めた後に、和歌山に住み、鐵物商を開店したが、その時の資本金は、驚くなかれ僅々三兩二分だと云ふことである。そして、幾年かの精勵刻苦を重ね、後には和歌山市で第一番、同縣下で第五番目の豪商となつたのである。

自ら毘沙門天の申子と稱す

南方翁の强記は、實に天性であつて、翁が七十五年の文化財は、此の强記に負ふものが多いのである。從つて、翁は襁褓のうちに在りし四歳の折の事をも記憶せりとて、後年、己れが名の『熊楠の由來』と題せる記事中にて、概ね左の如く自敍して居る。

自分は、攝河泉三國の太守同樣、毘沙門天の申子といふ事で、小供のとき小學校の教場で、毘沙門の呪を誦したくらゐ信仰した云々。（更に翁の令弟常楠氏の書信に由れば、翁が幼少より餘りにも叡智でありしため、母スミ子も『あの兒は自分などの腹に宿るべき者ならず、全く神の生れ代りなり』と云ひしと、よく姉が申したとの事である）。

楠の字を人名に附ける事は、紀伊藤白王子神社畔に楠神と號し、いと古き楠ノ木に注連を結びたるが立てりき。同國、殊に海草郡就中、予が氏とする南方苗氏の者など、子産まるゝ毎に之に詣で祈り、祠官より名の一字を受く、楠、藤、熊など是

なり。此名を受けし者、病ある都度、件の楠神に平癒を祈る。知名の士、中井芳楠、森下岩楠など皆この風俗に因て、名づけられたる者と察せられ、今も海草郡に楠を以て名とせる者多く、熊楠などは、幾百人あるか知れぬ程なり。予思ふに、是は本邦上世トーテミズム行はれし遺風の殘存せるに非ざるか(中略)。予の兄弟九人、兄藤吉(後に家督相續して彌兵衛に改む)、姉熊、妹藤枝、何れも右の緣で命名され、殘る六人悉く楠の字を名の下に附く云々。

就中、予は熊に楠の二字を楠神より授つたので、四歲で重病の時、家人に負はれて父に伴はれ、未明から楠神へ詣つたのを、あり〳〵と今も眼前に見る。而して楠の樹を見る毎に、口に言ふべからざる特殊の感じを生ず云々(民族と歷史四ノ五)。

上州安中藩の儒官松本奎堂は、三歲の頃、母の背にありて既に伊呂波を覺え、自ら手の中に書き、四歲の時、母に敎へられて大學を諳誦したとあり、遠江の石川依平は、六歲にして詠歌したと云ふが、南方翁の强記は之に過ぐるとも劣ることなく、然も是れが七十年の永きを通じて、聊も渝る處がなかつたのである。

小學校時代の三事業

南方翁は七歲で小學校に入つたが、當時、既に難解の漢籍を、讀みこなす學力を有して居た。然るに明治初期の事として、官尊民卑の弊風强く、殊に和歌山にては舊藩士の子弟が威張りちらしたものである。加之、當時の社會通念として、鍋釜類を販賣する鐵物商を賤業視し、是等の士族の子弟は南方翁を輕んじて『鍋屋々々』と呼び、姓名を呼ぶ者なく、更に五六名の者が集まれば、校庭に於いても路傍に在つても、翁を取圍んで異口同音に『鍋釜賣つても嚊は賣らぬ、嚊にや大事なものがある』と大聲に叫び、手を叩いて囃し立てたものである。翁は當時を回顧して左の如く記述して居る。

(上略)家貧と云ふに非ざれども、父母至て節儉なる人なりし故、金錢とては一文も吳れず、因て家で賣る鍋釜に符牒をつける藍と紅ガラにて、ブリキ板へ習字し、又鍋の包紙にと買ひ來りし內に、訓蒙圖彙十冊ありしを貰ひ、それを見て畫を學べり云々。

とある程で、碌々學校へも遣られぬと云ふ境遇であつた。

然るに翁の偉大なる天才は、夙に靑鼻汁を垂らして居た八九歳の頃から、鋭い閃きを見せたものである。

一、諸種の節用集の抄錄　第一は諸種の節用集(中山曰、我國に於ける簡單なる百科全書)を繙讀し、これを抄錄したことである。翁の自記の一節に下の如くある。

予九歳十歳の頃、好んで諸種の節用集を讀み抄した。其頃、和歌山の町家毎に節用集と大雜書(中山曰、節用集と同種)とは、必ず一部づゝ備へ有りし故、隨分多種を見たが、大抵の節用集の動物門に、海闊子に書てヤシ(椰子)と振假名して居たが、何の事とも分らず、十六で東京へ出て初めて此名が、源順の倭名類聚抄に出るを知つた云々(民族一ノ五)。

二、倭漢三才圖會の謄寫　第二は正德年中に儒醫寺島良安の編纂せる倭漢三才圖會百五卷は、當時、我國の百科全書として尤も廣濟であり、且つ尤も權威ある著述であつた。それを南方翁は、僅に十歳の幼年にして、全部の謄寫に着手し、約五年の星霜を費して遂に完成したのである。翁が昭和十五年三月に六十三年前を回想して、水島爾保布氏に宛てた返信の一節に、

扨、御狀拜讀後、何となく御狀中に『白雪糕とは自然薯を主として作つたものに無之や』と有之しが氣にかゝり、病臥中に色々と舊い記憶をくりかへし候内、小生明治九年より同十四年迄、五年かゝり倭漢三才圖會を全部寫せし其間に、どうも尊問通りの事が有りしやうに思ひ出され候に付、其後快方に赴き候日、倭漢三才圖會を取出し、片端から繙覽候所が、果して其卷第百五、白雪糕の條にあり云々(雜誌「大日」二六五號)。

然るに是等は、翁の自宅内で行はれたこととて、家族以外の者には餘り知られなかつたが、次の「太平記」の謄寫に至つて、遂に神童の名を和歌山全市に謳はれることとなつた。

三、太平記全部の寫本　第三それは、翁が十二歳の腕白盛りの頃であつた。同町内に古本屋があつて、店頭に和裝本「太平記」五十冊が山のやうに積み飾られてあつた。翁は子供心にも此の本が讀みたくて買ひたくて、代價はと訊くと、三圓だと云ふ。現今の三圓なら大食家ならずとも滿腹せぬほどの金額ではあるが、當時の翁としては、容易に手にする事のできぬ大金なので、翁は考へた末、小學校への往來ごとに店頭に起ち、件の太平記を偸み讀み、三枚、五枚と諳記して急ぎ歸宅して、僅に半

年餘りで全部五十冊を立派に寫してしまつたのである。

此の一事は、忽ち全市の大評判となり『それは神わざだ、人間業ではない、實に奇蹟だ』と云ふ聲が高くなり、流石に剛情で學問嫌ひの父彌兵衛も『熊楠だけは別者だ、好きなら本を讀むがよい』と許されたので、翁の學問は漸く芽を出し、和歌山中學に入學することとなつた。

中學時代と母の感化

和歌山中學校時代の翁の行狀に就いては、餘り詳しい事は傳聞せぬが、こゝには其の特異なるもの二三を紹介するにとゞめる。

一、非常なる健脚家であつた　學科の成績は、勿論、儕輩を壓して居たが、健康なる體軀から迸り出る元氣は、潑剌として一擧手一投足の間にも溢れて居た。それに非常なる健脚であつて、早くも此の頃から深山幽谷を跋渉したものである。和中同窓の田中敬忠氏(和歌山縣立農事試驗所技師)の談に、

若い時は非常に足が達者で、和中時代には、人の頭を張つて走り去つたと思ふと、いつの間にか歸つて來てゐると云ふくらゐ、吃驚するほど走るのが早かつたと云ふ事です。此の健脚でこそ、熊野三山を始め、大和紀州の到る處に、南方先生の足跡を印してゐるのです。また其の頃、御坊山に分け入り研究に夢中になつて、二日も三日も學校へ出て來なかつた事があつた。天狗樣に連れて往かれたと云ふ噂が立ち『テンギヤン〳〵』と綽名されたものであるが、併し晩年になつて足が不自由になられた云々。

健脚であつた翁が、歩行も意に任せぬやうになつた事由に就いては、追々と記述する考へであるが、所詮は健脚に頼み過ぎて、無理な採集をした爲めである。

二、不思議なる胃袋の持主　翁は世にも不思議なる胃袋の所有者であつて、いつでも嘔吐したいと思ふと出來るのであつた。

兄は小學校時代からさうで、喧嘩するとパッと相手に吐きかけた(常楠氏談)。中學時代にもよく吐いたもので、學生仲間からハンスウ(反芻)といふニックネームが付いて居た。自宅で食つて來たものを、學校の机の上へ吐いて見せるといふ、隱し藝を實演したものである(田中敬忠氏談)。

翁の嘔吐に就いては、猶ほ記載すべき幾つかの事實を有して居るが、それは各項

に追記したいと思うてゐる。

三、大藏經三千卷の摘錄　翁は中學時代に勉學の餘暇を見て、漢譯大藏經二千冊七千卷を讀破し、其のうち三千三百卷を細字にて摘錄したるもの、實に等身の高さに達して居ると云ふ(和歌山縣人材錄)。猶ほ翁が生涯中に大藏經を三度精讀して居るが、それ等は翁の研究考證を閲したる者ならんには、必ず氣付かれて居る筈だが、その事は、早くも中學時代に胚胎したのである。

四、父と子の間に立つ母の焦慮　翁の父は、資性嚴格であり、これに反して翁の青年時代は、年少氣鋭とて我儘の處があり、此の間に立ちし母の苦心焦慮は、誠に氣の毒のくらゐであつた。母なる人は、女大學流の良妻賢母型の性格であつて、その生家は和歌山市の舊家、朝日屋事西村惣兵衛の次女である(常楠氏書信)。そして、熊楠翁は母の爲人に就き、次の如く記載してゐる。

安政、萬延の交、紀藩江戸詰醫員故德田諄輔氏(退役陸軍大佐正稔氏の養父で、正稔氏は故本居豐穎博士の實弟)將軍家茂公の病痾の事で、苦ヶ島へ三年屏居された時、予の亡母從ひ居しに、毎元旦誰かゞ『柳の下の御事は』と云ふと、『されば其事目出度候』と主人が答へたと數度語られた。代々江戸に住んだ人が、斯かる祝儀を行ふを、和歌山に生れて大阪に數年居た母が珍しい事と思ふて、特に話の種としたのだ(續南方隨筆)。

良家に生れ行儀見習のため他家に奉公し、主人の災厄に殉じて三年の配流生活を送り、嫁して九人の子の母となるや、父は實利を趁ひ子は知識を覓む。此の現實と理想との間に介在する母の心遣ひは、よく世間に見かける處ではあるが、それが南方家にあつては、父が金作りであり子が大天才であるだけに、一段と深刻なるものが存したに違ひない。斯う考へるとき、熊楠翁の學績に、慈母の感化の大きかつたことを想はずには居られない。

大學豫備門時代

明治十七年三月、翁は和歌山中學を卒業し、間もなく上京し、神田區錦町鈴木久七方に寄寓して、同區淡路町に在りし共立學校に入り英語を學んだ。教師に高橋是清(後の首相)あり、同窓に幸田露伴(文博)、橋爪捨三郎(鐘紡副社長)、濱口吉兵衛(翁と同縣

當時、翁は柴四郎(東海散士)著の『佳人の奇遇』を讀み『一尺の我威を國内に振ふよりは、一寸の國權を海外に振へ』の一齣に感奮し、思はず案を拍つて『男子須らく志を立て、海外に雄飛して、神州の國威を振張すべし』と、深く決心する處があつた。

翌十八年、大學豫備門に入り、居を本郷湯島臺の下宿屋に移し、紀州出身の學生二三と同宿した。そして、其の頃の同窓のうちで芳賀矢一(文博、後の國學院大學長)、正岡子規(俳人)、山田美妙齋(小說家)、秋山眞之(海軍中將)、一山直祐(官吏)、木村平三郎(判事)の諸氏と交誼を厚うし、且つ原敬(後の内相)、福本日南(文明評論家)と知つたのも此の時代である。

一、粘菌研究の動機　翁は屢記の如く少年時より、諸種の節用集や倭漢三才圖會を謄寫した程あつて、自然科學といふ事に興味を有ち、中學時代には蟹や蛙を空辨當箱に入れ、自宅へ持歸つて其の形態を寫生し、生活を研究した事もあり、將來は自然科學を以て身を立て、世に處せんとの志望を抱き、好んで英國の大植物學者バーレーに私淑し敬慕して居た。然るに偶々米國の植物學者カーチスが、己れの採取せる六千餘種の菌類を前記バーレーに贈り、以て其の調査を依頼せる由を傳聞し、大いに其の熱心と努力とに感激して、翁は、

渡米前の若き南方翁

明治十九年十二月、翁二十歳にて渡米に際し、此の記念寫眞の裏に大津繪節と都々逸の文句（別寫眞參照）を自書し、友人羽山繁次郎氏に贈つたものである。若き日の翁の不撓の氣魄が眉宇の間に溢れてゐる。

『吾れ又日本に於ける菌類を、カーチスに優る一千種――卽ち七千種の採集と研鑽の功を積まむ』

と堅く自ら心に誓つた。翁が粘菌の考覈に、畢生の心血を傾けるに至つた動機は、實にこれに起因するのである。

二、體操無用論で落第　翁は夙に體操無用論を唱へて居た。卽ち體操など云ふものは、要するに都人士の腹ッぺらしにしか過ぎず、本當の學者には無用なりと云ふのが主張であつた。それ故に翁は豫備門時代、たゞの一度も此の學課に出たことがなく、體操と聞くと教室で讀書するか、さなくば下宿へ歸つてしまつた。然るに其の頃の體操教師は、フランスよりの御雇教師であつただけに鼻息が強く、翁の言ひ分など通らう筈がなく、立派に落第させられてしまつた。翁は憤慨やる方なく、持つて生れた負けじ魂から『ベラ棒め、己れほどの大學者を落第させるなんて、そんな日本には居てやらぬぞ』と大見得を切り、渡米して所期の目的を達せんと、密に其の用意に着手した。考へ方の善惡は兎に角、その意氣や壯とすべきである。

三、青年南方の抱負　越えて明治十九年の春に歸省して、渡米に關し兩親の承諾を得たが、恐らく此の折の事と想はるゝは、翁が友人の羽山氏に寫眞を贈られた件

である。雑賀貞次郎氏談に、

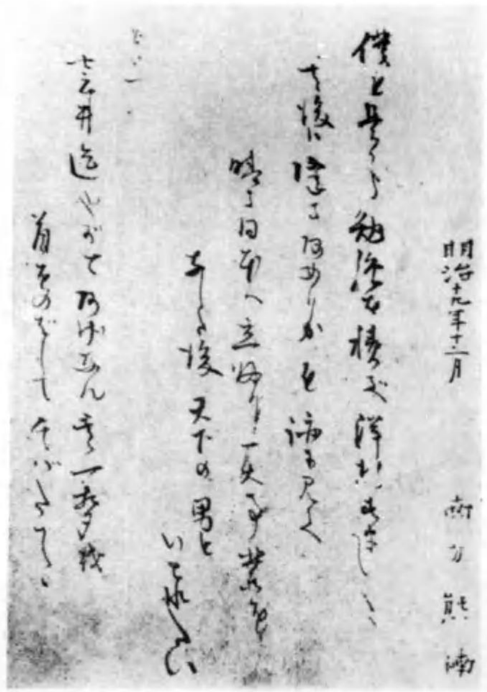
和歌山縣日高郡鹽屋村の山田榮太郎氏方に、南方先生が洋行される間際の寫眞がある。それは羽山繁次郎といふ人に贈つたもので、其の寫眞の裏に、翁の直筆で、

『僕も是から勉强積んで
洋行すました其後は
降るあめりかを跡に見て
晴るゝ日本へ立歸り
一大事業をなした後
天下の男といはれたい』（中山日、大津繪）

（どゞ逸）

雲井迄やがてあげなん其一聲を
首をのばしてそばたてゝ

と書いてある。洋行する前から先生の抱負が、如何に大きなものであつたかと云ふ事が窺はれる。



一　明治十九年十二月　南方熊楠

僕も是から勉强積て洋行すました
其後は降るあめりかを跡に見て
晴る日本へ立歸り一大事業を
なした後天下の男と
いはれたい
雲井迄やがてあげなん其一聲を
首をのばしてそばたてゝ

かくて盛夏の頃まで家に在り、其の間、川瀬善太郎(林博)と相携へて高野山に遊び、年の瀬も迫りし師走の風が漸く都門に入るころ再び上京した。

四、二十歳の秋に渡米　翁の直情徑行は、是れまた天性であつて、それを證據立てる事實は夥しきまで存して居るが、こゝに小畔四郎氏の談を擧げんに、

洋行する時に、クラスメートだつた濱口吉兵衞さんと、仕度のため買物をするから附いて來いと云つて連れ出した。そして神田神保町の洋品店へはいると、一圓札の束をハンカチに包んで、先づ店先きへ出し、『オイ馬鹿にするな、俺ア金を持つて居るんだ』とやつた。どの店へ往つても其の調子なので、吉兵衞さんも困つたと云ふことでした。

斯うして旅裝を整へ、愈々同年十二月に單身渡米したのである。時に翁二十歳。蛟龍は遂に池中の者に非ず、今や米國の空に雲を起し、雨を喚ばんとす。翁の得意や察すべきである。

在米時代の數奇なる生活

渡米した翁は、ランシング大學の農科へ入學せんものと、先づ豫備校にて勉强して居たが、例の體操無用論が祟りをなし、それに教室へ出るよりは圖書館へ往く方が多いと云ふ有様なので、こゝでも美事に落第させられたので、又もや癇癪玉を破烈させ、『べラ棒め、己れほどの大學者を落第させるなんて、そんなアメリカなら學校などへ入つてやらねえぞ』と啖呵を切り、斯くて一時學校生活から離れる事となつたのである。併し、是れは表面の往きがかりであつて、裏面には左の如き事情が潜んで居たのである。そして、其の事情を翁に代辯させるとする。

明治二十年頃、予、三島中洲先生の息、桂氏と、米國ミシガン州立農學校の寄宿舍で、密にホイスキーを購うて、彼邦生れの學生と『法師様』といふ戯れを催し、其より太事件を惹起して、衆人の身代りに予一人雪を踏んで脱走したのが、一生浪人暮しをする事の起りで、國元へ知れたら父母は嘸や歎かんと心配したが、幸ひ双親とも知らずに終られた。三菱創立の元勳故石川六左衛門の息で、仙石貢君の夫人の弟保馬と云ふ人のみ、其狀を親しく睹たのだが、非常に沈默な君子で、六年後ロンドンで三四十日同棲したが、遂に一言も此事に及ばなんだは、今に感佩して居る(中略)。此の遊戯は、さまでむつかしからず、酒客多人環り坐り、其一人手拭で眼を縛り居ると、他の一人が環の眞中に居て『法師様へ、法師様へ、どこへ盃さしましよ』と唄ひ、扨ここかこかと唱へながら、思ひつき次第に人々を指す。假りの盲法師『まだまだ』と云へば、人を指更へ『そこぢや』と云へば、指された人が飲まねばならぬ。飲み了つて手拭を受け、新に法師となること前の如し云々(鄉土研究三ノ二)。

斯うした事情から、國元にも音信を缺くやうになり、若き日の翁の數奇なる生活は、こゝにスタートを切つたのである。

一、料理店の皿洗ひ　當時の翁は、勿論、故國から學資の遞送も絶えて居たので、やむなく旅館の窓ガラス拭き、料理店の皿洗ひなどして、漸く餬口してゐたのであるが、其の窮乏は相當深刻であつたらしい。小畔四郎氏の談に、

南方先生の外遊時代の事は、いろんな人に聽いたが、みんな言ふ事が違ふ。山中(吉郎兵衛と稱し大阪の豪商)といふ骨董屋に聽くと、ニューヨーク時代は、隨分金に困つて居たらしい。『金をくれ、金をくれ』と云ふので、或日、手元に金が無いと斷つた處が、『無ければよろしい』と店の間へグロ〳〵と嘔吐した。こいつには全く困つたと云つて居た。先生はいつでも嘔吐することが出來たのだ。

これの前後、年代はよく判然せぬが、在米時代の食客生活に就き、翁自身が左の如

く記述して居る。

今(昭和九年)より四十四年前(明治二十四年)、予フロリダのジャクソンヴル市の北郊、廣東人江聖聰の牛肉兼雜貨店に寄食し、晝間專ら小賣りを手傳ひ、夕方から夜へかけて、生物を鏡檢圖錄した。困つた事には、店前の空地へ、夕刻から黑人の若者が集つて、音樂の稽古耳を聾するばかり、夜に入れば歌舞吹彈して、諸方の娘や婦人が門邊を徘徊する。夏分になると北部諸州よりの來客は皆引上げてしまひ、商賣はひまなり、仕事はなし、主人は晝夜とも外出がちにて、奉公人も出勤せず、予一人で留守居して鏡檢すると、黑人共が日中から稽古を始め、旁ら店に入來つて、種々の品を盜み食ふ。それを咎むると樣々と、鏡檢を妨害する云々(旅と傳說六ノ六)。

これを擊退するため、翁は奇計を案出した事を長々と書かれて居るが、此の頃の生活が如何に窮迫せしか、又その窮迫中にも猶ほ研究を忘れなかつた態度が知られるのである。

二、曲馬團の書記となる　窮迫のドン底に落ち込んだ翁は、參考書も買へず、讀書の時間にも惠まれず、更に每日の飲食にも事缺くやうになつたので、流石に不出世の大學者の卵を以て任じた翁も、靑息を吐いて居た處へ、翁にとつて一大福音が、天の一方から落ちて來た。それは某大曲馬團の書記に雇はれる相談の纏つたことである。

書記となつた翁は、直ちに一行と共に中米、南米、メキシコ、西印度、キューバ等の各地の津々浦々まで、約五年の永きに亘つて興行して廻り、親しく民情を察し、文物を究めた。翁の日記の一節に、

明治二十四五年の間だ、予西印度諸島にあり、落魄して象藝師に附き廻つた。其の時、象が些細な蟹や鼠を見て、太く不安を感ずるを睹た。其の後ち(五雜組)に象は鼠を恐るとあるを讀んだ云々(續南方隨筆)。「再び日本に歸て」

併し、露骨に云へば、曲馬團の書記とは名ばかりで、實はラブレターの代書役に過ぎぬのであつた。それと云ふのは、とくにアメリカは女ならでは夜の明けぬ國、曲馬團の到る處、一團の女藝人に對して、浮かれ男の甲乙から花束が贈られる戀文が來る。ヤレ今晚一緒に食事がしたいとか、ヤレ明日馬で遠乘りがしたいとか、何の彼のと甘ッたるい限りを盡し、駄句迷辭を聯ねたレターが每日幾通となく舞込む。それに對して一々客の氣に障らぬやう、されば、とて曲馬團の面目も傷けぬやう、柳

に風の返書を認めねばならぬ。これが翁の役目なのであつた。

翁が歐米の事情に通じ、且つ英、佛、獨、露、伊、蘭、アラビヤ、ギリシヤ、ラテン、支那、梵語など十三國の言語に精しかつた基調を造つたのは、實に此の曲馬團の書記となつた賜物である。偶然といふ事が、人間の運命を支配するの甚大なる、寔に思はざるべけんやである。復言すれば、翁が海外の下情を知り、辭書にも無き粹句通言を辯じたのは、全く斯うした事情に由るのである。そして、斯かる逆境時代にあつても、所期の粘菌の採集と讀書とは廢することもなく、折を窺ひ隙を見て研究を續けたのである。

三、義軍に加はり轉戰す　斯くて西紀一八九二年(明治二十五年)に、曲馬團の一行がキューバ島に到り興行した際、同島の革命軍が、スペインの統治から脱却せんとして獨立を企て宣戰し、物情頗る騷然たるものがあつた。熱血兒である若き日の翁は、革命軍が祖國を愛する意氣に共鳴し、空拳を揮つて義軍に加はり、各地に轉戰して功名を顯はしたが、偶々、敵兵に狙擊されて、左胸部に盲貫銃創を受け、野戰病院に後送された。

然るに此の從軍中、鄉里和歌山に於いて、翁の父彌右衛門が永眠したのである。

後年、當時を追憶した翁の書信の一節に、

父は六十四歳にて死するに臨み、眞言宗の信徒なりし故、高野山へ人を登せ、土砂加持と云ふ事をなさしめたり。卽ち土砂を皿に盛り加持し、其の砂の躍る樣を見て、病の吉凶を占ふなり。其の時に加持僧の言はく、此病人は不治なりと。其の者歸りて旨を父に告げしに、少しも動ぜず、これ天命なりとて、恰も借りた物を返すが如く、從容として死に行かれたり。其の時、小生キューバ島に在り、父死する六年前に出立。儀同三司の歌に『その時に着せましものを藤衣、永き別れとなりにけるかな』その如くにて、在外十五年中に父母共に死なし、出立のとき別れしが、生別と爲れり云々。

同天の事業は志と違ひ、異鄉に銃創を病んで、故國嚴君の訃報に接す。南方翁ほどの偉丈夫でも、それを想ふとき、九腸寸斷の感を禁ずることが出來なかつたのである。

なほ翁が支那の革命家孫逸仙と相知り、交りを結んだのは、此のキューバ時代であつて、翁の歿後に發見された寫眞(別項挿入參照)に由れば、若き日の孫文三十二歳、翁二十四歳。兩雄一堂に會し天下を語る、得意察すべきである。殊に翁が蓬髪弊

衣――ふるさと遠く皺だらけの和服のまゝ(恐らく此の服裝にて從軍せしならむ)撮影せるは、翁の面目實に躍如たるものがある。

在英學名昂揚時代

南方翁は創が癒ると、程なく曲馬團を去り、英國へ渡つたが、此の八年の在英時代こそ、翁の學業進歩期であり、又、學名昂揚期であり、苦學期でもあり、更に得意期でもあつたのである。

一、斷食して讀書する苦學

英京ロンドンに來たことは來たものゝ、苦學は依然として在米時代と擇ぶ處がなく、或は劇場の木戸番となり、或は新聞の印紙貼りをなし、漸くにして鹽噌の料とした。翁はその當時を回顧して、次の如く自叙して居る。

明治二十五年、予ロンドンへ往き、ケンシントンのプライスフィールド町といふ陋巷に、一週間十志か何かで二階に住居し、同三十年の秋まで住んだ。胡瓜の漬物ばかり專ら喰ひ、乞食以下の暮しながら、日夜書を仇となし、一考出る毎に書留め置いたものが、今も手元にある。故孫逸仙を首め、木村駿吉(海軍技師、我國無電の功勞者)、鎌田榮吉(慶應義塾長)、加藤寛治(海軍大將、軍令部長)、齋藤七五郎(海軍中將、旅順閉塞隊勇士)、吉岡範策(未詳)等の諸名士勇將、偶ま訪れた折々も、所謂、手筆を措かずで、談論しながら書き續けた。今と成ては自分の手業と思はれぬほど細字だ云々(民俗學二ノ九)。

翁の苦學は更に續き、窮乏、年と共に加重したやうである。此の處、翁をして自ら語らせるとする。

明治二十六年、予ロンドンで、至つて貧しく暮し、居常、斷食して讀書した。直き近所に去年(大正元年)死んだ博覽多通家アンドリュウ・ラングの邸がありて、學友から紹介狀を貰ふたが、街へ出ると犬に吠えられる故、到頭、會はずに仕舞つた。かの『梅が香や隣りは荻生惣右衞門』の句を思出して可笑しかつた。仕事が無いから、當時、パリの(ギメー)博物館に讀書中の士宜法龍師と、以ての外長い書翰で、毎度、雜多の意見を闘はした。何を書いたか多分は忘れたが、其の時の予の書翰は、悉く士宜師の手許に現存すと聞く云々(續南方隨筆)。

然るに、此の時の書翰と想はれるものが、法龍師の遺稿を編纂した(木母堂全集)に

載せてあるが、翁が言ふ通り如何にも長文なので要旨だけを左に抄出して、而立前の若年なれども翁の學殖と見識とを仰ぐとする。

奇人の手柬

ロンドンのブリチス・ミュージャムに數年出入し、彼の書籍館に在りて、梵學の調べを爲し居る、紀州の南方熊楠と云ふ人あり。博學の人にて實に卓見宏識の人物なり。此頃一書を予に送れり(中略)、依て左に書柬を添へ置けり。

(前略)御袈裟一領正に拜受仕り、難有御禮申上候、昔、安覺とやら申す人、入唐して修學し、歸朝の後、其の徒に告げて曰く、吾に一箇の大事あり、祕訣なれども教へん、汝等每朝出てゝ剃髮せる頭を撫て、又功德衣を拜して、心中に誓ふべし。吾は是れ釋迦文佛の法孫なれば、縱令、死すとも功德衣に負かじと。是れは熊楠十四五歲の時、室鳩巢の寫本にて讀みたり。其の如く拜受の日より敬禮仕り候。

扨前日インペリアル・インスチチュートにて、印度學會の夜筵有之、小生も招かれ申候が、何人の紹介とも知れ不申、夫れ故小生は參會不致候、然るに此の招狀は貴師と別れし翌日早く參り候、翌日ビショプスケートの宅にて、中井氏(芳楠?龍動正金銀行支店長)の話には、昨夜公使館にて土宜師に面會せし節、何れへか招かれたりとて、公使館の夜會を畢へず立ち去られたりとの事に有之、右は多分リスダビス先生(龍動大學教授にて、有名なる梵語大學者)へ御越しの事と存じ候、果して然りとせばダビス先生、貴師より熊楠の名を聞かれ、扨て印度會へ熊楠を招くことに相成り候や、小生に取りては面目の事に有之(インペリアル・インスチチュートは、英國女王の親臨して開きしもの)、次回には必ず出席して議論可仕候。面會の節申上げしモニュル・ウイルヤム氏の[佛教講論]は、實に近來歐洲での大著述と存じ候。乍失禮貴師は、古風且つ今日は無用の書を買ひ、先達、本國へ送られしも、內に[佛教講論]の一書見えざりしは、誠に殘念なりし、近日求めて貴師へ呈上せん、旅中の事ゆゑ便利を尊び候間、日本に慥な人あらば、それへ送附せんと欲す(中略)。

貴師は英譯の佛書を持歸りて何にせんとするか、實に笑ふべし。何れも漢譯の諸法師ほどの才、識、學の長者輩にあらず、十分の八九分間に合せものなり。故に英譯の佛書を讀むは、入らぬひま潰しなり。夫れよりは貴師よ、梵教と佛教との關係を調べ給へ、大乘佛教は、理窟や想像は高いが、實地は梵教の卑劣なる處を混入せし事はあらざるか。此の一大事を發見して、大掃除が甚だ望ましく候(中

略)。

貴師、歸朝の日、其の徒に云へ、吾朝の僧徒は戒惠の二つあるも、定甚だ足らず、又外國に留學せし佛徒には、三寶の一と尊ばるゝ者一人もなし、熊楠は甚だ不快に存ぜり。又耶蘇徒のみか、身迦文の律を守る輩まで、佛教を腐敗々々と云ふ。熊楠はかゝる軟骨物を憐笑す。今日の耶蘇盛んなりと云ふも、決して然らず、其の實狀は、貴師既に了知せしならん(中略)。又西洋の開化とて、決して萬年も相續するものにあらず、今日の西洋の開化は、無理な事許りで成り上つたもの。史を案ぜよ。印度盛んなりし時、波斯が跋扈せし時、希臘、羅馬、又シャーレマン、ダメルランより、近代のナポレオンに到る迄、眞の道を講ぜず、唯々利慾を先としたる故、是等萬年の大計と定めし事も、前からはづれる越中褌、起つたり下りたり〳〵、世は碓の播州働き、英國今日榮え、佛國明日興るとも、少しも羨むべき事なし。何れ一度は遠からず、歐洲の天地の暗黑となるは、小生の看て疑はぬ處なり。又日本の僧侶は何の働きも無いが、偶々あれば道龍がカソリックの眞似して、小學校に佛教を用ゆるとか、圓了法師が例の妖怪研究とか、一向に取り留めのなき法螺話。ペルシャ人は、歐洲へ遊べば必ず歸りて新宗義を主張するとか。日本の圓頂連も亦此の弊あり。貴師よ。成らぬ工夫をして、此の樣な事をなすなよ。熊楠曾て聞く、一藝一事に達する者は、假令、山中に隱るる共、大いに其の國の福分を益すとか。願くば貴師よ。此の意を忘るゝ勿れ。三學全備の僧を造れ、多人のホラ吹き賴むに足らず、影法師十箇あるも、一人の小兒に及ばぬ程に、吳々も此の邊も用心せられよ。

熊楠は此の上幾年海外に流浪するもわからぬ。只今アラビヤ語を學び居れり、必ず近年にペルシャより印度へ遊ぶなり。但し熊楠は多分海外にて命終るべし。就いては兼ねて願ひし通り、小生の書籍は貴師に始末方を希はんとす(下略)。

立論の正々たる、主張の堂々たる、如何にするも、是れが二十七歲の青年の記述とは思はれぬのである。殊に佛教を論じて大乘非佛說を看破し、更に歐洲の物質文明の脆弱を說いて、夙に第一次世界戰、及び樞軸對聯合の第二次世界戰の必至を豫言せるが如き、實に經世家ならでは言ひ能はぬ處である。吾が南方翁を單なる一植物學者と評し去る者あらんか。そは未だ、翁の眞骨頂を解せざる者の盲言である。

二、苦學を征服した翁の心境

翁の苦學は、猶ほ依然として續いたが、翁とロンドン時代に交際深かつた本多光太郎(工博、東北大學總長)の談に、左の如きものがある。

南方君は變り者で通つてゐた。夏になつても暑いとも云はず、冬になつても寒いとも云はず、金があれば飲む、飲むと議論をしかける。相手が無ければ寝ると云ふ有樣だつたが、此の寝るに就いて珍談がある。それは南方君は非常に猫を愛してゐて、素人下宿にクスぶつて居た時でも、猫だけは手放さず飼つてゐた。猫に食物を遣るのに牛肉でもパンでも、先づ君が口中に入れて充分に咀嚼し、營養の含まれて居る汁は自分が嚥下して、殘りの滓だけを猫に與へると云ふ方法で、一人前の食物で、自分と猫と二人分の間に合せると云ふ新工夫のものであつた。それで冬になると此の猫を抱いて寝るのだが、是れさへあれば夜具などは要らぬと云うて、煎餅布團一枚の外は、悉く酒代にしてしまつたやうである。これでは猫を可愛がるのか利用するのか、一寸、その堺目が分らぬが、兎に角に學生時分から變つて居た。

苦學を征服した翁の心境に、綽々たる餘裕の存した事が、此のユウモアーのうちに横溢して居るのである。そして、翁と最も肝膽相照した福本日南が、當時の素人下宿に翁を訪問した折の實況を記して、

彼(南方翁)が下宿の一室は、亦中々の見ものであつたと云ふことは、その穢いこと云つたら、實に無類飛切りである。回んだ寝臺に、破れたる椅子、便器の傍らには食器が陣取り、掃除なんか何れの世紀に試みられたか分らぬと云ふ光景であるが、感心であつたのは、書籍と植物の標本とは、幾んど一室を塡めてゐた云々(青鹿集)。

斯うして、幾年かの苦學を續けるうちに、こゝに端なくも翁の造詣の深きを表示し、併せて學名を一時に昂揚する、絶好の機會に惠まるゝに至つたのである。

三、龍動學會の懸賞論文に當選

それは他事でもなく、ロンドン學會にて募集せる、天文學に關する懸賞論文に、翁は多年の蘊蓄を傾けて應募し、第一位を占め、學名一時に人口に膾炙せられ、それが爲め間もなく大英博物館の東洋部調査委員に採用されて、祖國日本及び東洋のた

めに、漸く宿志を達することが出來たのである。其の後、一八九八年(明治三十一年)、ローマにて開催された萬國聯合學會に於いて、翁が畢生の大著である「燕石考」の一部が、ロンドン大學總長ヂンキンス男によりて、各國の碩學大家の面前にて代讀紹介された。續いて有名なる科學雜誌ネーチュアの創刊二十五周年記念號に於いて、英國宮中顧問官バックスレーの序文、及び當時學界の巨匠スペンサー、マクスミラー、ダルキン等諸氏の苦心の大論文と相駢んで翁の論文も掲載せられ、翁の學名愈々歐洲の天地に籍甚するに至つたのである。

全體、翁は外遊時代は勿論のこと、本國へ歸朝してからも暫らくは、學術上の研究は、歐米で發行される雜誌に寄せ掲載し、從つて、學友も我國よりは外國に多いと云ふ實情であつて、名聲も海外に響き、內地には却つて知られぬ有樣であつた。これはやゝ後年の事ではあるが、此の場合の插話に相應して居ると信ずるので敢て附記する。翁の舊友多屋謙吉氏の談に、

私が眼病で京都の帝大病院に入院した時、私が南方先生の友達と云ふことを何處から聞いたものか、有名な木下東作博士や、その他の先生がよく南方先生の話を聽きに來たが、特に木下博士は三日にあげず私の病室を訪ねられた。その折の博士の話に『私がアメリカに居た時に、或人から世界のミナカタを知つて居るかと尋ねられたが、當時、私は南方先生を知らなかつたので、知らぬと答へると、世界のミナカタを知らぬ位なら、お前も大した學者でないと笑はれた事がある。又ドイツへ往つた時にも、同じ樣に南方先生の事を訊かれたので、今度はアメリカの失敗に懲りて居るから、知らぬ南方先生の事をホラを飛ばして、さも知りぬいて居るやうに話すと、そのドイツ人は感心して、世界のミナカタをそんなに知つて居るのなら、お前も少しは學者だなと云はれた』との事でしたが、實際、南方先生は日本的ではなくして、世界的の大學者であつたのです云々。

されば、ロンドンに趣きし我國の名士のうちで、翁の學名が同地に高きに反し、我國に知られぬので輕視し、翁を訪ねて例の嘔吐で擊退された者さへ尠くなかつたのである。

四、革命家孫逸仙を救ひ出す

翁は在英中に、ロンドンに來た母國の名士である既載の人々の外に、加藤高明(首相)、山本達雄(農相)、德川賴倫(舊和歌山藩主)、巽孝之丞(正金銀行支店長)、山座圓次郎(外交

官)などと交りを結んだ。

然るに翁が博物館に就職して間もなく、更に翁の雷名を轟かすべき事件が突發した。それは翁が在米中から管鮑の交りを重ねて居た親友孫逸仙が、支那公使館に監禁された事である。當時の支那政府としては、孫文が烈々火の如き革命思想を、四億の民に對して鼓吹し喧傳することは、元より打捨て置かれぬ問題ではあるが、親友たる翁としては、此の目前の監禁を抽手傍觀するには、餘りにも血の氣が多すぎた。そこで翁は、支那公使館へ怒鳴り込む、文書で攻擊するなど、百方、思ひを碎き手を盡して見たが、到底そんなまやさしい事で釋放さるべき筈がないので、遂に博浪一擊の故智を學び、夜陰、身を挺して公使館に忍び入り、漸くにして孫文を救ひ出したのである。

單なる讀書子と云ふよりは、寧ろ國士としての氣慨に富める翁にあつては、これ程のことは尋常の茶飯事に過ぎぬが、併し此の劇的行動により、翁の學名は、一時俠名に壓せられたのである。そして、翁は在英の折の孫文との交誼に關して、下の如き片鱗を追記してゐる。

吾輩十二三の頃(明治十三四年)まで、兒童の契約に『親の頭に松三本』など云ふが、

若き日の南方翁と孫逸仙

(明治26) 江聖総

和歌山で一汎の風だつた。約に背かば親が死んで其墓の上に松が生えるといふ意味で、斯く誓言すると父母に嚴しく叱られた(中略)。支那にも古來誓言は有つたが近代益々盛んで、予二年斗り其の博徒間に起臥したが、誓言の詞の鄙野極る(中略)。甚だしきは生きた鷄の頭を斷ちて他に拋げ付て誓言するなどある。在英の際孫逸仙の話に、只今支那人が用ゐる下劣な誓言は、悉く歐人に倣ふたもので、歐人と交通盛んならぬ世には、一切無かつたと言はれたが、果して然りや云云(南方隨筆)。

支那が歐洲人のために、國土及び權益まで横領され、その暴戾に苦んで居た事は周知であつたが、更に斯うした精神的の惡影響を受けて居たとは、始めて知つたことである。

猶ほ此の機會に附記するが、翁と孫文との交際は、寔に親密なるものであつて、當時の孫文が肝膽相照らす程の友人は、翁の外には只一人のアイルランド恢復黨員マルカーンより無かつたのである。鎌田榮吉がロンドンにて孫文と親交ありしものゝ如く傳ふれど、實際は、翁が大英博物館にて孫文を、德川頼倫侯に紹介せる折に鎌田氏は、傍にありて孫文と二三の世間話をなしたるに過ぎぬとの事である。

南米に流離苦學中の翁は中華民國の革命兒孫逸仙と相識り肝膽を照し合ふ間柄となつた。此の兩偉人の人交の金斷の文に就ては本文に記したが、此の當時の翁の苦學の行方は、その無頼漢なる著衣からも窺はれる。

されば明治三十三年の秋に、翁が愈々ロンドンから歸朝する際に驛まで見送つたのは、實に孫文とマルカーンの兩名だけであつたと云ふ。又、以て翁孫の交りが、刎頸も啻ならざりしを知るべきである。

五、名物フロックコートの由來

翁が大英博物館に在りし時、舊領主德川賴倫侯、及び前田正名(水産家)、野間口兼雄(海軍中將)の三名を、同館の祕密室に案内して驚倒させた惡戲話は、餘りに著聞して居るので玆には省略するが、此の德川侯の歡迎に就き、翁は其の消息を次の如く記述して居る。

明治二十七年、德川賴倫侯ロンドン入りに及び、夫人が現當主賴貞侯を懷姙して著帶の報あり、カフエ・ヴレで紀州人數輩を聚めて祝筵の節、西人に勝ち戰(私註。和蘭人シュレッゲルと、落斯馬に就き論爭し屈服さす)の始めをやつた者が、舊領より出たとは慶事と有て、中村啓太郎(衆議院議員、翁の親友)の兄で、三年前に冥途へ轉任せる巽孝之丞氏を使として、予をも招かれたから、黑猫同然、夏冬著替へなしのフロック・コートで往て席末に列した。そは明治二十二年の仕立で、三位中將重臣樣(三好子爵)の令息より貰つた著古し、破れ次第に不斷繕ふから、論理學常問題のテーセウスの船と一般、古いとも新しいとも齊しく云ひ得る希代の珍品だ。明治二十四年クバ島で見出した石灰岩生地衣を、シカゴのカルキンス大佐經由、巴里の地衣學王ニイランデーに贈り、二氏が之にグアレクタ・クバナと命名したは、歐人の繩張り內で、亞人が生物新種を發見の嚆矢と譽められた。五年前(私註。昭和四年六月一日御召艦長門で、將相廿人ほど陪席の間で、他の動植諸品と共に、其の標本を天覽に供して進講の際も、件のフロック(中略)。草莽の微臣に取て、洵に吉瑞極るフロック・コートと十襲して居る云々(ドルメン三ノ五)。由來を聽けば誠に難有き事であるが、又以て翁が物を大切にし、儉素に努める心懸けを知るべきである。

六、在英時代の翁の學績

在英八年間の翁の學績は、決して尠少では無いのである。下に其の主たるものだけを列擧する。

一、日本古文篇の大成　ロンドン大學總長ヂッキンスを助けて、日本古文篇を大

成し、ケンブリッチ大學より出版させ、更に同總長と鴨長明の「方丈記」を英譯し、王立アジヤ協會から發行させるなど、翁の學績は永久不滅なものである。

二、東洋部書目の編纂　翁が心血を傾けたものは、大英博物館の東洋部書籍目錄の編纂である。それこそ汗牛充棟も啻ならぬ圖書に就いて、一々解題を附し、著者及び年代を明めるなど、實際、翁の深遠なる學殖と、異常なる精力とでなければ、成す能はざる大事業である。今に同目錄が學者の間に珍重されて居るのは、全く翁の賜物と云ふべきである。

三、大英博物館の珍品　翁が博物館に在勤中に發見せる、ヒロデス、クニアックスと稱する珍蛙は、翁が西印度諸島を遍歷せる折に、キューバの首都ハヴアナの東方マンザス附近にて獲たる、學術上の新資料であるが、英國學士院會員プランゼー深く之を珍重して、翁に請うて同博物館に陳列し、現に同館に光彩を放つてゐる。

四、日本の船名の丸の考證　翁は往古から難問とされてゐた、日本の船名に、丸と號ける事由を考證して學界の絶賛を博し、今にロイド船名錄に其の事が抄載されてゐる。

五、日本畫本の目錄編輯　一九〇三年(明治三十三年)ロンドンの南ケンシントン美術館で、翁は小脇源太郎の後を承け、日本畫本目錄の編輯を完成した。

斯くして翁は、彼の勤續四十年を以て歐洲の學會に有名なるキングスカレッジ教授ダグラスが、『南方は大偉人なり』と敬服し、更にロンドン大學總長ヂッキンスを『南方は、それ偉常の人か、東西の科學と文學とに兼通せり』と驚嘆させたのも、決して偶然ではなかつたのである。

七、角屋先生と綽名さる

在英中の翁の奇行逸話を擧げんか、それこそ僕を代ゆるも猶ほ足らぬと云ふ有様であつて、筆者が耳聞しただけでも、到底ここに書き盡せるものではなく、よし書き盡せるにしても、さう羅列する必要も無いので、今は一二にとゞめる。

翁には酒癖があり、壯年の頃までは、これが爲めに思はぬ失敗もあり逸事もあつた。翁はロンドン中の居酒屋(此の種の酒鋪は言ひ合せたやうに街角にある)を飲み廻り、自ら醉李白を以て許し、天子召せども船に上らずを極め込んで居るので、福本日南から『角屋(かどや)先生』の綽名を奉られ、それでも翁は『吾輩は食ふ物は食はなくとも、飲む物だけは飲んで勉强した』と得意であつた。

現存の名士ゆゑ、姓名は祕して置くが、某貴公子がロンドンに到り、餘りにも翁の學名の高きに心動き訪問せしに、これは又寓居の餘りに陋穢なるに蔑視して、天窓から嘔吐を見舞れた話は、一時、在留邦人間の好話題となつたものである。住年、雜誌「不二」の插繪に、翁が嘔吐でバカと書いて居る處があつたので、或人が是れの實否を翁に質すと、翁の曰く『いかに吾輩の嘔吐でも、片假名では書けぬ。平假名ならば と思ふが、まだ書いたことはない』との挨拶だつたと云ふ。

それからロシヤの植物學者オッサン・サッケン伯と、學會の席上で大議論を闘はし、亂醉の結果とは云ひ、オッサン伯の鼻ッ柱を齧つたので問題となり、遂に大英博物館を免職となつたのも、有名な逸話として數ふべきである。後年、翁は『これが日本人同志なら、昨晩は酒の上で鼻ハダ失禮した位で濟んでしまふのだが、毛唐人には此の酒落は通用せぬのでクビになつた』と筆者に語つたことがある。

八、英女王より研究費を賜る

翁が二度目に大英博物館を免職され、青菜に鹽の如く萎れて居ると、突如としてヴキクトリヤ女王からの勅命で、一日一ギネで當分植物學を研究せよとの御沙汰があつた。其の時の翁は『彌次喜多が富籤の當り札を拾つたやうな元氣と感激』を覺えたのであるが、これは英國の帝室が、窮乏せる學者や技術家、又は有益なる著述などに着手して居て、研究費に苦しむ者があると、其の事の狀態により、或は一年、或は半年と、薪水の助けにと日々若干額の內帑を下賜されたものである。翁も此の露の惠みに浴したのであるが、勿論、これはヂッキンス總長の奏請に由るものと は云ひ、窮するも又た名譽なりと云ふべきである。

斯くて明治三十三年の秋、在外十五年の研究を終へて、歸國の途に就いたのである。

九、在外十五年にして歸國す

明治三十四年正月に、翁から福本日南に寄せた左の書簡は、翁の當時の心境を知るに好き資料と考へるので、例によつて摘要する。

新年の嘉儀芽出度申納候、昨年は中山氏(孫逸仙)の居所教へ下され有難御禮申上候、早速、書狀差出し候處返辭これあり、今春は小生方へ來る由に御座候、一體、同氏の一學などは、多少水滸傳がかりたる事にて、霹靂火日南、華和尙熊楠などの人

物を多く集め、白馬でも斬てスキ燒に致し、大嘯鼓、大吹角、和尙こゝに於て滿々と酌み、一返に飲み乾しければと、高井蘭山流にやらねば、合戰は出來るものにこれ無く、又、敗軍ともならんには、和尙一人踏止り、例の嘔吐にて敵を破ること、何の雜作も無きことに候に、惜い哉、彼れ年少氣鋭にして兵法を講ぜざりし事よ、魯人勾踐が荆郷を惜みしが如く、嘆息致し居り候(中略)。

但し、今回小生ロンドンを去るに臨み、角屋(居酒屋)の亭主、酌女ども別れを惜み、椅子に居据つたまゝ動かぬより、領布振山の昔を思ひ、石にでも成りはせぬかと問ひ合せしに、毎度ながら餘り尻が永いので、各々歸宅の道の遠きを案じ、容易に動かれぬとの苦情、それではとヤオラ戸外に出づれば、毎屋、半弔旗を揭げ候、扨は南方先生の去るを悲む古意かと思ひきや、女王の伴が死んだのと、イタリー王の鐵砲疵のお弔ひの爲めと聞き、、

飲む人も飲まるゝ酒も諸共に
如露如小便應作如是觀

歸朝の船中四十五日、小生胸に一物あれば下等に乘り(中略)。神戸に上陸すれば五圓しか囊中にこれ無く候、歸國後毎日大酒致し候に、兄弟呆れ果て候故、酒屋(中山曰、翁の令弟常楠氏は、和歌山隨一の酒造家、早大出身として、故大隈重信侯より命名の銘酒(統一)の釀造元である)が酒を悲む理由奈何と問ひ候へば、如何にも酒屋は酒徒の多きを悅び候へど、家兄の如く無錢多飲の客はあらずもがなと遣り込められ、返答出來ず、こゝ少々閉口の體に御座候(下略)。

全幅、酒香に滿ちて居るが、その運墨の間に、翁の面目の躍如たるものがある。猶ほ孫文の來訪に就いては後記する。

田邊町學業大成時代

一、生家の退轉と熊野三山の跋渉

翁が海外に十五年の星霜を送るうちに、生家の實狀も一變してしまつた。それは翁の兩親が物故すると共に、翁の長兄である藤吉が家督を相續して父の名を襲ぎ彌兵衞と改め、國立第四十三銀行及び和歌山紡績會社等を創立して、實業界に相當の羽振りを利かせたが、徒らに名大にして實伴はず、家産は漸減の一路を辿り、僅

に五年にして蕩盡したのである。

然るに是れより先き、父彌兵衛は彌右衛門となり、三男常楠を携へて隱居したが、臨終に際し、所有せる財産を遺兒たちに分配し、熊楠翁の分として相當額(現金一萬六千圓と傳聞す)を殘して置いた。翁は歸國後に此の顚末を令弟より聽いたが、學問に生命を打込んだ翁は、其の分配額の全部を常楠氏に提供し、代償として毎月若干(月額金百五十圓と傳聞する)の研究費を、生涯送らるゝ約束で翁は別家獨立する事となつた。

そして、歸國直後の翁は、故郷に近い大阪府泉北郡深日村田川の理智院といふ寺に假寓したが、同寺は山間の淨地として、粘菌の採集にも讀書にも好適の處であつた。やがて翁は、和歌ノ浦の圓珠院の住職愛宕貫忠和尙と相識り、約半年ほど寄宿したが、此の間に翁は寺門の櫻樹から新種の粘菌と、手水鉢から光り藻とを發見し、土地の人から『無慾の先生』と評判されたものである。

斯くて在る間に、翁は那智山中こそ研究資料の豐富に存する事を察し、幸ひ令弟の支店が、東牟婁郡勝浦町にあつたので、其處を宿泊所として、先づ那智の大雲取、小雲取、玉置の諸山を八十餘日も籠りつゞけて跋渉し、次で熊野三千六百峰を片端から踏破した。翁の衣鉢を嗣いだ逸材小畔四郎氏、明治三十五年正月七日に初對面したのも、實に那智の一ノ瀧の下であつた。小畔氏當時の回顧談に、

寒い時だつたので、私は菜ッ葉服を着て草鞋を穿いて那智山へ往き、さて瀧を見ようと一二町手前まで往くと、和服を着た大坊主が、岩角で何か一心に見詰めて居る。一寸、見ると中學校の博物の先生のやうな感じがした。私は蘭に趣味を持つて研究して居たので『どうですか』と話しかけたが『フン』とか『ウン』とか云つたゞけで、一向、相手になつてくれない。それで蘭の話を持かけると、やつと話に乘つて來た。蘭の學名などもよく知つて居る。これは話せさうだと、私は名刺を出し『郵船に勤めて居る』のだと云ふと、その大坊主先生『ワシは此處で微生物の研究をして居るのだが、郵船の連中ならロンドン時代によく知つて居る』と、ロンドンの話が出た(中略)。

それから石段を登つて中川雨石さんのとこへ往くと、その大坊主先生が『ワシが南方だ』と云ふと、雨石さん『あッ先生で』と云ひながらパッと飛び下つてへへェーと頭を下げ、それから羊羹を出すやら、お茶を出すやら、とても偉い騒ぎ、私は全く面喰つて、此の大坊主そんなに偉い先生なのかと眼をパチクリ――雨石さん

は何か青い石を出して『これは天光石と云ふのですが、一體なんでせう』と尋ねた。私が『隕石だらう』と云ふと、先生は、それから隕石の話を始めた。その詳しい事詳しい事。信州善光寺にどうのかうのとか、日本に隕石が始め落ちたのは、天明何年の何月何日、何々村にとべラ〳〵べラ。餘り詳しすぎて嘘やら本當やらわからん。

暫らく雨石さんと話して歸らうとすると、先生も腰をあげて『君は中々面白い、一緒に歸らう』と、石段を降りる時に、私に何かはいつた風呂敷包を持たせて、やをら立小便だ。そして暫らく往くと立どまつて又立小便、まるで犬のやうだ。おかしな人だと思つて居ると、先生は『いや是れは誠に失禮した。君が生意氣に洋服を着て居るので、英語などを喋るとワシはラテン語で應待し、まかり違ふと是れで毆つてやるつもりだつた』と、私に持たせた風呂敷包から、取り出して見せたのは採集用の金槌。いやどうも危いところでした(中略)。これが私と先生との抑々の會ひ初めで、その後文通が續いたわけです。先生は『君、僕が手紙を書いたら、すぐ返事を寄越せ』と云はれ私もその通り實行したので、四十年間ずつと文通が續いたわけでした。

翁が那智山中に研究對象をあさつたのは、決して一再ではなかつたのである。翁の自叙の一節に、

七年前(明治三十七年)嚴冬に、予那智山に孤居し、空腹で寢たるに、終夜自分の頭拔け出て、家の横側なる中部屋の邊を飛び廻はり、有り〳〵と闇夜中に其狀況を詳しく視る。自ら其精神變態に在るを知ると雖も、繰返し〳〵斯くの如くなるを禁じ得ざりき云々(南方隨想)。

されば翁が那智や熊野の總てに精通して居たことは驚くばかりで、少しく誇張して言へば三千六百峰の一木一石でも知らぬものは無いとも云へるのである。

田中敬忠氏談に、

大雲取地藏茶屋の繪馬堂の事、三里村(玉置山麓)の萩にはどんな種類の植物があるとか、那智山の秋海棠は特殊なものであるなど、何から何まで實によく知つて居られた。和歌山城の壕の埋立に反對され、内廓外廓ともに是れほど完全に殘つて居る城は、全國にも少いと史蹟指定前から是れが保存を力説された。また富田の千體佛なども、最近、喧しくなつて居るが、既に明治三十八年ごろ是れが研究調査した事を記錄されて居る云々。

翁の研究は、專門の粘菌以外に於いて、弘く歴史學、考古學、人類學、民俗學にまで及んで居る。此の傾向は年を追うて擴大されたが、それ等に就いては餘り深く言及せぬことゝする。何んとなれば、翁は雜學者と言はれ物識りと評せらるゝを厭ひ、自らは飽くまで植物學者を以て任じて居たからである。猶ほ翁は那智に續いて西牟婁郡二川村の安堵山(紀和國境)に十數日籠つて『南方丁字蘚』等を發見し、日高郡川上村の妹尾官林に約一ヶ月留まりて『高等菌類』三百餘種を寫生されたのである。

二、田邊町を永住の地と定む

然るに翁と和歌山中學で同窓の喜多幅武三郎が、大阪醫學校を出て田邊町に開業し居ることを耳にし、二十年振りに同師を訪ねて寄食したが、前に黑潮寄する紀州灘を擁し、後に那智熊野の連峰を控へし田邊町の景觀が、深く翁の心を捉へしものか、次で同町多屋壽平次方へ、理髮業の床条の家へ、更に野田定吉方へと三年餘を獨身生活を送るうち、喜多幅醫師の媒酌にて、夫人松枝子を迎へることゝなつた。夫人は『源平盛衰記』で著聞してゐる縣社闘鷄神社の祠官田村氏の女、貞淑柔順の美點を備へてゐた。此の時、翁は四十歳、夫人は二十八歳、共に初婚であつて、然も共に童貞を保持してゐた。後年、翁からY氏に宛てた書信の一節に、

小生、四十歳まで婦女を近けず、然るに妻を迎へしに一夜にし姙む。男子を擧ぐ、幼名を墓六と名づく、これ便々たる腹をツキ出して這ひ廻る有樣の、よく墓に似たるを以てなり云々(中山曰、これ長男熊彌氏の事である。後に長女文枝さんを儲けた)。

猶ほ松枝夫人の貞淑振りに就いては、後昆に傳ふべき幾多の美談を耳聞してゐるが、兎に角に剛情の僻に神經質であり、惡意は無いが毒口の多い翁を所天と仰ぎ、翁をして三十五年の永きに亙りて、斯學の鑽研に專念させた內助の功に至つては、全く日本婦人の龜鑑とも云ふべく、されば翁も夫人に對しては、常に『お前は己れより偉い』と感謝され、夫人を知れる土地の人達は『奥さんは、乃木將軍の夫人のやうだ』と評判したが、今はこれだけにとゞめて他は省略する。

三、孫文來市すれど翁に會はず

明治三十四年の春、一代の革命家孫逸仙は舊約を履み、翁に會うて英京以來の久濶を叙し、併せて公使館より救出された禮を述べんと、中山某(中山は孫文の表德

である)と變名して和歌山市まで密訪した。

然るに當時の我政府は、孫文を危險人物視し、東京に在住する事さへ認許せざるより、孫は犬養毅、頭山滿、宮崎滔天等の理解と同情により、或は横濱に隱れ、或は友人の家に潜むなどして、機運の熟するを待つたのである。殊に我が政府の最も惧れたのは、孫文を、共產主義を基調とする社會主義者であると誤信したことである。今に笑話として傳へらるゝ處によれば、政府は社會主義なるものを極度に危惧せるため、社會といふ文字までも嫌厭し、明治二十七年には「昆蟲社會」と題せる雜誌を不穩當として發賣禁止を命じたと云ふことである。

斯うした時代に於ける孫文の旅行は、決して自由なものではなく、ブラックリスト上の注意人物として、孫文の影の地に印するところ必ず密偵が隨うて居たのであるから、翁に通知する事もできず、且つ面談する自由も容易に得られなかつたと想はれる。殊に『孫文來れり』とて特種にせんと新聞記者に追ひかけられたことは、益々孫と翁の邂逅を困難ならしめたに相違ない。更に孫文として遠慮せなければならぬ點は、自分が翁と深い交際あることが、萬一にも翁を誤解させ、或は意外の迷惑を懸けるのではないかと云ふ事である。斯うした諸般の事情は遂に兩雄をして、再會する機會を與へなかつたのであらう。況んや當時の翁は、孫文の來訪も知らずに、那智山中で粘菌の採集に、日もたらぬと云ふに於てをやである。

野口利太郎氏談に『孫文がフィリッピンで粘菌を採集して、其の木の皮へ署名したのが、和歌山(常楠氏宅)に置いて在るのだが、今度、汪政府になつて中山記念館が保護される事になつたので、これも記念に寄附しようか』と翁が語られたとあるが、此の署名入りの珍品は、恐らく翁が在米時代に孫文より贈られたものではあるまいか。

四、睡眠四時間と粗衣粗食の實行

翁は田邊町に住居する以前から、睡眠四時間主義の實行者であつて、夏でも冬でも四時間以上は睡眠しなかつた。そして、勉强は夜分で家族が寢てから始め、晝間は眠むるのが習慣となつてゐた。曾て翁の家に宿泊した事のある上松翁氏の想出話に、

翁の書齋は本宅の離れ座敷(平家建で約九坪)で二た間になつて居り、書庫は別棟の土藏(二階建で約九坪半)であるが、私は此の書齋の次の間へ寢かされた。翁

は夜中に讀んだり書いたりするのであるから、なにか參考書が要るとなると、机の上にある懐中電燈(以前はぶら提灯)を點じて、ガラ〳〵と雨戸をあけ、次で書庫の遣戸をガラ〳〵とあけ、書籍を携へて書齋へ戻り、半時間か一時間もたつと又懐中電燈を提げて、ガラ〳〵と雨戸を繰り遣戸をあける。私はこれが爲めに一と晩中眠られず全く閉口してしまつた。聞けば短い夏の夜でも二三回、秋の長夜には四五回もあるので、大抵の來客は其の都度夢を破られ安眠が出來ず、誰でも彼でも懲りてしまつて他へ轉宿するとの事だ。岡書院の岡茂雄氏も、これで散々惱まされたと聞いてゐる。

更に翁と同町に住み、三十年の雅交をつゞけた雑賀貞次郎氏の追憶記に、

先生はこゝの(書齋)押入れに棚をつけて書籍を詰込み、北側の壁にも幾つかの棚をつけて書籍を積んだ外、疊の上にも幾つかの筋にして書籍を二三尺の高さに積並らべ、その間に纔に座るだけの空間をつくり、そこに粗末な小机を据えて坐して居られた(中略)。書籍と標本は先生の外、誰にも手をつけさせなかつたし、何年も積込んだ儘だつたので、そこらは埃が積もり白くなつて居り、板縁は標本類を置いて居られたが、埃で足の持つて往く處もない程であつた。先生は此の

南方翁の書齋

翁は後、書籍其他を整理したが、それでも生前の光景が偲ばれる。翁は障子に立てかけて散歩用の杖、バケツは粘菌類の屑の容器。

翁の書庫と名木安藤蜜柑

舊土藏を書庫となせるもの。書庫前の老樹は名木の安藤蜜柑。（照參文本）

書齋で、冬でも必ず障子を四方の隅で二寸ばかり明けて置かれ、又夏も障子を明け放つやうな事はせられなかつた(此の二三年は書齋が本の爲に坐る處がなくなつたとて、本宅の方でお仕事をされてゐた)云々。

先生は夏でも團扇などは殆ど用ゐられず、蚊が來れば時をり手で叩かれるだけであつたし、冬も多く火鉢を用ゐられず、左手に手袋をはめ、右手はものを書くので手袋をはめられぬので、ふところへ懐爐を入れてゐて、それで折々右手を溫められた(尤も晩年は火鉢を用ゐられた)云々（旅と傳說十五ノ四）。

翁は又、極端と思はれる程の粗衣粗食主義の實行者であつて、飯米には麥の外に翁の工夫から稗、或は黍の實などを加へたものを常食とし、味噌汁は大好物とて朝夕とも用ゐた。田中敬忠氏は、翁の平生に就き左の如く語つてゐる。

南方先生は、頗る情に厚く義理堅いお方で、一旦、約束すれば必ず果し、一生忘られぬ恩義の高い方であつた。それであるから何事でも熱心で、研究に着手すると三日二晩、四日三晩は、ぶつ通しで研究せられ、晝は休まれ夕方に起きられ夜中まで研究をつゞけ、時には反對の場合もあつたが、休まれゝば直ぐ高鼾をかゝれ熟睡された。枕元には原書などの古典に、日記帳とジッテ(十手)が置かれてあつ

た。お若い頃は大酒されたが、晩年は一滴も飲まず、煙草は頗る好きで、風呂は體を溫められる關係から、長い場合は二時間ぐらゐ入られた。食事は御自分一人でなされた。副食物としては、海藻類とか生食用蔬菜のトマト、レタース、又はオクラ、コーダービン、糸爪の幼莢などを好まれ、更に鰻や燒豚を悅ばれた。間食としては駿河屋(田邊)の燒饅頭が大好物であつた。服裝はこれ又頗る質素で、筒袖の襦袢に縞かカスリの木棉の着物に、角帶を貝の口に結ばれるが、研究には上着を脫ぎ、筒袖の襦袢に腰卷へ前垂をかけ、顯微鏡を覗かれつゝ一方で寫生畫を描かれた。

曾て上松翁氏が、住所に近い品川名物の生海苔の佃煮を翁に贈つた處が、美味のため鼻血が出るとて斷り手紙を寄せられたとの事である。翁の粗食主義も又た徹底したものである。因に翁が寢るに際し、枕上に十手を置いたとあるが、此の十手は採集用のもので、高い枝を折るときには、これへ繩をつけ投げあげて用ゐたとの事である。

五、世界の四大蒐集家となる

田邊を永住の地と定めてから、翁の研究は本格的に進められた。粘菌の採集も年を追うて成績を擧げ、讀書の範圍も頗る擴大されたのである。然るに或年の冬に、隣國なる奈良縣大臺ケ原に赴き、酷烈なる寒氣を冒して約一ケ月に涉り、露營を續けて研究したが、それが爲め惡質なるリヨウマチスに罹り、遂に治療の効なく右足の自由を、半ば以上失ふこととなつたのである。

翁は、餘りにも自己の健康に賴り過ぎて、不覺にも右足の自由を損ずる事となり、從つて深山幽谷を踏破するは困難となつたが、田邊こそは那智熊野の聖地に近く、且つ此の聖地こそは開闢以來、斧鉞を知らぬ處女林があるので、居ながらにして採集の便ある田邊を、理想境として安住することゝしたが、剛情で負けじ魂の强烈なる翁は、不自由なる足を曳きずつて採集に努め、米國のマックブライト(Thomas H Mabrido)、英國のジイ・リスター女史(Gulielma Lister)、錫倫嶋のペッチー(T, Petch)と幷せて實に世界の四大蒐集家たる榮譽を擔ふに至つた。翁の得意また想ふべきである。

就中、翁とリスター女史とは、書信及び論文などを通じて誼を厚うするやうになり、次で女史が翁の學殖と風格とを信賴すること頗る深く、第一回の世界戰爭の起る

や、獨軍の飛行機が英國を襲撃するのを恐れた女史は、多年蒐集の稀品を翁の許に輸送して來た。これに關し翁の書翰の一節に、

（前略）ドイツ飛行機、英國を襲ふこと頻りなるより、粘菌學の大家（恐らくは粘菌の最大集彙家）リスター女史が、折角の集彙が一朝咸陽の一炬に歸し了らん事を懼れ、日本にはそん事なければ、世界の一隅にても幾分か殘れといふ廣い心から、粘菌中、日本に無き希覯の品を悉く丁寧に調べて、小生へ二度に寄せられ候、前の分は一昨々年（大正五年）安着す。　扨後分は前分より、ずつと多數なるが、一昨年（大正六年）七月に神戸へ着せしに、神戸の種子類檢査所の技師は、之を農産物種子なりと斷定し、非法の課税を小生に加へ、彼是いふて其品彙を小生に渡さず、因て事由を述べ、粘菌は決して農産物に非ず、純粹の科學的研究の物なり、課税の金額は姑らく別として、之を承諾して一とたび納めんか、今後小生方へ世界の諸方より到達する動植物の標品は、之が先例として悉く課税せらるゝも知らず、山本農相（達雄）等政府に小生の經歷を知つた人多ければ、小生は此事を大臣どもに訴へ、又海外へも公告して其非を鳴らすべしと云ひしに、倒々、免税處分をして小生へ渡され候も、其爲め彼是一ヶ月餘を費したるを以て、抑留中、注意行屆かず、善盡し美盡して選擇されたる標品中、若干はかびを生じて全く腐敗し了り、殊に惜むべきは、英國外へ始めて配布されたる（日本などにては夢にも見る能はざる）西アフリカ產の諸品の如き、全く影を留めざる次第と相成り申候、是等諸品たる小生行く行く決して之を私有せず、必ず東京大學等に寄附して、永世に吾國の學界の裨益を圖るべき積りの物なるに、如是き仕方實に嘆息の外なし云々（大正八年八月十四日發、上松蓊氏宛書信）。

何時の時代にも、物の道理をわきまへず、何事も杓子定規で律せんとする俗吏のあるは困つたものであるが、此の横車を吾が南方翁にまで押通さうとして、其の手で往かなかつたのは、實に痛快のことである。

六、粘菌檢鏡の苦心と翁の悲壯の態度

粘菌の發見には、實に撓まざる檢索を要するは勿論であるが、罕には偶然に成功することもある。翁が斯界を驚嘆させた新種ミナカテルラ（Minakatella longifila）の如きは、實に翁の邸内に在りし柿の樹より得たものだと聞いて居る。田中敬忠氏談に、

南方研究園(自邸内)の植物は、各種適所に栽培又は安置され、自然の儘で一切枝葉は剪らず栽培されて居るが、手入れをしないのに良く生育する。樹木も雜草も、其の一木一草たりとも頗る大切で、何人たりとも手を觸れさせない。時々、先生は桐の利久下駄をはかれて手に擴大鏡を持たれ、腐朽せる樹幹などの菌類を見られるのであつた。殊に龜と墓が好きで、北庭には龜池と墓とを飼はれ、南の椽側に蓑龜、河鹿、鳥類、鯉など飼育せられ、四季を通じ特殊植物の鉢植を、研究の傍ら眺められ、特にヒメカキツバタ、ヒメシャガ、ムーンフラワー、キンセンクワ、ガンピなどの開花するのを、非常に樂しまれた云々。

そして、此の粘菌を檢鏡するには、極めて機敏なる措置と、熟練せる技巧とを必要とした。翁が晩年(昭和十三年元旦附)の自記ではあるが、此の間の消息を詳叙し、且つ高貴の方の御招ぎをも拜辭した悲壯の態度に就き、井上藥村氏に宛て概ね次の如く報じて居る。

(前略)小生、此の邊土に退隱、永々と生物學上の實驗を爲し居り、その實驗も一年に一度、それも纔かに五分か六分にての觀察を取り外せばそれッきり、又々來年の其日其時を俟たざる可からず、扨その五六分間の動作は、寫眞に撮る事もならざる速度のこと多く、種々の劇藥を以て卽座に其微生物を固定せしめて保存し、扨永々と觀察の外なし(中略)。

三四年前、故久邇宮多嘉王殿下に拜謁、近嶋御說明申上げたる事あり、當地附近にて小生始めて育てあげたる水レモンの實、折柄六個成熟、是れ内地最初の收穫なるを獻上せしを、京都へ御持ち歸り御翫味の後、其の種子を御邸内の溫室に蒔かせられしに發芽して、昨年(昭和十三年)七月一つ結實成熟せし由、御知らせを賜りし。扨年末に妃殿下二若宮一女王と偕に當地附近へ御再遊、其の若宮御一と方は生物學御嗜好にて、何か其方の咄しを聞召されたしとの御事にて小生を召されしも、多年、室内に坐つて計り居る故脚動かず、尤も自動車を差し向けられたる事と察せしも、丁度例の實驗觀察が眼前に差し迫れる際の事とて、乍遺憾御斷はり申上げたる所、一昨々日(十三年十二月二十九日)御出發に際し、特に御菓子を賜り候次第、宮樣折角の御召しをさへ事に臨んでは拜辭し奉る儀、餘儀なき事を御洞察の上云々(雜誌「大日」二六五號)。

斯うして多年の經驗から、翁は、他の人々には顯微鏡ならでは鑑別し得ざるものでも、五六倍の擴大鏡にて事足りたと云ふことである。猶ほ翁の學績に就いては、

項を改めて記述する。

七、翁の强記博覽と民俗學的考證

翁の記憶が如何に强盛であつたかは、翁が過ぎ去つた四十三日間の日記を一氣に書きつけて、晴雨の天候は勿論のこと、來訪の誰彼まで少しも間違はなかつたと云ふ一事に徵するも、他は推して知るべきである。翁は常に自語して『吾輩は地獄耳で、一度、聽いた事は決して忘れぬ。又忘れてしまひたいと思ふときは、奥齒をキユウと嚙んで舌打ちすると、すぐ忘れる』との事であつたが、翁は耳ばかりでなく、眼も亦た地獄眼であつて、一遍、見たものは斷じて忘れぬのであつた。大藏經を三度び精讀したとか、內外古今の書籍を讀破したとか云ふ人物は、今後とても輩出するかも知れぬが、翁の强記の如く、同じ佛說でも鐵眼版なら何卷め、新修本なら幾冊めと、恰も掌中を指す如く、卽座に答へる記憶に至つては、恐らく翁以前に翁無く、翁以後に翁無からんと云ふも、敢て過言ではないと信ずるのである。

更に翁の博覽にあつては、是れまた超人間的であつて、多忙の間によく讀まれたものだと、たゞ舌を卷くのみである。在外十五年のうちに五車に餘る古典新書を披閱し、その要旨を抄錄せるもの無慮二萬枚といふ驚くべき多數に達して居るが、然もその大半はノートブックを用ゐたので、綴ぢた針金が錆腐してバラ〳〵となり、散逸する惧れがあるも、その量は八疊の座敷に置き切れぬとの事で、今に令弟常楠氏の邸宅に藏めてあると聞いてゐる。

此の强記と博覽とは、翁をして『世界の名譽』または『博識天下一』と稱せらるゝに至つた(「大日」二六五號)。更に翁をして宇內稀に見るエンサイクロペヂストたらしむるに至つたのである。

斯くて翁は、此の該博なる知識と卓越せる識見とを以て、明治四十一年頃から、粘菌研究の餘暇を偸み「早稻田文學」「東京人類學雜誌」「東洋學藝雜誌」「植物學雜誌」「考古學雜誌」等に寄書し、讀者をして餘りにも蘊蓄の深遠なるに驚かせた——と言ふよりは寧ろ呆れさせたものである。

然るに當時、雜誌界の王座を占めて居た「太陽」の主筆淺田江村が、翁の博索洽引なる考證と、含糊匠氣なき行文とに着目して起稿を囑し、翁は大正二年正月號より每年その年の干支に關する民俗學的研究を連載するに及び、翁の文名は遽然として天下に宣傳されるやうになり、そして、此の干支の考證は大正二年の丑より、同十二

年の亥まで續き、十三年に至つて中絶されたが、翁は此の間の事情に關して、

大正十三年が子歳なるより、明る新年號の〔太陽〕に、例年の順で鼠の話を出すべく、十二年の十一月に早く其初分を草し博文館に送つた處、九月の震災の餘響で〔太陽〕も體裁を改むる事となり、永々予を引立てゝくれた淺田江村君も退社し、予の原稿もサランバン、一先づ返却となつて予は面汚した泥鼠のチュウの音も出ず云々（續南方隨筆）。

と述べて居るが、兎に角、此の干支の考證が餘りにも著聞されたので、一部の淺見の徒より、翁をジャアナリストの如く誤解されたのは、否むべからざる事實である。更に〔太陽〕に次で雜誌〔キング〕へ『鳥を喰つて王樣と成る話』といふ翁一流の祕話を連載して文名はいやが上に昂揚したのである。

由來、翁は賣名を好まず、高見は英國に發行さるゝノーツエンドキーリス及びネチュールの兩誌以外には發表しなかつたが、文名の旺んなるにつれ、諸方より懇望せらるゝまゝに〔不二〕〔民俗〕〔郷土研究〕〔歴史と民族〕〔變態心理〕〔民族學〕〔ドルメン〕〔土の鈴〕〔旅と傳說〕等の諸雜誌に、殆んど毎號の如く寄稿し、更に大阪朝日及び大阪毎日の兩新聞を主とし、その他の諸新聞にも執筆した。翁の歿後に雜賀貞次郎氏の調査せる處に從へば、翁が三十五年間に執筆せる雜誌・新聞約六十種、此の延べ回數無慮一千回に達すると云ふ。實に努めたりと云ふべきである。從つて、翁はこれを機緣として、植物學以外の柳田國男先生を始めとし、高木敏雄、喜田貞吉、石橋臥波その他の學者と書信を交換し、又は厚誼を重ねるやうになつたのである。

併しながら、花を催すの雨は、やがて花を散らすの雨で、有體に言へば、文名の昂揚した事は、翁にとつては却つて有難迷惑であつた。何となれば、民俗學的考證などは、翁にあつては餘技であり、また一種の道樂にしか過ぎなかつたのである。然るに此の事が、學界に吹聽せられ、人口に膾炙されし爲めに、世には往々にして本末を誤り、翁を目して文學者なり、植物學者にあらずと云ふ者さへある。勿論、斯くの如きは、群盲が鼻を撫で脚に觸れて全象を評すると同じく、翁を誣ゆることの甚だしいのみならず、未だ盧山の總てを盡さゞるものと云ふべきである。

八、神社併合問題と翁の下獄事件

明治三十九年一月、西園寺内閣の成立するや、内務大臣原敬は、全國の地方長官に對し、村社、無格社の神社を併合すべき事を命じた。越えて同四十二年内相平田東

助時代に是れを勵行したが、特に和歌山縣に於いて其の苛酷なるものがあり、同縣神社總數三千六百七十二社のうち、四百六十八社を減じて、三千二百四社とした。就中、翁の住める西牟婁郡にては、村社百二十八社のうち七十八社を併合して五十社とし、無格社百九十五社のうち百八十四社を併合して十一社とした（以上、田邊町誌）。今に一笑話として傳聞するは、同縣下の某村にて稲荷社、八幡社、金毘羅社、天滿宮の四社を併合する事となつたが、その社名を選定するに際し、各社の頭文字を一字づつとり、稲八金天神社といふ世にも不思議な、然も非常識なる社名を選んだと云ふことである。元より事の正否は知らざるも、斯かる笑ひ話が天下に流布せし點より推すも、和歌山縣の神社併合が、如何に盲斷擅行されたかゞ窺はれるのである。

然らば何故に同縣に限り、更に西牟婁郡だけ斯く盲斷擅行されたかと云ふに、是れには底もありまに蓋もある事情が潜んで居たのである。即ち同縣は、畏くも神代に須佐男之尊が、韓國より樹種を移植し、古くより『木ノ國』と云はるゝほど樹木に富み、殊に我國の習俗として、杜を社と訓ませしだけに、神社の在るところ必ず森林あり、西牟婁郡は熊野三山に近きため無名の叢祠藪神にても、境内には天に聳り立つ老檜古杉が多かつたのである。然るに世を毒する政商とか利權屋とか云ふ腹黑き小人たちが、神社を併合して是等の樹木を拂下げ、巨利を占めんことを企て、由緒正しき神社であらうが、民衆の信仰淺からぬ廟祠であらうが、苟くも大金に爲る樹木の有る限り、或は神職と謀り、或は氏子を欺き、着々と慾の熊鷹爪を磨いたのである。

是れより先き南方翁は、是等の運動が、神社合祀の美名に隱れて、

第一、合祀により敬神思想を高めたりとは、地方官公吏の報告書に誑かさるの甚だしき事。

第二、合祀は人民の融和を妨げ、自治機關の運用を阻害する事。

第三、合祀は地方を衰微せしむる事。

第四、合祀は庶民の慰安を奪ひ、人情を薄くし風俗を亂す事。

第五、合祀は愛鄉心を害する事。

第六、合祀は土地の治安と利益に大害ある事。

第七、合祀は勝景史蹟と古傳とを湮滅する事。（以上。「日本及日本人」に據る。全文附錄參照）

の七點を主たる理由となして、更に此の暴舉は、大にしては吾が國體觀念にも影響し、小にしては一鄉一村の盛衰にも關係するとなし、敢然、起つて是れが合併に反對

したのである。そして、翁は先づ神社併合に就いての反對意見書なる「南方二書」と題せるパンフレットを官邊以下各關係者に配布し、更に新聞に雜誌に此の問題の眞相を寄書して、廣く輿論の喚起に努め、親友の代議士中村啓次郎をして、前後二回、議會に於いて政府に對し質問演說なさしめ、次で學友の白井光太郎博士、戸川殘花をして和歌山縣知事に陳情させるなど、大に奔走する處があつた。當時、牟婁新報の記者であつた雜賀貞次郎氏の追憶談に、

南方先生は何か事が起ると、その一事に熱中された。例の神社合併のとき私の居た牟婁新報へ原稿を書いて持て來て、しまひには郵送用の帶封を書くのまで手傳つてくださつた。別室で毛利情雅社長(翁の親友)が、碁などを打つて居ると、翁はプン〳〵怒りながら、帶封を書いてくれました。

翁の三面六臂の攻擊は、かなり相手方の急所を衝いたのである。殊に翁が前内務大臣原敬とは、舊知の間柄なるを以て、此の問題を提げて上京し、事實の裏面を暴露すべしと云ふ一事は、俗吏どもの心膽を寒からしめたものか、社寺課の某縣屬より、詳細は面會の上に貴意を得べきを以て、一時、攻擊の手を緩めくれと降服を申込んで來たので、翁も其の意に任せて差控へて居ると、某屬官は縣社鬪鷄神社へ供進使として田邊に來たりしにもかゝはらず、たゞに翁を訪問せざるのみか傳言もせず、殆んど逃ぐるが如く立去つたので、翁は始めて降服の申込みは時日を延遷し、その間に拂下げの事件を運ぶ手段なりしを覺り、翁の滿身の血は逆流し、直ちに後を趁うて和歌山市に赴いたが、某縣屬は講習會とやらで中學校に居るとの事に、同所へ往き面會を求めしに、會はぬ會への爭ひから椅子を投げたとか投げぬとかで騷ぎが大きくなり、更に取り鎭めに出張した和歌山警察署長を、翁が蹴倒したとやら歐打したとやらで、遂に官命抗拒罪に問はれ、取調べの十八日間を未決監に拘置される事となつた。

此の事件は在東京の友人にも打電されたので、勿論、棄て置かれぬ事なので相談の末に、當時、貴族院書記官長であつた柳田國男先生が、見舞兼釋放のため友人總代として和歌山に出發したが、その以前に同縣辯護士會等の陳情により、翁は微罪不起訴で釋放されたのである。そして、翁は當時の心構へを左の如く自叙して居る。

九年前、神社合併一件にて亂暴して監禁されたるとき、家弟(常楠氏)金子を用意し自ら來たりて、保釋をすゝめたるも肯んぜず、監禁さるゝはさるゝだけの缺點あるなり、金を以て缺點を償ふ日には、富者は毎に惡事に慣れ行ひ、貧者のみ獄に

入るに慣れて、之を何とも思はぬやうになるべしとて、十八日まで未決囚たりしに、責付となり次で無罪となれり云々（中山曰。合祀反對の要旨は別項「國體明徴論者としての翁」參照）。

猶ほ翁は大正三年に、大阪にて發行せる雜誌「不二」及び新聞「不二」に寄書せるに、二記事とも筆禍を買ひ、罰金各五十圓づつに處せられ、更に同七年九月に田邊に湊村の合併問題に關して、湊村の爲めに此の合併に反對し、急ぎ湊村に寄留して自說を主張したが、此の寄留が違法なりとて檢事局の取調べを受けた事件もあり、これには又翁の性格を偲ふべき話柄もあるが、是等は共に翁の偉大を加ふる事件でないので、今は此の程度にとゞめ詳細は省留した。

九、翁の好學心は世界に光被す

明治四十二年アメリカ政府より、翁を農商務省顧問に聘し、同時に國會議事堂圖書館整理を囑托するとて、禮を厚うし辭を低うして懇請し來たりしも、翁は耳をも假さず研究に精進した。又大正五年に早稻田大學より講師を熱望されしも、これも固辭して研究に殁頭した。

元來、粘菌の新種（又は變種）を發見し、是れを學界に發表するまでには、三年五年といふ長年月の研鑽考覈を要するのは決して珍しい事ではないが、特に學に忠なる翁にあつては、入念なる研究が續けられたのである。加之、翁は同じ植物學にあつても、己れの專門以外の事は、それ〳〵他の專門家に質疑し教示を受くるを常とし、例へば植物病理に就いては白井光太郎、顯花植物に關しては牧野富太郎の兩博士に俟つ處が多く、從つて兩博士に對しては、翁も敬意を表してゐた。然もその態度は實に後進の一書生の如きであつたと云ふ。Cordcops（コルデケプス）又は Ecaroia（イサリア）の如き（共に動物寄生菌の屬名）は、翁としては充分に研究せられしも、更に其の權威と目さるゝ某農事場の一技手に對し、博士に對すると同樣の態度にて面教を受けられ、肩書きとか地位とかによつて、その態度を二三にするが如き事の絕對に無かつたのは、また以て學ぶべき襟度と云ふべきである。翁の薫陶を受けし田邊高等女學校の北崎修一郎氏（博物科教師）語るらく、

私が南方先生にお近づきしたのは、大正八九年この方で、其の間實にいろいろと御指導を仰いだのでした。然して私は、研究不充分な、又最も研究困難な博物學中の菌類に就いて、この機會に先生から充分に教へていたゞきたいとの念願と、この地方に產する種類を充分研究してもらひたい念願から、材料を出來得る

限り蒐集してお屆け申上げたのでした。先生にも此の點をお含み下さつて、日曜祭日の午后は、私ども同輩が採集してお屆け申すのを、よくお待ち下さつたのです。そして、其の結果に就いては、一々丁寧に記載して圖解まで入れて、わざわざと御教授下さつたり、時にはプレパラートで鏡檢して下さる。一般に賣名家の多い世の中に、先生は少しも斯かる事なく、新種の出た場合には、必ず學名に先生と私たち連名して命名され、此のやうな種類は粘菌にも及び普通菌を合すれば、私のだけでも三四十種になる程です。然もその結果は決して輕々に發表されず、一種の物の研究にも十數年、乃至は二十年の日子を費して、始めて完成されるのです。普通菌に就いては、未だ充分なる遺稿の一つ一つが發表されて居らず、何れ追々と現はれることでせう云々。

翁が研究のため寸陰を惜み、多數の來訪者に面會を謝絶して、誤解を受けたことも屢々あつたが、殊に翁は、學會の理事とか委員とか云ふ時間潰しの役目を嫌ひ、決して承諾しなかつたのである。然るに翁の七十五年の生涯を通じて、たゞ一度だけ委員たることを受諾した例がある。それはイタリヤの肉質菌の大家であるフレザレラ大僧正が、八十の賀の記念に、千種の菌譜を出版することゝなり、これが委員となつたのである。

大正三年八月に英國オックスフォード大學に開催されたる、萬國菌學大會に於いて、リスター女史によつて『南方熊楠氏過去十四年紀州に於いて爲せる菌學事業』と題し、先人未到の新說が代讀公表せられ、更に學術雜誌ネチュール記念出版に際し、植物學者として我國にて招待されしは、實に伊藤篤太郎と翁との二人だけであつた。獨學でこゝまで到達した翁の名譽も、また大なりと云ふべきである。

一〇、南方研究所設立と三十六年振の上京

大正十年、舊紀州藩主德川賴倫侯が、和歌山に來られたが、その際に南方翁も賴倫侯を訪ねてロンドン以來の久濶を叙した。その折に同侯から、南方研究所を設立するのならば、助力しようとの內談があつたので、翁は深く厚意を謝し、其の後親友なる中村啓次郎(代議士)、毛利清雅(牟婁新聞社長)と打合せ、地元の和歌山縣の方は此の兩名に萬事を托し、越えて翌十一年四月に『東京嫌ひ』を標榜して居た翁が、三十六年振りで研究所基金募集のため單身上京されたのである。

是れより先き、翁の友人である大阪の堂前氏より「太陽」主筆淺田江村に宛て、翁が

出京するが、禁酒旅館に滯在させるやうにとの依頼があつたので、諸方を物色した結果、京橋區銀座二丁目の高田屋旅館を擇み、こゝへ翁を迎へることゝした。筆者は翁が投宿された翌日に、淺田主筆に伴はれて推參し、初めて翁の謦咳に接してより、以來、在京の九十餘日、殆んど連日連夜押かけて、名論卓說を聽聞したのである。

翁が其の折に來訪の讀賣新聞記者に對し、上京の要件に就き語れる一節に、

最少限度十萬圓で、私が四十七年間研究した收穫を發表する計畫だ。その機關として植物研究所を造る目的だが、金が無くてはどうにも仕方がない(中略)。幸ひ私は紀州の豪家に生れたので、是れまで續いたが、研究した材料の保存だけにも、年々二千圓以上もかゝるのだから、全く往き詰らざるを得ぬのである云々

(大正十一年六月十八日)

そして、翁は前約により賴倫侯を訪ねて寄附金帳の筆頭を願ひ、それより東京の諸名士から贊助を請ふこととなつたが、折柄、盛夏となつたので、翁は上松蓊氏を伴ひ、日光中禪寺湖畔に避暑し、米屋旅館に三週間ほど逗留して歸京したが、やゝ所期の目的を達したので田邊へ歸り、南方研究所を設け、集つた基金は銀行に預け、其の利子を以て研究費に充てられたのである。そして、滯京中に筆者が耳聞した珍談、

南方翁と小畔氏

大正九年八月廿三日、翁は小畔氏と共に高野山に赴き一乘院に宿泊し數日を送つた。粘菌採集に寫眞は同廿六日に同院で撮影せるもの、向つて左が翁右が小畔氏である。

又は目擊した逸話は、曾て取りまとめて雜誌〔同人〕に連載して好讀み物と歡迎されたが、今は再錄も意に任せぬので、篤學の士は參照を乞ふとして玆には省筆する。

一一、棉の神に就いての考證

大正十三年の事であるが、日本郵船會社より大日本紡績聯合會へ、記念品を贈呈する事となり、それに就いては紡績に緣ある棉の神の像を彫刻、又は鑄造するのであるが、其の棉の神は女性か男性か、我國の神典に記載してあるか、或は民間信仰に存在してゐるか。幸ひ當時小畔四郎氏が、郵船會社に勤務中とて、これが考證を南方翁に依賴する事となり、小畔氏の紹介で郵船大阪支店副長矢吹義夫氏より其旨を申込んだ。其の時、翁は、顯微鏡過用のため鼻茸が再發し、それを切斷せねばならぬ重患に惱みながらも、性來の學的良心から內外古今の文獻を涉獵して棉の神の研究をなし、矢吹氏に書簡で回答(後に其全文を印刷し、筆者にも一部を惠投された)した。そして、其の全文は一小冊子をなして居るほどの長文であるが、下に結論とも思惟する點だけを抄出する。

(前文省略)

答申

本文、御下問なる棉の神といふものは無しと存候。

支那にて古く棉といひしは、蠶よりとりしものを、主としたらしく候。然し太古の神農が作りしといふ木草本經に杜仲あり、元國の魏の吳普の吳氏本草に、杜仲一名木棉とあり、是れが木棉といふ名の見へた初めなり。此杜仲一名木棉は Eucommia Ulmoides（ユウコミア ウルモイデス）として北支那に自生し、古來腎虛の妙藥と致し候。小生は見たことなけれども、かつらの木などと同科に屬する木で、皮にも枝にも、葉にも彈力性ゴムを含むこと多く、之を折ると丁度、棉の如き細き毛となりて無數のゴムの筋が出る、小生在英の頃、此の木で紙を造るを目論見た人ありときゝたり。然るに分り切つたことは、紙よりも、ゴムとして種々の工業に應用することに候。北支那に產し、又多く栽るとのことなれば、後年我國相應の地に移植して、例の國難の幾分を救ふためゴム工業に應用したきことなるに、そんなことを、おくびにも云ひだす人のなきは、よく〳〵迂濶無心配の官民共に逸する國風と慨嘆仕候。只今の所謂木棉といふものは、宋のときに初めて支那に入りし由、本草綱目に見へたり。宋の謝枋得の詩に、嘉樹種『木棉、天何厚。八閩、厥土不宜桑、蠶事殊艱辛、木棉

收千株、八口不憂貧』とありて、蠶業擧らぬ地には、殊の外必要なものとしたる也。而して明の何喬遠の閩書南產志に棉の實を聚めて、或は彈くに竹弓を以てし、或は絞るに輪車を以てし、是を木棉花となすとあれば、只今のワタの事を棉花と稱ふるは明朝既に有つた事と存じ候。日本には農業全書卷六に『本朝にも、百年以前其の種を傳へ來りて、今普く廣まれり』とあり。古へ木棉なき世には、庶民は元より士族も貧なるものは、麻布をきて冬寒にこまりしに、幸にして木棉輸入されて、貧者までも其の惠を蒙むる由を述たり、此書は、元祿八年成し者なれば、百年前といふは、文祿四年なり、秀次公が高野山に自殺した年で、征韓役の最中なり。其頃、渡り初めしことと見へ候、熊野の山奥抔にはあまり遠からぬ世まで木棉なく、冬ごもりに家婦の仕事とては、藤の纖維で衣を織る事なりし由承り候。

弦餘叢考卷貳に梁の武帝木棉の帳を送ることより、夏の禹王の時、織具といひしも、木棉なる由を載せて古へは交趾廣洲等の南地に有て、極めて珍らしきものとせしを、宋末に其の種を、支那本部に傳へしなりと判ぜり。日本にも、桓武帝の時、天竺の人が持ち來れる木棉の種を、紀伊、四國、九州等に植ゑしめしこと、類聚國史一九九に見えたれど、此種は絕え果てて、秀吉公の時、更に植ゑた樣なり。

太田覃の一話一言卷三十九に引た松井精の野言述說抄に、其の祖母の話しに、吾十五、六の時、岐阜に在り、始て木棉の服を着た、其の時の人之を珍らしがること、綢紗花綾（チリメン・トビザヤ）の如し。其後木棉の種を植ることあれども、其製法を知らず、紡織の粗鄙なること、今の巧好精緻に遠く及ばず云々、相傳ふ上世より、永祿、天正頃迄下民の服はみな、麻葛の類なり、故に今に至るまで、賤者の服を布子と名くとあり。此書は寛享元年の物なれば、祖母十五、六歳は丁度永祿の頃なるべし。和漢三才圖會に布は總名で今は蠶綿で織るを絹といひ木綿で織るをモメンといひ、麻糸で織るを布といふ、三品自ら別なりとある、正德頃迄は依然絹や木綿以前の粗い織維で織た物を專ら布といふたから賤者の服を布子と云た物と見える。

斯樣の次第にて、日本支那共木棉が渡り來りしは比較的甚だ新らしく、隨つて特に棉の神と云ふものあるを聞ず、ただ、緣につれて、もより〳〵の氏神や、產土神、又は一汎農家の神をまつりて綿の豐作を祈りしことと存じ申、又綿に製するものは、それ〳〵大黑とか夷子とか、商工の神をまつりしことと存じ申、鄕土研究三卷三號に、時田良輔氏報告あり、上總玉井にては、正月十五日、欅の枝に餅をつけ、綿の花といひて、神前に供へる風習ありと載す、これは內田邦彥氏の南總俚俗などを見てもわかる通り、何れの國にても、正月十五日に、鳥追ひの式を行ひ、又、果樹を打ちて今年多く、實ずんば切てしまふと脅し杯す、つまり農作を祝する日なるより棉をつくる地方では、棉のかたちをつくりて、神に供へるので、別に棉の神といふものあるのでなく、一汎農作の神や、家々にまつる神に供へると存ぜられ候（下略）。

斯くて翁は筆路をすゝめ、强ひて言へば九州宗像三神こそ棉の神とも稱すべきかと述べ、更に支那、印度、歐洲の棉に就いて記して居るが、それは餘りにも專門的であり、學究的であるので今は省略した。

因に此の書信の前文に由れば、翁は他の用事を兼ね、同年中にも又々上京する用意があつたやうに察せられる。即ち、

（前略）合計二千點ほどの植物標本を提携して上京せざる可らず（それは來年中に小生の研究所基本金は未だ定額に達せざる故、少分の着色出版料を小生より出し）英國の學會（林娜學會、英國菌學會等）と、米國シンシナチ市の巨富ロイド氏の菌學博物館より、小生二十餘年來研究の成績として出版して貰ふ爲めにて、その前に東京帝大の博士等にも見せ置かんと欲す（下略）。

鼻茸のためか他の用事のためか、遂に翁の三度目の上京を見る事の出來なかつたのは洵に遺憾であつた。筆者の如きも、此の上京ありしならば、再び溫容に接し、高說を聽くを得べかりしものをと殘懷に堪えぬ。

一二、聖上御進講の光榮を擔ふ

昭和四年五月、畏くも聖上陛下には、商工業の中心なる阪神地方の發展を御視察のため、且つは大島、八丈兩島へも行幸仰せ出され、同月二十八日橫須賀軍港より軍艦那智に召されて御出發あり、兩島御視察の上、今度は軍艦長門に御坐乘あり、在和歌山縣の京大瀨戸臨海研究所へ行幸あらせられた。

和歌山縣にては、正和二年(鎌倉期)に後宇多天皇の高野山御參詣ありしより以來、聖上の行幸を仰ぐは實に六百四十年振りの盛事とて、八十五萬の縣民は此の光榮ある日を待ち奉りしに、六月一日、御召艦は聊かの恙もなく田邊灣に御安着あらせられしが、豫て宮內省より縣當局を經て南方翁に對し、當日、御前に於いて植物の御講義申上くべしとの御沙汰ありしを以て、翁は齋戒沐浴して、此の光榮を擔うたのであるが、翁は此の日の感激を、同夜、往訪の大阪每日新聞記者に、左の如く謹話した。

御進講當日の南方翁

昭和四年六月一日　御前進講の記念撮影
(着用せるフロックコートの由來、本文參照)

此の光榮の日、吾輩は正午過ぎ田邊を發し、御用船に便乘した。飯尾公壽氏(和歌山縣水產試驗所長)に迎へられ、船を神島の西方に止めて、聖上の御出を待つてゐたが、ふと見ると早や間近に小さな御坐船に召された

陛下の御姿を拜したので、謹んで頭を下げて御迎へ申上げると、畏くも陛下には、中打帽を右手にお取り遊ばされて、いと御丁重な御挨拶を賜つて、恐懼身に餘る光榮に感激した。神島の周圍を南から北へ、次で西から一周した時、メガホンで上陸の知らせがあつたので島に上陸すると、陛下におかせられても御上陸遊ばされ、險しい道なき道を御わけになり、林中へつか〳〵と御歩みを運ばせられて粘菌を御熱心にさがし給うたが、何分、雨天のことで御着衣さへ濡れぞぼつて居させられることゝて

御好みの粘菌はなか〳〵御探しになるのが御困難にあらせられた。御熱心の陛下には約廿五分にわたつて林中をあちこちとお探しになられた。ついで畠島で約四十五分御上陸遊ばされて居る間に吾輩は、中島濤三氏(田邊中學教諭)の隨行で御召艦長門に向つた。丁重な扱ひを受けて、ふと見るとロンドンに居た時代の舊友加藤寛治(海軍大將)が居る。約四十分も待つて居ると、陛下が長門

に御歸艦あらせ給うたので、吾輩は立派な御部屋に案内された。時に丁度五時半ごろだつた。時間が少いので成るべく早口に先づ

尾端にエビが付いて居て、紫色の光を發し、龍が玉を抱く姿で泳ぐ(ウガ)を天覽に供して御説明申上げ、第二にグアレクタクバナといふ地衣(苔の類)を御見せ申した。これは吾輩が廿四歳の時、西インド玖馬島で發見したもので、東洋人が外國で發見した最初のものである事を申上げると、有難くも陛下の御面には嘉賞の御氣色を拜し、非常に感激に打たれた事であつた。第三には私が廿五歳のとき、米國南部フロリダ河と

西印度諸島を廻つて採集した菌類數千種のうち、若干を綴ぢた厚さ二寸位の標本帖一冊を恐る〳〵御前に捧げた。これは四十年前にアメリカの地で、米人の氣の付かぬ種類の物も澤山あつて、かつてアメリカ人から買戻しに來たが、昔、薩摩人が英國と戰て獲つた碇を英國へ返し、後人に笑はれた例も御座いますから、私は斷然これを外國に賣りませんと申上げると、陛下にはいと御滿足にお笑ひになつた。第四は和歌山縣日高郡川上村山林で、零下二度の山奥で、昨年十月十八日から本年一月四日まで、約八十日間籠つて、その間九十六町の山道をソリで、四十五分で辷り落ちたやうな危險を冒して採集した菌類、約三百廿種を天覽に供した。第五には海に棲む珍しい蜘蛛を、それは二十七年前に此の近海で發見した。外國でも珍しいものだが、私では研究が出來ないから、宮城内御研究所で研究おさせ下さいと獻上したが

非常にお喜びの御摸樣だつた。第六にはやどかりの珍種で、琉球や小笠原へ行くと、海に生れて後海を離れて丘にあがり、晝は山へ登り樹に昇るものが、本州では瀬戸鉛山のみにある。それを生きたまゝの親二匹と小さいアルコール漬のもの八匹を獻上申上げた。第七には日本海の粘菌二百種ほど獻上申上げるつもりで、一週間ほど前から寢食を忘れて整理につとめたが、海の蜘蛛捕りに往つて風邪を引いたので、出來上つたもの百十種ほど獻上申上げ、御嘉納の光榮に浴し、約廿五分間にして御暇を乞ひましたところ、御傍よりモウ五分ほど御進講申上ぐるやうにと、有難き御沙汰を拜し、日本の粘菌はどの邊に多いかなどと、御熱心なる御下問を拜し、たゞ〳〵無上の光榮に感激しつゝ御召艦を辭したのであります(六月三日附大阪毎日新聞)。

此の事たるや實に聖代の盛事であつて、無位無官の草莽の臣が、天顔に咫尺し奉

つて、御進講申上げるとは、我國三千年の歴史に於いて曾て見聞かざる處、獨り翁の榮譽のみにとゞまらず、洽く學界の榮譽として百世に傳ふべきことである。そして、翁の此の光榮と感激とを書き綴つた手記、及び陪席せる加藤大將の禮狀も幷存して居るので、多少とも重複する點もあるが、次に抄出して永き記念とする。

此日、縣廳の不注意により、種々困らされた筈だつたが、幸ひにも大なる過失なしに、二十五分と限られたものが、一時間近くも進講し得たるは、全く聖恩に惟れ由る事と感佩して還つた。これが爲め御召艦は御豫定より、一時間十五分後れたかに承はつた。四日四晩も眠らず、漸く其の朝二時間ばかり標本を調べなから假睡したかと思ふばかり故、進講申上げた詞の外は一切覺えぬが、その後ち加藤軍令部長の下さつた書狀を拜見して、當日、大なる過ち無かつたと、やゝ安堵の思ひをした次第である。

猶ほ右の加藤軍令部長より、翁に寄せた禮狀は概ね左の如きである。

（前略）往日は久しぶりにて拜奏、相變らず神氣滿身の御風格にて、御研究に超越被遊感動致し候、今後も度々貴下之御噂さ宮中に出で、皆々景慕し居られ候、小生も今一度貴地に遊び、大自然の美と幽とを味ひ、且つ奔放不羈なる大人と快談の幸を得たく、切望罷り在り候（下略）

昭和四年十二月五日

南方大人梧下

加藤寛治

斯くて、翌昭和五年六月一日の一周年を期し、神島行幸記念碑が建てられ、翁が感激に身を震はせつゝ詠じた、

一枝も心して吹け沖つ風
わが天皇（すめらぎ）のめでまし〻森ぞ

の一首を彫りつけ、和歌山縣知事友部泉藏以下多數の官民が集り、華々しき除幕式が擧行された。松籟永へに神韻の歌を奏てゝ此の碑を祝福すべく、紀南に寄する黑潮の香は、高く久しく翁の榮光を稱へるであらう。

因に李王垠殿下昭和八年十月八日、白濱溫泉に御成りあり、上山別邸に御一泊の際、翁は同邸にて殿下に蘭に就いて御講義申上げ、同十年八月廿二日には、久邇宮多嘉王殿下、妃靜子殿下、同若宮殿下に御講演申上げたことは既載の如くである。

一三、翁の偉大なる學績と超人的の書簡

翁の文化的遺產は、當然、粘菌と民俗との兩方面から評價さるべきであるが、前者は翁が畢生の心血を傾けしもの、これに反して、後者は翁の餘技に過ぎざるもの、同じ學績でも本末あり、輕重あり主客あるは言ふまでもない。然るに筆者は、民俗に關しては多少の自信あるも、粘菌に就いては全く不通なので、こゝには傳聞せるまゝを記して、詳細は他日翁の學術正傳が編纂されると思ふので、それに讓るとする。

そして、最近までに世界植物學會に報告されてゐる粘菌の總數は、本種、變種の二つを幷せて(以下同じ)無慮五百餘種に達して居ると云ふが、此のうち翁が、發見報告したもの約四十種、此の外に、報告するばかりに研究完成に近きもの約百種ある。また翁の指導を受けた小畔氏が三十餘種、上松氏が十種を報告して居るとのこと、また以て翁及び翁の孚みし學徒の貢獻が、如何に甚大であるかゞ知られるのである。更に翁の採集せる粘菌數は、實に五千餘種に達したと云ふ。勿論、初志のパーレーに誓ひし七千種には及ばなかつたが、これは翁が、右足を傷け歩行の自由の半ばを失ひしことに因るのであるが、それにしても翁の精力と勤勉でなければ、到底、成し能はざる大事業であることは言ふまでもない。

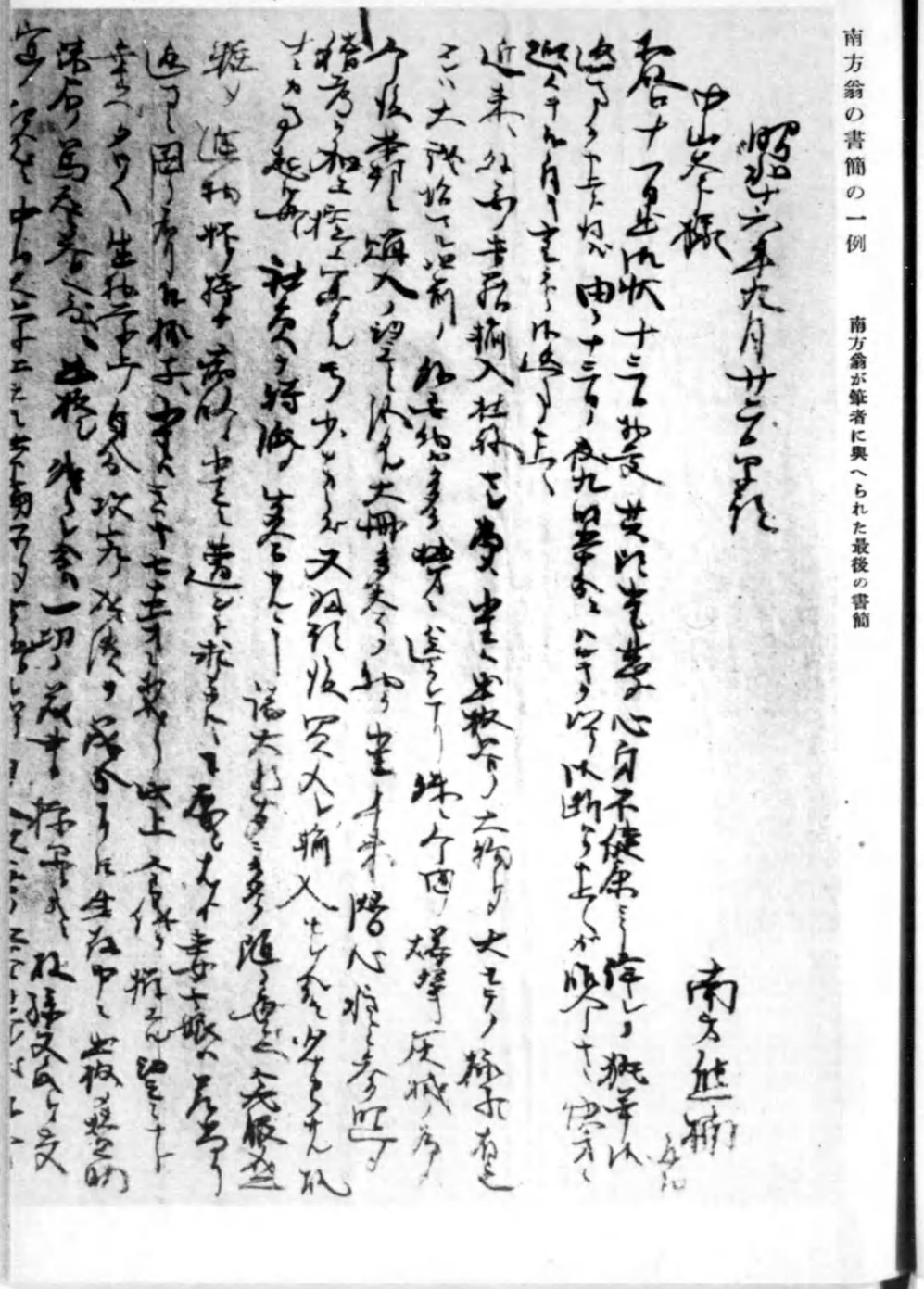
民俗學的考證にあつては、翁のエンサイクロペヂストたる面目を遺憾なく發揮したもので、蓋し翁以外には何人でも企及し得ざる處である。勿論、發表された每篇の記事が、悉く創見に富んで居るとは云へぬが、所謂、引證該博にして、恰も蠶の絲を吐くにも似て、綿々として盡ることなき研究に至つては、唯々驚嘆の眼を睜り、翁の洽聞博索に魅了されるのである。翁一代の鑽刓考覈を加へし、英文[燕石考]が十三國の國語に飜譯されて弘く讀まれ、更に同[神跡考]が、是れに次ぐ讀者を有することも、決して過然ではないのである。就中、翁は[今昔物語]の考證に多大の興味を有ち、學界を稗益すること尠少でなかつた。猶ほ翁の此の種の著書は、邦文では[南方閑話][筆者の編輯せる[南方隨筆][續南方隨筆]の三種だけで、近く[南方筆叢]三冊が刊行される筈と云ふことである。

更に翁の精力の絶倫なりし事を、最も雄辯に物語るものは、翁が學友及び門人の高足に送つた千通にも近い書簡である。然も此の書簡たるや、全く常人の想像だにも出來ぬもので、翁の多方面に渉る造詣と蘊蓄とを披歷したものゝあつて、筆者が耳聞目堵したものだけでも、概ね次の如きものがある。

佛教佛典に關しては　土宜法龍師へ
植物學に關しては　白井光太郎氏へ
神話童話に關しては　高木敏雄氏へ
民俗傳說に關しては　柳田國男先生へ
粘菌學に關しては　小畔四郎氏へ
淡水藻に關しては　上松蓊氏へ
人類學に關しては　平沼大三郎氏へ
特殊風俗に關しては　岩田準一氏へ
植物菌類に關しては　北島修一郎氏へ

それぞれ書簡を以て研究が申越されて居る。そして、此の書簡こそは、翁獨得のものであつて、卷紙に毛筆もて飯粒大の細字で恰も黑胡麻を蒔き散らしたやうに書き認め、その長いのは五尺、七尺、一丈餘もあり、短いものでも二尺、三尺とあり、それが一人に對し少くも五六十通、多いのは百通以上にも及んでゐる。現に北島敎諭のは三百通に達し、長いのでは昭和八年八月に、上松蓊に宛てたものは、鯨尺で一丈五尺餘、六百五十餘行、字數は一萬九千五百餘（文中二ヶ所の挿繪を除く）と云ふので

南方翁の書簡の一例　南方翁が筆者に與へられた最後の書簡



あつた。然も斯うした書簡を鏡檢と讀書との餘暇に、一氣に書きあげる(但し前記上松氏宛の長文は、執筆中に事故が起り、四日がゝりで認めたとある)精力にあつては、全く人間業とは思はれぬのである。且つ翁の書簡には封書でも端書でも、必ず書き出しと書き終りの日時を認めてあるのが特色である。曾て白井博士の筆者への談に『南方さんからのお手紙は、長いのになると一讀するのに五六日はかゝる。蠅頭のやうな小字である上に、英語、獨語、佛語などは申すに及ばず、ラテン、グリーキまで飛び出すのですから、讀むのに並大抵の事ではない。それに斯うした各國語を辭書によらず、記憶のまゝで書きあげるのであるから、全く神わざとも云ふべきである』との事であつた。

そして、以上の書簡のうち筆者の拜見したものは、白井博士の分三卷、柳田先生の分全部、小畔氏、上松氏の分一部とだけであるが、就中、柳田先生のは、先生が貴族院書記官長時代に、書生に命じて整理されたとて、綺麗に寫字製本して「南方來書」と題し、半紙本二十冊ある。高木氏の分は學友ネフスキー(露國留學生)が、大阪外國語學校で見たが、一冊の本となつて居たと云ふから、是れも相當の量であることが知られ、岩田氏のは和裝本三冊に、更に小畔、上松、平沼三氏のは、普通の書簡と異り挿繪入り

が多く、此の外に標本その他の貼込帳も幾十冊かに達してゐる外に、三通五通の翁の書簡を所持する方々は、筆者の知るところでも、決して少數では無いのである。從つて、是等の書簡全部を集めんか、實に等身の著述ともならうと考へるが、いづれにしても散逸させず、永く保存したいものである。

猶ほ翁は、明治三十四年歸朝以來、歿年の昭和十六年まで、前後四十餘年間の日記を克明に書きつけ、其の間、幾に腸チブスに罹り五十日ほど臥床せるを缺いたゞけだと云ふ。然も其の日記たるや上松翁氏に由れば、

先生の日記は實に素晴しいもので、ギリシヤ語ばかり、或はラテン語ばかりならわかるが、大切な處はロシア語で書くといつた調子で、誰だつてさう簡單には理解できない。私が今日迄(翁歿後の書齋整理)取扱つたのは三十冊許りでしたが、一年に二冊(博文館發行の大型當用日記であつて、欄外からベタ一めんに書いてある)は附けて居られる云々。

更に翁の死後、令孃文枝さんの報告によれば、いつの間に認められたか、美濃紙五十枚ほど綴りの「田邊ぬき書き」と題せる雜記帳六十冊が發見されたとの事である。翁こそは『筆まめ』など云ふ月並語で評するには餘りに健筆で、却つて失禮とも云へれるのである。

一四、翁の晩年と其の臨終

人間としての翁の最大の惱みは、長男熊彌氏の多年に亙る病院生活である。翁が五十にして禁酒を斷行せるも是れが爲めであつた。翁ほどの大偉人でも骨肉の情に變りはなく、一度び想ひを熊彌氏の上に馳せれば、愁雲眉端を壓し、悲火心頭に燃ゆるを、奈何ともする事が出來なかつたのである。然るに長女文枝子が女學校を卒業し、こゝ十年ばかり翁の祕書として、菌譜を寫生する顯微鏡も覗くといふので、翁は身心ともに多少は救はれ慰められたが、是も年を趁うて婚期を失ひつゝある健氣な孝行の長女を見るとき、翁は憂鬱たらざるを得ぬのであつた。七十五歳の長命を保ち、二人の實子を有ちながら、孫の顏を見ることの出來なかつた翁の家庭は、決して賑かでなかつたことが想はれる。これを學問の犧牲なりと云ふのは、餘りにも高價の犧牲であり、又、餘りにも悲壯であると言はねばならぬ。

斯うした境遇に打ち克ちつゝ、翁の研究は、年の老ゆるにもかゝはらず、少しも倦むことなく渝ることなく續けられた。

殊に昭和四年に御前進講の光榮に浴してから、更に昭和七年に粘菌の標本を獻納すべしとの内命に接し、三十餘種を謹選し、小畔氏を使として獻上するなど、相當に多忙の毎日を送迎して居たのである。且つ例によつて新刊舊刻の圖書雜誌を閲讀すること以前と同じく、内外の雜誌約三十種を克明に目を通し、一々『不要』又は『保存』と表記して取捨を嚴にし、朝夕の新聞も必要の點は切りぬきスクラックブックに貼り込んだもので、是等の資料も他の和漢洋の珍書奇籍(翁の藏書は無慮三千部に達するが、詳しい内譯や目錄は省略するより外に致方がない)と共に、書庫に書齋に山と積まれ身の置き場も無かつた。翁こそ全く圖書推裏の人といふのであつた。

然るに翁ほどの心身の持主でも、古稀を迎へた頃から、一種の老人病ともいふべき萎縮腎にかゝり、多少とも健康を損じ、加ふるに永年の顯微鏡檢のため、殆んど左眼の視力を失ふに至つた。剛情で勝ち氣である流石の翁も、病氣と災難には克てぬと見え、昭和十三年十二月廿六日附の井上藁村氏宛の書簡の一節に、

(上略)毎度雜誌(大日)御惠送に預り、内外の事情を窺ふ事を得て、不斷感佩在罷候、小生モハヤ七十二歳(來年は七十三歳)と相成、心身倶に追々衰頽、加之、家内に病人多きには閉口在罷、殊に今年七月自宅の竹林中に、夜分菌を採るとて脚を踏み外し、後腿部を二寸斗り切り、同時に肝臓と膀胱の間たに内傷を受け、其後動もすれば下腹右半に、昔、和蘭渡來のオルゴロと申す樂器の内なる針が動く如く感じ、其都度蜂に螫るゝ想ひなすに氣味惡く、今に外出を慎み引籠り居り云々(大日、二六四號)。

とあるやうに、專ら邸内に在つて研究して居た。

然るに昭和十六年三月に、翁の和中以來の莫逆の友であり、且つ翁と松枝夫人との媒酌人であり、翁を田邊町に永住させるに力あつた喜多幡醫師の歸幽せらるゝや、翁の傷心落膽は譬ふるにものなく、爾來、元氣が日一日と衰ふるやうに目立つて來たのである。

茲で其の後の翁と筆者との交渉に就いて略述することを許してもらふが、筆者との文通はやゝともすれば途絶えがちであつたが、それでも拙著の發行ごとに贈呈すると、懇切なる批評を記るされた書簡を寄せられ、又、筆者が諸種の雜誌に拙稿を發表すると、よく史實の誤りや行文の穩かならぬを正し、端書などで敎へられるので、筆者は『南方翁親切袋』と云ふ紙袋を拵へ、それへ幾十通かの恩簡を收めて置い

た。殊に小著[日本民俗學]四冊に就いては、餘程、詳しく書入れしたものと見え、幾度か其の事を申越されたが、遂に閲覽できず、從つて、學恩に浴する事を得なかつたのは遺憾である。

然るに昭和十六年九月十一日に高敎を乞ひたいこと、及び貴意を得たいことがあつたので、久し振りで拙束を差上げると、同十三日附で下の如き端書の返信に接した。

拜啓、九月十一日出御狀、今日午後一時、忝なく拜受御禮申上候、小生は八月十五日早朝颱風中、丸裸にて暴風中に働き候爲め、今にブラ〳〵、取りとめたる思案の力無く白痴同然也、孰れ少しく快方の上御返事可申上、ソレ迄御猶予願上げ候、草々敬具

翁の宿痾が年と共に昂進しつゝある事は、かねて上松氏から聽いて居るので、筆者は翁が曾てキューバで義勇軍に加はり、更にロンドンで盟友孫文を救出した、在りし昔の壯心磊落、華和尙熊楠の俠骨を揮ひ、颱風と鬪ふなんて持病に障りはせぬかと、竊にお案じ申上げて居ると、越へて同月二十二日附で、例の長文の鳳信を得たのであるが、こゝに其の要旨を摘錄すると、最近、洋書の輸入が禁止となつたので、東京や大阪の古書籍商が、翁の藏書を買入れんとて進物を携へ來訪するので、妻も娘も是れを謝絶するに大骨折り、且つ東京二三の本屋から出版方を申込まれて迷惑する由を述べ、さて曰く、

小生は、もはや七十五歲に相成り、此上金錢を拵ゆる望など無之、たゞ〳〵生物學上の自分の攻究の成績を、幾分なりとも生存中に出版して、贊助員諸君(中山曰、主として南方研究所出資者各位)の篤志に答へ度、出版に殘れる分は一切の藏書雜品と共に、故孫文氏との交誼記念に、中山大學へでも常備品として寄贈し、以て日支親善の資に供し度、近年、老眼明かならざる故、娘が專ら小生代りに寫生に勉め(菌類)、粘菌類は前年進獻の連署人四名(中山曰、翁及び小畔四郎、上松翁、平沼大三郎)合著として、小畔氏(現今石原兄弟會社の專務取締役といふ劇職に在り乍ら、神戸と東京に顯微鏡を備ふ)少閑ある毎に、寫生を勸めくれ居り候、右の次第とて自分はたゞ靜座修養する傍ら、娘と小畔氏の寫生を鑑別補註するのみ(下略)。

との事に、漸く安堵の胸を撫で下ろしたのである。其の後十一月に神田の一誠堂書店より販賣目錄を發行し、それを翁に贈呈せしに、前後二回翁より註文があり、[今昔物語]その他を購求されたと傳聞し、翁の研究心の今に消耗せぬのに感嘆した

が、此の「今昔物語」は令嬢文枝さんへの形身となつたのである。

昭和十六年も漸く押詰り十二月に入り、同八日に大東亞宣戰の大詔渙發せらるるや、翁は幾日か經て聯合艦隊司令長官山本五十六大將が、門葉の上松氏と同郷にて且つ竹馬の友なるを憶ひ起し、同大將へ自邸で稔りし珍果安藤蜜柑の傳送を申遣る(此條逸話參照)などしたが、宿痾やゝ昂進し黄疸まで併發するに至つた。されば松枝夫人も令嬢文枝さんも心痛して、醫師の診療を乞ふことを奬めしも、翁は故喜多幡醫師以外に脈を執らせしことなく、『俺の病氣は俺がよく知つて居る。醫師は病名を付けてくれるだけだ。診てもらふ必要はない』と、死生を超越した翁は肯んじなかつたが、家族や友人の切なる進言に、遂に同町の鈴木、中村兩醫師の診療を受けたのである。そして、同月十六日になるや、翁も再起の難きを悟りしものか、曩に購入せる「今昔物語」の扉に『昭和十六年十二月十六日、神田神保町一誠堂に於て求む、娘文枝に之を與ふ、南方熊楠』と墨痕鮮かに書き認め(文枝さんは產婆、看護婦の有資格者)、越えて十九日に安藤蜜柑を小畔氏に贈るとて、珍らしくも鉛筆にて記したのが、遂に絶筆となつてしまつた。

斯くて翁は、臥褥したまゝ夫人、令嬢、親族、友人、門葉たちの心こめたる看護を受けて居たが、同二十八日朝は『幾らか氣分が良い』と言はれたものゝ、其の夜は多少とも異變が見え、たゞならぬ容態なので、枕元に居た令嬢が『醫師をお呼びしませうか』と云ふと、翁は言語も明瞭に、

『もういゝ、此の部屋の天井に、美しい紫の花が咲いて居る。醫師が來ると此の花が消えるから、呼ばないで呉れ』

と言つたのを最後とし、それより深き眠りに落ち、令嬢に抱かれたまゝ、同二十九日午前六時三十分、此の學界の大偉人は、遂に白玉樓中に昇つたのである。享年七十五。

同夜、保用龍門氏によつてデスマスクを取り、翌三十日午後三時頃に大阪醫科大學の森上助教授が、學生數名を伴ひ南方邸に到り、庭前に古椽臺を持ち出し、その上に荒筵を敷き、翁の遺骸を横へ、木枕をさせ、師走の風が樹々の梢を吹き鳴らす青天白日の下で、頭腦の解剖が行はれたが、如何にも翁の豪快なる性格に應はしい施術と思はれる。そして、翁の腦漿は一千五百三十瓦(平人は千四百瓦)。量に於いては其の數日前に行はれた樞密院顧問官荒木寅三郎の一千六百四十瓦には及ばなかつたが、腦表面の回轉數に在つては逈に複雜し、傑出せる人間としての腦條件を具

へて居たと云ふ。猶ほ詳しい醫學的研究は東北醫大の佐武安太郎、那須省三郎の兩博士により爲されるとの事である。

越えて三十一日、田邊町に近き稻城村糸田(時近、田邊市に編入さる)高山寺(古義眞言宗仁和寺末)へ埋葬した。法諡、智莊嚴院鑁覺顯眞居士。

× × × × × ×

翁は、嚴君が六十四歳で物故されて居るので、よく『吾輩は六十四になると死ぬ』と言はれ、書簡にも此の事を記されたものである。嚴君より十一歳も長命であつた事は、翁にとつては滿足であつたかも知れぬが、吾が學界ではもう十一年ほど生きて居てもらひたかつた。筆者は昨秋に在鳥羽の岸田準一氏と、陽春四月に相携へて田邊に翁を訪問しようと打合せて置いたが、それに先立つて翁は逝かれ、その四月に翁の略傳を書かうとは、哀悼に堪えぬ次第である。

逸話

逸話

人間としての翁の風格

一、翁の爲人と其の性格

翁は偉人ではあるが、決して變人ではない。更に翁は哲人ではあるが、斷じて奇人ではなかつた。なる程、翁の七十五年の生涯は、波瀾多く變化に富み、實に端倪すべからざるものがある。學生であつた者が、曲馬團の書記となるとか、一代の革命兒孫文と肝膽相照らすとか。植物學者のやうでもあり、民俗學者のやうでもあり、其の生活は奇行と逸話の連續の如く傳ふるも、併し此の見解は極めて皮相であつて、翁の眞骨頂に觸れたものではない。

翁は變人の如くであるが、必ずしも軌道を逸した行爲はせぬ。神社併合問題で未決監に繫がれたことも、酒氣を帶びて居る上に、騎虎の行きがゝりとて深く科む

べきでない。研究のためとは云へ、嚴寒の山中に露宿して足疾を得たるは、非常識かは知らぬが、學に忠なる人には、是れまた稀有のことではない。單純さうで案外複雜せる性格の持主である翁。いつまでも童心と茶目氣を失はざりし翁。その行動は常人とは云へぬまでも、變人と云ふにはやゝ距離がある。

翁の强記は天稟であり、研究は習性であるが、決してそれを頼りにして勉勵を輕視したのでは無かつた。翁の遺稿整理に當つた雜賀貞次郎氏は、

是れは先生の歿後に知つた事ではあるが、先生は米、英に居られた日に、各種の書物から抄出せられたノート――大型の二百枚ぐらゐのものを、幾十冊も持つて居られ、又、田邊に住まれてからは、十行卦紙二百枚乃至二百五十枚ぐらゐの帳を作り、先生の例の米粒大の小字で、卦紙の一行を二行もしくは三行にして、各種の本から拔書したのが六十冊にのぼつて居る。若しこれを普通の原稿用紙大の字とするならば、少くとも六七百冊の分量である。田邊法輪寺の大藏經を通覽して抄錄し、羽山大學の彗星等雜記百余冊、その他いろ〳〵の書籍も悉く抄出して居る。此の抄出を見たら誰でも頭が下らぬ者はあるまい云々（旅と傳說、十五ノ四）。

と記述されてゐるが、事實、此の摘錄だけでも、變人や奇人には出來ぬことであつて、翁が學的には、常人であり努力の人であることを證明するものである。更に翁が友人に義理堅く、使用人に溫情であつた事なども、常人の規範でこそあれ、變人や奇人には通用せぬことである。

二、翁は國體明徵論の先驅者

翁が神社合併に反對した明治四十二三年頃には、まだ國體明徵論など云ふ術語はなかつたが、翁の主張し强調した諸點は、全く是れと符節を合はすが如きものであつた。

そして、翁の神社合併反對意見は、頗る長文なる上に論旨堂々として正氣楮表に溢れ、筆鋒熾烈を極め觸るゝもの悉く燒き盡さん慨があつた。全文は本書の附錄として收載したが、こゝに其の焦點とも云ふべき一節を擧げて、翁が國體明徵論の先驅者であることを證明する。

神社の祭神は、多くは皇祖皇族若くは其の連枝末裔、若くは一國一地方に由緒

を有し功勞ありし人々也。民擧げて之を慕ひ、之を敬するは至當の美風也(中略)。小山健三氏(大阪の大實業家)は、日本人の最も快活なる一事は、休日古社殿前に立て、精神を澄すに在りと云ひしとか。これ合併後の混成神社に望むべきに非ず、如何なる末技小道にも、言語で述べ難き奥處あり、況んや國民化育の本たる宗教に於てをや。神社を潰して悅ぶ神官が、說敎したりとも誰か之を聽くべき。明治三十年夏プリストル開催の大英科學奬勵會にて、人類學部長の演說に次で、予が讀みたる「日本齋忌論」にも述べしが如く、神道は種々の齋忌に據て立つ。言論もて說くべきに非ず。本居(宣長)氏の如きは、仁義忠孝などを事々しく論說せぬが、神道の、特に古く尊き處と言へり。乃ち言語にて言ひ顯はし得ぬ冥々の裡に、吾萬古不變の國體を、一時に頭頂より趾端まで感じ、皇室は素より、凡民に至るまで、何れも日本國の神祇の御裔なりてふ有難さを『何事のおはしますかを知らず』に悟らしむ。說敎、講釋、理窟、實驗を須たず、單に神社、神林の存在許りが、己に人心の感化に大功ある也。ダーウヰンの輩、犬が風に動く傘を惧るゝ例などを引きて、宗敎は怖畏より生ずと說き『神を怖れず働け』などを金言と心得たる宗徒の分際としては、尤もなる說なり。但し如何なる禽獸も、親の親を慕念する例なければ、吾人の遠祖を崇拜する神道は、不可知的を怖るゝにより立てる諸宗敎に比して、進化の度迥に高しと云ふべし。近頃まで外人が賞讃せしは、日本人に一種歐米人に見得ざる謙讓優雅の風ありと、是れ主として幼時より神を崇めし薰習に由る。八年前(明治三十七年)ヘンリー・ダイヤー「大日本」を著はし、歐米にて巡査が棒を振廻さねば靜まらぬ群集も、日本では藁の七五三繩一條で制止し、之れを破り之れを犯す者なしと云へり。此の感化力强き七五三繩は、今や合併の爲に神威を失ひつゝあるなり云々(日本及日本人五八一號)。

國體の尊嚴を說き、神社の威烈を論じ、更に國民道德の淵源に言及して、合併の不可なる所以を詳かにす。寔に憂國濟世の士にあらざれば、爲し能はざる不朽の大論策であつて、翁を外にしては他に全く覓むることの出來ぬものである。

三、翁の學生時代を偲ぶ二三の物語

明治十七年に上京した翁が、最初の下宿先きは、神田錦町の鈴木久七方であつたが、これは素人下宿であつて、如何なる緣故で同家を擇んだかは明瞭でない。然る

に同家に美女あり、お虎さんと云ふ、これが後年衆議院議員として著聞したハーゲマン(禿萬)事ドクトル鈴木萬次郎の夫人である。

此の翁の寓居へは、多くの學友が來遊されたやうだが、殊に翁と同縣有田郡湯淺町に近き水尻村の醸造家の令息で、當時、西ヶ原の山林學校に居つた谷友吉君は、殆んど日曜毎に訪ねて來て、酒を飲み興到ると、自宅で酒倉を立てる時の地突唄を謠うた。翁の記述に、

地突唄、多く聞いたが、たゞ一つの唄の初めに、ヒロノナアーエ、ヒョコ〳〵ヒョータン、ヤアーエと言つたゞけを覺えて居り(中略)。何故か瓢簞は酒よりも一層、地突きに緣厚き事と感じた。それから二年して予は渡米し、三四年へて、谷氏は四國で狂死したと聞き、其の後彼人を想ひ出す毎に、件の地突唄が耳底に響くやうに覺ゆ云々(ドルメン三ノ五)。

誰しも覺えのある事で、上京早々は故郷の事が想ひ出されるため、翁も同縣人を悅び、他愛もなき唄など謠ひ合うて、一時の興を買つたものと想はれる。

大學豫備門に入學してからは、本郷湯島臺の下宿屋に轉居したが、或日、浴場に赴き珍しい物を見た翁の自記に、

(上略)田邊町などには、垢だらけの湯に入て、それで口を洗ひ、何とか病を防ぐと信じ行ふ者がある。明治十七年予東京湯島に下宿した折、春はあけぼの、いと早く朝湯へ往くと、底まで見えすく槽内に、六十許りの老人が入つて居り、其の肛門長く脫け垂れて、カラスミの色なせるが、明かに眼にとまる。老人動くに隨つて金魚の糞の如く、翩翻たる如く覺えた。不快でならぬ故、上つて背を流し居ると老人は漸と立去つた。其の迹へ四十許りの男が入り、其湯で口を嗽ぎながら、頻りにアヽイヽお湯だと連呼してゐた云々(民俗學四ノ五)。

此の浴場では、學友二三と携へて入浴し、奇想天外より落ちる光景を目擊した事件があるも、茲に省略に從ふとした。

翁は在學中、好んで色物の寄席を聽き歩いたと見え、その記事が二つほど殘されて居る。

明治十七八年の頃、神田の萬世橋近くに白梅亭(中山曰、今の廣瀨中佐銅像の近くであつたが、大震災前に泯びた)といふ寄席があつて、學生共が夥しく聽聞に出かけた。立花屋橘之助てふ若い女が、前座、種々の藝當を演じた。紀伊の國入りの都々逸と云ふのをよい聲で唄ふを、自分生國に緣あるゆゑ屢々傾聽したが、同

伴の親友一山直祐、木村平三郎などが、バーのフェイスのコントストラクションが絶好だなどと、大きな聲で種々とまぜ返すのに氣を奪ばれ、何度聽いても全くは記憶し得なんだ云々（民俗學四ノ七）。

磐城荒濱町の萬町節云々。明治十八年予大學豫備門に在つた時、柳屋つばめと云ふ人、諸處の寄席で奥州仙臺節を謠ひ、予と同級だつた秋山眞之や、正岡子規など、夢中になつて稽古して居た。其うちに『妾××××播磨の名所、緣は高砂中明石、邊に舞子の松林』云々と云ふのがあつた。程なく渡米して、沙翁全集を買ひ、眼を通す、是れはしたり、文明國の士女が、文章にも行儀志操にも、典型と尊崇すると聞いて居た沙翁著作中の叙事詩「ヴィナス・エンド・アドニス」に、女神ヴィナスが、無情少年アドニスを、鹿、自分を園に比べて他を口說く其園の光景を、丁度、件の播磨名所同然に述べありたり云々（鄕土研究一ノ九）

當時の大學豫備門が天下の登龍門であつて、海内の秀才を集めたことは言ふまでもなく、翁も其の一人であり、又、學友にも英俊の者が多く、咸な後年には名を成し功を樹てゝ居る。小說家として且つは言文一致の首唱者として有名なる山田美妙も、亦た其の一人であつた。翁の自叙に、

明治十七年、小生と同時に東京大學豫備門に入りし土佐人に、山田武太郎といふ人ありし。學校は小生と同樣上出來ならざりしが、その頃南鍋町邊に兎屋といふ出版店あり、里見八犬傳を翻刻し豫約同樣の方法にて賣り出せり。それを此人が買つて日夜精讀して、小說にて名を擧げんと志し、最初に敦盛、熊王丸から平田三五郎までの事歷を、當時流行の新體詩に作り、少年姿といふ薄冊を出し、それから追々著書を出して立派な小說家となりしが、後甚だ不遇な目にあひ、小生洋行の五六年立たぬうち窮死せしと承る。此人は、美妙齋と號せし名にそむかず、白哲紅顏の人なりき云々（大日、二六五號）。

猶ほ翁の逸話に關しては、翁と親交ありし海軍中將中島資明氏、及び廢姓外骨氏より面談を受けんと用意したが、是等に就いては翁の門葉に依つて編纂さるゝ本傳に採用さるべきを信じ、こゝでは態と差控へる事とした。

四、翁がヘコマサレタ話

勝ッ氣だから神經質なのか、神經質だから勝ッ氣なのか。そんな關係はどうで

も宜いとして、兎に角に極端なる負けじ魂の所有者であつた翁が、ヘコマサレたのであるから面白い話である。上松翁氏談に、

ロンドンの話ですが、先生は、例の五分刈頭で、シルクハットこそ持つて居たが、服裝には全く無頓着、或食堂へ往くと、一名の英人が『貴方はブリチッシュ・ミュジアムに勤めて居るさうだが、そんな穢い着物を着てゐるのは、どうかと思ひますね』と話しかけた。着てゐるフロック(別項フロックコートの由來參照)は、文字通りの羊羹色だから、さう言はれるも無理はない。處で先生ムッとして、何を生意氣なとばかり『それではお前んとこの式部長官はどうだ。あれも隨分羊羹色をして居るではないか』と遣り返すと、『あれですか、あれは羊羹色に見えて居て、實は生地の非常によいフロックだ。その上、式部長官は下シャツから上シャツまで、一日に六回は取替るのです。貴方のやうに汚れた上シャツや、數日も着替せぬ下シャツを着てゐるのでは問題にならん』と云はれて、流石の先生もギャフンと參られたさうだ云々。

街へ出ると犬が吠えるとて、素人下宿の屋根裏に籠つて居た頃の話と思ふが、粗衣粗食に馴れた翁にありさうな逸話である。因に翁は、外國語(會話)を學ぶに、好んで食堂を利用したと、詳しく語られたが今は除筆する。

五、翁の爲に水火を辭せぬ三百人

翁が田邊に住居を構へた若い頃は、年々約束の生活研究費を、和歌山の令弟常楠氏方へ請取に出かけたもので、一年一度、それは殆んど田邊の年中行事とも云ふべきであつた。そして、愈々當日になると、翁は自宅に有るだけの紙幣を悉く銀貨銅貨に替へさせ、それを双方の袂へ入れ、多勢の人に送られて家を出で、波止場まで往く途中、その銀銅貨を撒きながら歩みを運ぶのである。それは恰も江戸の昔お葬式の行列が、花錢を撒くのと同じ遣り方である。そして、豫め此の事あるを知つて居る町内の車夫、馬丁、裏店小店の山ノ神、腕白小僧など、幾百人といふ群衆が道の兩側に堵列し、その錢を拾はんものと押し合ひへシ合ひ雜鬧筆舌に絶えたる間を、十九貫餘の巨軀を悠々と運びつゝ、羅漢面の眼尻を四十五度位に下げ、ニコ〳〵しながら乘船するのである。『吾輩の爲に水火を辭せざる者三百人あり、是れを起さば天下を取るべし』とは、翁の豪語する處であつたが、實は此の撒錢で手なづけた連中

である。とにかく、田邊に於ける翁の威望と信用とは絶大なもので、單に先生といへば翁の事だと町民悉く承知してゐる。道德講話に來た縣廳のお役人に對し『女のみさほとは、どんな竿ですか』と奇問を發して、お役人の眼の玉を白黑させた、熊野浦でも、『南方先生』と云へば、泣く兒もだまるといふ勢ひだつたと傳聞した。

六、土宜管長に鼻汁かます

翁は渡米前の明治十九年と、歸朝後の大正九年、同十年の三回、高野山に登つて居るが、その最後の大正十年は單身登山して粘菌を採集された。

當時の高野山座主土宜法龍師(古義眞言宗では管長が座主を兼帶した)は、屢記の如くロンドン以來の學友、殊に前年も登山し舊交を溫めてあるので、此の際にも訪問宿泊した。靈峰の夜が更けて主客の淸談がはずむにつれ、慢性鼻炎の持病ある翁の水涕が二本、啊呑の息に伴ひ出たり入つたりする。見るに見かねて土宜管長が『ソレ蜂の子が出た』と云ふと、翁は馬が行燈をくはへたやうな長い顏を突き出して、鼻汁をかんでくれと頤をしやくつて眼で知らせた。管長は據ろなく懷中から

南方翁の自畫自像

大正十年十一月三日、翁單身高野山に登り、粘菌を採集し收穫多きを悅び、矢立の禿筆を呵して穫たる菌類を前に、右手に酒壺を左手に筆を持てる自畫自像を描き、高足の小畔四郎氏に寄せた。翁の得意喜悅また憶ふべきである。

拜呈一昨日登山、去年ノ一乘院ノ室ニトマリ菌ヲ畫スルコト夥シ
昨日苦ノ新屬一本發見致シ候
久さびらは幾劫へたる宿對ぞ

熊楠畫

鼻紙を出してかんでやつたが、その部屋が恰も文祿四年七月に關白秀次が自殺した次の間であつたので、翁は直ちに作句した。

鼻かまず次は關白自殺の間

高野山の座主に鼻汁をかませたのは、天上天下僕一人だと鼻うごめかしたものだが、晩年に、翁を訪ねた早川孝太郎氏に由れば、翁の居室には新聞紙を細かに切り、それへ紐を通して天井からさげて置き、絶えず其紙で鼻をかまれたとあるから、翁の慢性鼻炎は後々まで全治しなかつたやうである。

七、翁の博士無用論

下村宏(海南)氏『南紀人材論』を著し、その一節に『先づ理學博士に南方熊楠君を推薦すべき理由ありと信じてゐる。尤も同君は何ンとも思うて居らぬだらうが、僕は君が受けても受けなくても授與したい』云々と述べたが、翁は是れに對し左の如く記してゐる。

只今、臺灣の民政長官たる下村宏氏は、當世向きの駿才なり。此人の父は小生

と同郷にて、幼時同座せしこと多し。此人「南紀人材論」とか云ふものを著はし、其内に津村秀松氏はナゼ今に博士にならぬか。南方氏は無論理學博士たるべきものにて、假令、本人が受けぬ迄も押付て博士にすべしと公示しあり。一種の見解により、又身の遭際履歴より、所謂、毛嫌ひして、かゝる事好まぬ人多し。專制政府の人にすら僧正を辭するとて渡し守に身を變ぜし玄賓、新太郎で押通せし池田光政など是なり。斯樣の事は强ゆべきに非ず、小生親しく見る處を以てすれば、吾國では專ら纔かの末事なる智識技巧を標準として、猥りに博士の號を授くるが如きも、海外では決して然らず。必ず溫良の質に加ふるに禮容あり、威德ある者に限りて、かゝる榮位を授くる風なり。小生の如き廉暴無禮惡謔絕えず、動もすれば上長を犯凌する者が、たとひ少々の讀書をなしたりとて、博士號は姑らく措き、學士號さへ授かるべきに非ざるなり云々。

翁の此の意見を他の語で云へば、博士無用論に歸着するのである。然るに「和歌山縣人材錄」には、翁こそ文學、理學、醫學、農學の四博士の學位を受くる資格があると記して居るが、翁が聽かれたら、さぞ苦笑されたことゝ想はれるのである。

八、國學院大學の不講演事件

大正十一年夏に翁が研究所基金を募集のため、三十六年振りに出京したことは既記を經たが、翁も此の時は頗る眞劍で、先づ高橋是清首相に面會して、共立學校時代の學恩を謝し、次で上京の用件を語り敬意を表し、舊藩主德川賴倫侯より壹萬五千圓、岩崎小彌太男より壹萬圓、大橋新太郎氏より五千圓などを主なるものとして、やゝ所期に近い金額に達することが出來たのである。

此の滯京中に國學院大學(當時は麴町區飯田町所在)の一教授から筆者まで、翁に一場の講演を依賴して來たので、筆者は翁と打合せ日時(夜間)を定め、會場は同大學の大講堂と定めた。

當日の午後五時頃に筆者が迎へに往くと、素ッ裸が好きの翁も、流石に紋服袴に着替へてゐたが、まだ早いといふので、二三雜談の末に、自動車で筆者は翁と同乘して往くと、同大學長の芳賀矢一博士は、大學豫備門時代の學友として、在りし昔を懷しがつたのか玄關まで出迎へてくれる。多數の教授や講師も、碩學南方先生の高說

を聞かんものとてズラリと控室に居並んでゐる。

翁は玄關先きで芳賀學長と久濶を叙し、やがて控室に入るなり早く、其處の椅子に腰かけてゐたT教授を見て『ヤア、君の禿ッ振りは、年の若いに似ず、實に立派なものだネ』と言ひながら、腰から白扇をぬき出して開き、T教授の天窓を頗りに煽ぎ始めた。筆者は見かねて、翁の不作法をとめると共に、T教授に對して失禮を詫びたが、其の間に翁は何を思うてか、椅子に靠れたまゝ高鼾、起せど搖れど正體ないので、大講堂に詰めかけた三百餘の聽衆には、筆者から事情を告げ散會したことがある。後年、翁は同夜の經過を上松蓊氏に語られたが、不講演の理由は『始め十五六人の學生に話してくれと依頼しながら、大講堂へ引ッ張り出したからだ』と云ひ、更に翁は、

吾輩は、英國の或るビショップの眞似をしてやらうと思つたが出來なかつた。そのビショップといふ奴は、破れたズボンを穿いてゐて、神樣を拜せよなどゝ云ひながら、向ふを向くとズボンの破れた處から尻が見える。婦人などは忽ち大笑ひ、と云ふ滑稽なんだ。あの眞似をしてやらうと思ひながら、倒々、それが出來なかつた。

との事である。或は斯うした內情があつたかも知れぬ。若しさうだとすれば、筆者の不行屆に由る事とて、學校へも翁へも相濟まぬ儀であつたが、迂濶な筆者は、そんな事に少しも氣付かず、上松氏の話で始めて事情を知つたのである。

併し、それは姑らく別として、元來、翁は座談は巧みであり、勿論、話題にも富んで居たが、二百三百といふ多數の聽衆に向ひ講演するのは不得手であつた。それは體格の偉大なる反對に低聲であり、殊に關西辨の紀州訛り、娓々として說くのに適し、堂々と論ずるには不向きであつた。

九、蟹の研究で床屋に教へを乞ふ

翁は和中在學の頃から、蟹の研究に興味を有ち、よく空辨當の中へ蟹を入れて自宅へ持歸り、形態を寫生したり生活を觀察したことは旣載したが、翁の歿後に令弟常楠氏方の倉庫に收藏せる標本のうちに、多數の蟹の標本が發見されたと云ふ事である。

そして、是れに就いて想ひ起される事は、翁が雜誌『不二』に『平家蟹の話』と題し、翁一流の內外古今に涉る引例該博の記事を寄せて居るが、文獻だけでは判然せぬ處が

あるので、昔時の社會感情から云へば、多少とも下り職であると云はれた床屋さんを態々訪問して教へを乞うた顚末が載せてある。學問に忠實なる翁ならでは出來ぬ事と考へたので、その點だけを摘錄して後昆に傳へる。

當田邊町に今川林吉と云ふ人、夥しく蟹類を集め居ると聞いたから、七月十二日(大正二年)の新聞[不二]に堺の水族館の記に『滑稽なのは平家蟹で、何か背負て居ないと納らない性だから、嚊が死んだら其亡躰を死ぬまで背負て居る。誰も死なぬ時は石を背負ふさうな』とあるを見て疑ひを起し、判斷を問はんが爲め、今川林吉氏を訪ふと、唯見る三間半ばかりの表て屋を二つに區切り、一方は牛肉小賣、一方は斬髪床で、主人林公、眉目清秀、音吐嚠喨、晝は剃刀と庖丁を把て、雜客の髭髮を剃除し、夜は早仕舞で風流俳諧を事とする(中略)。

扨、挨拶濟んで、平家蟹の一件を持出すと、當地に少なからぬ物ゆゑ、毎度飼て見たさうで、其經驗談を聞て大いに得る處があつた。氏の話に據ると、平家蟹は底が砂で、小石が散在する海に棲む、潮水を取替て飼へば幾日でも生きて居る。仰けに仆せば背の小脚で忽ち身をさゝえ起すが、外にまだ〳〵面黑い事がある。乃ち彼を飼ふに、水盆中に石片を多く入れ置くと、必ず小脚で一石片を負ふ。それから思ひ付て盆の一半を板で覆ひ薄闇くすると、幾度も幾度も石を背負て陰に運び置廻りて、程なく畑中の糞壺の雨防ぎに被せた藁小屋やうの圓廬を作り、一方に口を開て中に棲む。幾度崩されるゝも倦まず撓まず立直す。此蟹の背に、忿怒の面相あるは誰も知るが、腹もじつと視ると朧げながら鬼面の相がある。して見ると、甲內の臟腑の配置が外に現はれて、偶然異相を示すのだらうと。今まで書物でも見ず、氣も付かなんだ事を敎へられ、大いに天狗の鼻も折れ、仕方がないから、三國志諸葛武侯司馬懿に巾幗を贈て戰ひを挑む、巾幗は婦人の飾なり。懿怒て決戰を請ふ上表の文に、豈知らんや野夫にも功者ありとは貴公などを指したんぢや、陳勝は出世したら相忘れじと云つた。立身したら用ゐて上げるから忘れずに居るが宜い。然し昔から床屋で立身した人を聞かぬから、こんな約束は先づ止さうと憎まれ口を吐て逃げて來た。扨、學問は活物で、書籍は糟粕だ、書に見當らぬ事も間違つた事も多く、大家碩學の作述には至極の臆說もあるは、西人の平家蟹に關する諸說でも解る。

科學の學理のと大層に言へど、矢張り過去無數劫以來、無學の者が經驗を積んで來た結果に外ならぬ。磁石や火藥の發明は申すに及ばず、海潮の原理、地震の

觀測、强性ゴムの應用、色刷の板行、其他東洋人が西洋人に先鞭を着けて、成功したものも多くある。假令、世に知られずに終るとしても、床林君が廿年前迄(恐らくは今日迄も)歐米の學者が確言し得ざりし平家蟹の脚に大小ある理由を、誰に教へられずに氣が付いて、實驗確證したのは、學界の偉功ぢや(大正二年十月發行第四號)。

往年、翁が再上京した折に、舊知の理學博士渡瀨庄三郎が翁を高田屋旅館に訪ね歡談されたが、その折に翁が『君の其の後の蟹の研究はどの邊まで進んだか』と質問すると、博士は『面目ないが外國から歸つてからは、何ンにもして居ない、何分、日本の學生でソウ云ふ篤志な者が無いから、自然、自分も怠ることになつた』と、氣の毒のやうに答へたものだ。翁が蟹の事を討ねたのは、自分に蟹趣味があつたからで、又、自分は他の全く顧みぬ粘菌の研究をつゞけて居る、篤志家だといふ誇りも伴うて居たのである。

一〇、リスター女史の震災見舞金

英國の粘菌採集家ジー・リスター女史が、翁の人格と學問とを尊敬し、珍奇なる多數の標本を兩度に及び送り來たことは既述したが、大正十二年九月一日の關東地方の大震災を知つた同女史は、直ちに自分は二十磅、二人の妹に五磅づゝ合計三十磅を、政府に渡さず窮乏せる婦人にだけ給與されたしとの條件で、翁の許に送金して來た。

然るに此の送金小切手は、英國内だけしか通用せぬものなので、翁も處理に困り、是れを上松翁氏に轉送し、相當の處分方を依頼して來たので、同氏は臺灣銀行東京支店に懇談して、現金三百餘圓に換へ、煙山專太郎氏夫人や新渡部博士令息夫人などの經營せる『愛の家』へ、東京市役所吏員大迫繁氏の紹介で寄附したのである。

ジー・リスター女史は、父エー・リスターの遺業を相續し、一生涯をオールドミスにて粘菌の研究に沒頭せる人にて、今に健全なれば七十八九歳で、南方翁より三四歳の姉だと云ふ。そして、此のリスター親子は、翁の學績に敬意を表し、親も子も日本の粘菌に就いては必ず南方翁の偉業を著書に載せて居る。全體、英人は米人と異り、震災などに義捐するのは稀有であるにもかゝはらず、リスター女史が敢て此の擧に出たのは、翁の學德を常に禮讃してゐる結果と見るべきである。

今や父翁を喪はれた文枝嬢は、我國のリスター女史たるの境遇に置かれて居る。

學問が必ずしも人間を幸福にするものだとは斷言できぬが、翁の學統を繼ぐ者として蓋し好適ではあるまいか。翁の血筋を永く貽すと共に、翁の偉業を承けんには、巾幗の双肩には堪え能はぬ重荷かも知れぬが、文枝孃の孝心と聰明とは、これを成しとげられるものと信じてゐる。

一一、紀州名産「華井紙衣」と翁の研究

紀州に古く『華井の紙衣』と云ふのが產出されて居たことは、南方翁も夙くから氣附かれたのであるが、それが果して如何なる物であるか、又、如何にして研究すべきかに就いて、永い間を心懸けて居た。然るに和歌山縣立新宮中學校教諭の小野芳彥翁が、斯うした事に造詣が深いと傳聞し、書中を以て他の案件と共に是れを小野翁に質し、同翁も克明に調査して答へるなど、篤學なる兩翁の往復文書は、後人の教へらるゝ處が多いので、左に「小野翁遺稿熊野史」から摘要轉載する。

昭和五年九月四日　南方熊楠　再拜

小野芳彥様

（前略）次に左の件に何卒御教示を仰き上候云々（中山曰、第一問省略）。

二、和漢三才圖會卷二十八に『紙衣奥州白石、駿河安部川、紀州華井、攝州大坂出之、華井特佳』とあり、只今はどうも無きことゝ存じ候が、御壯年の頃迄は、華井より紙衣出し候事にや、又維新とならぬ内にはや此の業は廢れ候事にや、又紙衣は廢止となりしも、多少それに緣ある紙を、近頃まで製出候事にや、此事御示し奉願上候（中山曰、外八項目省略）。

昭和五年十月廿六日　小野芳彥

南方熊楠先生

（前略）過日の御懇書、五日ありがたく拜受董誦仕候（中略）。早速拜酬可申上筈のところ、御垂問を蒙り候諸項、寡聞にして心得申さゞるもの多く、夫是聞合せに相應手間取り、殊に花井紙衣の方は、親しく實地に就きて調査仕候上御報申上度と存じ居り、始終念頭に往來致し居りながらも、はからず遲延今日の久しきに及び候次第に有之、幸に御寬容御諒恕を賜り度、漸く二十一日同地へ出向けまゐり、翌

朝へかけ、ほゞ調査を遂げ來り申候につき、茲に拜答申上候(下略)。

尙々九重宗花井平音松氏方にて、貰ひ受けまゐり候『玉井十文字紙』(澁ひき居り多分蒲團裁製用のもの)紙一枚分ほど、別包を以て拜呈申上候云々。

華井紙衣の事(今は花井と書きます)云々。

花井紙は『十文字紙』と稱し、明治維新前迄は、今の南牟婁郡上川村大字(玉井區北山川の左岸)は、家々全體(其の頃は七八十戸、今は四五十戸)、東牟婁郡九重村大字九重(同右岸)字花井の方でも石垣寅吉氏方、平音松氏方等、數軒之を漉いた者であつて、原料は楮一式にて、それに少許のトロロと呼ぶ楡の皮を混和し、縱横十文字に漉き上げたもので、紙質は音無紙(鼻紙)の原産地なる敷屋村大字高山にて、茶袋用などに漉くタテ紙によく似て居つて、やゝ厚く白く美しく、ズット力が强くあり、永久保存の要ある古證文類などを、よく認めたさうでございます(中略)。

紙衣に致すには、右の十文字紙を、雨の日や夜業に丹念によく揉み和らげ、蒲團用にするには更に澁を引いたもので、花井許りでなく近鄕にも紙衣、紙帳、蒲團など所持した家も少くなかりしも、只今では玉井でも平音松氏方に、古き蒲團が二組殘存して居る許りです(下略)。

昭和五年十二月　　南方熊楠　再拜

拜啓　過日御直贈の花井の原紙片は恐らくは往時盛に造出されたる玉井紙の最後の品と被存、殊の外祕藏可致候、小生もさし當り跡を渡すべき子供は永々病氣にて、入院、行末の事も分らず何とか詳しく考證を付して、東京帝大、又は然るべき所に寄贈し、永く後代迄の參考に供し度候、就いては御記載に相見え候、平音松氏より貴方へ讓受けられし年月日、當時平氏の年齡と、失禮ながら貴君の年齡と、又之を常用せられたる平氏御老母の御名と、終焉の歲月と年齡を御聞合せ一々御記し付の上、乍御面倒御送來奉願上候　恐々

昭和五年十二月十九日夜　　小野芳彦　再拜

拜讀　御令嗣樣には永らく御不快にあらせらるゝ御趣御憂慮の御程拜察申上ます(中略)。

花井紙の方、詳細なる御考證を御添附、東京帝大又は然るべき所に御寄贈あそばし、後代迄の御參考に御供へ遊ばさるゝべき御召の御趣、誠に以て光榮の至り、

花井紙靈あらば元祖貞流尼と共に、御知遇の有難きに感泣致す事と存ぜられます(中略)。

花井に移られた尼君といふのが、花井紙の元祖貞流尼であつて、村人に始めて花井紙を漉く事を敎へ、同時に加工して紙衣や蚊帳や蒲團に裁製する事を敎へられ、かくて寛永三年丙寅九月十二日、こゝにて往生したものと推せられます(中略)。

平音松氏より花井紙を貰ひ受けし時日

前回分は昭和五年十月廿一日、今回分は同十二月十八日

年齡の方は　小生(小野翁)當年七十一歲、萬延元年二月七日生

九重村平音松氏は　當年七十五歲、安政四年二月十一日生

晩年花井紙の蒲團をよく被られた音松の亡老母

平なを　昭和二年三月廿五日死　當時八十七歲ださうで御座います云々。

先は右拜酬迄、爲國家、爲學界、折角御自愛御保攝を祈り奉ります(下略)。

猶小野翁の別筆(考證篇)のうちに、華井紙衣の記事があるので、此の機會に抄出する(中山記)。

明治維新前迄は、地元(花井)の家を始め新宮木ノ本邊にも紙衣、紙帳等を所持せる家が少くなかつたが、今は地元でも平音松氏方に、蒲團二組保存されて居るだけのやうである。幾ら質が強くても紙の事故、洗濯が出來んので垢づいて來た時は、その上に其の上にと紙を覆ひ被せたさうで、現に音松氏方の蒲團の如きも、四重五重かさなりあり、ひける澁もさながら漆塗の如き觀を呈してゐる云々。

最初この蒲團の出來たのは、二百年以前であることは疑ひない(下略)。

昭和五年十二月二十日夜八時　　南方熊楠　再拜

拜啓　花井の紙布片、再度御惠贈に領り奉感謝候(中略)。斯樣の物は後代またと見らるべきものに無之、其の物なくして無暗に議論致候ても、何の據ろなくては空文虛議に畢るべく候。前回戴きし分は、當分當方へ留め置き、その中保存の見込立ちたる所へ寄贈して、永く後代の參考に供し度、又今回の分は東京考古學會發起人林氏(林若樹)外一名に贈り、永存させ度存申候(中略)。

小生舊師當町出身鳥山啓先生、生前和歌山故畔田翠嶽先生(紀藩隨一の本草學者)の遺著介譜を借り、悉く寫し置かれしが、其の後畔田家の原本は何れへか貸し

失ひ、鳥山先生の寫本のみ殘り居り候處、先年、嗣子岑雄氏(只今札幌大學教授)より、南葵文庫へ寄附し了しぬ。然るに東京震災後、南葵文庫を東大へ移せしに就き、此書も東大に移りたる事と存じ居り、一昨年翠嶽先生贈位の後、其の遺書を搜索する事ありしに、右鳥山先生の寫本は東大に移りある事と思ひきや、引移しの際誰れかゞ盜み出し、東京第一の豆腐屋の主文(ヘカ)へ、六百圓とかに賣りあり、之を買ひ戻さんと交渉するも、いか程の大金にても賣り渡さずとの事に御座候。故に寄附の寄贈のと云ふ事も、餘程、丁重に焦慮した後ならでは致すべきものにあらず、右の介譜などはいつそ南葵文庫などに寄贈せず、鳥山家に置いた方が、尤も安全なりしやうに被考申候云々。

南方翁の科學する心は、天資に由る事は勿論だが、その天資を暢達させたのは、此の鳥山先生の感化に負ふものが甚大である。南方翁が生涯を通じて『先生』といふ敬稱は、鳥山先生以外に決して用ゐなかつたと云ふ一事から推すも、如何に同先生に心服して居たかゞ窺はれるのである。

一二、翁の面會嫌ひと非妥協性

翁の面會嫌ひは有名なもので、氣に入らぬと誰彼の差別なく玄關拂を喰はせるが、筆者の聞知して居るだけでも、此の手にかゝつた者が尠くなく、中にはアノお方がと寧ろ氣の毒に思ふほどである。先年、子爵酒井忠一氏が、山岳會の用件で翁を訪問したときも、面會謝絶されはせぬかと、內心ビク〳〵ものであつたと語られた事がある。併し、翁も晩年には例の嘔吐をはきかける奧ノ手は、愼んで用ゐぬやうになつたが、其の代り氣に向かぬ話を仕掛けられると、片手を耳の處にあてゝ段々と顏をそむけて、相手に話の繼ぎ穗を失はせる新手を用ゐるやうになつた。そして、翁の面會謝絶に就いては、翁自身にも相當の理由があつた。其の大要は、

人生には時間ほど大切なものは無い。これは取り返しの付かぬもので、最も大切に使はねばならぬ。それに私の顏を見てやれとか何とか、冷かし半分に來る者に、一々逢ふてゐて時間を潰されてはたまらぬ。それに私は人に逢ふても得るところ少く、損をする立場にある云々(旅と傳說十五ノ四)。

損得の打算から面會を謝絶するとは、かなり利己的の態度のやうにも聞えるが、これが翁の僞らぬ告白であらう。南方研究所が設けられてから、筆者の友人が翁に高教を受けたいと申送ると、幾らでも研究所基金を寄附するやうにとの事なので、若干を送金すると、質問の事項に就き懇切なる返翰があつたと、友人が語つたことがある。筆者は此の話を聽き、これは翁が愚問を擊退する一石二鳥の方法だなと考へた。筆者も經驗のある事だが、郵券入りの駄問には、一切返信せぬ事にしてゐる。

翁の面會謝絶のうちに、世間と妥協せぬと云ふ、毅然とした學者的態度の在ることを知らねばならぬ。研究に必要だけの恒産あり、學位を望むではなし、名利に焦せるでもなく、事業の關係はなし、親族の係累はないと云ふ獨自の地位に居たのであるから、世說を迎へたり愚論に和する必要は微塵もなかつたので、自然と世人と遠ざかり、書齋にのみ籠つてゐるので、變人であり奇人でもあるかのやうに取沙汰されたのである。併し、翁は變人でも奇人でもない立派な常人であつた。

南方先生は平生『變形菌のことは、調査しても金にならず、大學あたりでも重要視せぬ。つまり金にならぬ學問だから誰もせぬ。だから私がやる』と漏してゐた。これは先生の本當の心として扱ふべきだと考へる云々（雜賀貞次郎氏來信）。

錢の話の嫌ひな翁にして、始めて言ひ得る事である。

翁は壯年の折は、身長五尺四寸餘、體重二十貫に近い堂々たる體格である上に、烱たる眼光は見る人を射すくめると云ふのであつた。往年大阪濱寺公園の宮武外骨氏の許に一泊せし時、代議士日野國明が席にあり、翁を見て『東京上野に在る、西郷さんの銅像に、そつくり其のまゝだ』と語られたとあるが（雜誌「不二」三號）、翁の風貌は全く生ける西郷であつた。されば、氣の弱い初對面の人などは、此の偉容に一種の壓迫感を受けるのであつた。早川孝太郎氏が初めて翁と面會せる折の光景を『先生を仰ぎ見たのであるが、何んとしても眼光に特色がある。二つの白眼の眞ン中に瞳がじつと据はつて』居るので（民族文化三ノ二）、正面をきる事が出來なかつたやうに書かれて居る。其のくせ案外苦勞人で、人障りも良いのであるが、兎に角、初めての人には煙ッたかつたやうである。

一三、葬禮に代人を遣り自宅で御詠歌

翁の晩年は、脚疾のため殆んど外出せず、宅内で研究を續けて居た。紀元二千六百年の奉祝式へ招待されても辭退し、和歌山の令弟常楠氏方の倉庫にある標本を、取りに往くと口癖のやうに言つて居たが、遂に其の事を果し得なかつたのである。

それが爲め友人故舊が歿すると、必ず代人を賴み遣り懇ろに弔問させ、殊に莫逆の心友であつた喜多幡醫師の永眠するや、葬禮には例の如く代人を遣り、翁は自宅で敬虔なる態度で、御詠歌三番を謹唱して、適に弔意を表したと云ふことである。

此の外出に不自由なるため、自然と他人の採集した標本に就き研究するので、これが心無き世人をして『南方は他人の褌で相撲をとる』などの陰口を言はせたのであるが、翁は決して研究を獨占するやうなことは絶對になく、斯うした場合は學名も報告も、必ず其の採集者と共同にするのが常であつた。

一四、山本提督に安藤蜜柑の傳達

昔から田邊町には三名物があつた。第一は安藤蜜柑、第二は古屋石、第三は繩卷鮨であるが、第二第三は本問に交渉が無いので姑らく措き、茲には第一の安藤蜜柑に就いてのみ略述する。

由來、田邊は紀州藩の國老(俗に幕府よりのお附け家老といひ、尾・紀・水の三家に限つた)安藤氏が代々城主として三萬八千石を襲封したが、初祖帶刀直次のとき、その庭内に一羽の鴉が蜜柑の種を落し、それが自生したので、是れを『鴉蜜柑』と稱すと傳へられ、又、一說には、直次が肥後から持つて來たとも云はれて居るが、兎に角に田邊が原産地で、且つ安藤家で成熟したので、一に『安藤蜜柑』とも呼んでゐる。

然るに此の安藤蜜柑の老木が、田邊に數本あつたが其の多くは枯損し、たゞ翁の書庫前の一本だけは、樹齡約百二十年といふのに、今に年々大きな幾十百かの果實をつけるのであるが、その蜜柑は翁の古くから推賞する處で、外國で珍重するグレープ・フルーツよりも氣品があり、味も高尙であつて、園藝上からも、もつと普及せねばならぬと、翁も常に語られ、曾て宮内省の園藝部長であつた子爵福羽逸人が此の事を耳にし、翁より苗木三十本を貰ひ受け、これを新宿御苑に移植したが、地味のためか氣候のためか、田邊の原産品に遠く及ばず、遂に斷念されたと云ふことである。されば翁が、此の老樹を愛すること非常なもので、數年前から害蟲が付いたので、田中敬忠氏に消毒を依賴したが、老木とて介殼蟲の蜜へ蟻がつき、何萬といふ蟻が猖

んに上り下りするので、翁は毎晩懷中電燈をつけて此の蟻を指で摩り殺し、電燈を三個も遣ひへらしたと云ふ事である。

そして、翁は毎年此の蜜柑が熟すると、友人に幾個づゝかを贈呈するのを樂みとして居たが、かねて上松蓊氏から、支那事變勃發以來、吾が海軍の聯合艦隊司令長官山本五十六大將は、上松氏と同じ越後長岡藩の出身で親交ある由を聽いて居たので、昭和十六年十二月八日、大東亞宣戰の大詔渙發と同時に、吾が海軍がハワイ眞珠灣にて偉大なる勳功を現はせりとの報を、ラジオ及び新聞にて知つたが、其の時の翁は既に病床の人となつて居たが、山本提督に對して燃ゆる如き感謝の念は、重患でありながらも烈々として禁ずる能はず。されどアレほど健筆であつた翁も、今は病氣のため躬ら執筆する事が出來なかつたので、同十八日に野口利太郎氏に代筆を頼み上松氏に發送した。その事に就き野口氏は、

その文面の大體は、今回の大勝利の大將は貴殿前々お話の山本五十六氏に之無候哉、相違なく候はゞ今年拙宅に出來候安藤蜜柑、その甘度は米國のグレープフルーツに勝り吉相よきものに就き、貴殿へお送りせしうちより、同氏へ差上被下度御願申上候(中略)、小生十三日より病中にて手足きかず、代筆せしめ候』云々といふのでした。先生も今回の大東亞戰爭の事を深く念頭に置いて居られたのです。翌十九日に鉛筆で小畔氏に、同じ蜜柑を送る手紙を書かれたのが、遂に絶筆となつたのです云々。

死の床に身を横へ、眼に見えぬ或る大いなる物の力に引かれながらも、猶且つ國事を憂ふる翁の心遣ひには、後人の學ばねばならぬ處が多いのである。

一五、翁の雅懷と其の作物

翁は極めて趣味や道樂の尠い方であつた。碁將棋はせず、歌俳諧は作らず、撞球も遣らず、音樂も嗜まず、纔に若い時は酒、老いては煙草を喫ふぐらゐであつた。勿論、翁の學問への精進は、斯うした趣味や道樂に歿頭して居る隙も無かつたのであらう。翁はよく『歐米人は日本人を馬鹿にして居るが、是れには學問で報復して遣るに限る』と言つて居たが、實際、翁の學問は、故國の面目をかけての勉勵であつた。

翁は殆んど雅號とか表德とか云ふのを用ゐず、大小の論文記事ともに本名で押通し、肩書も紀伊と記さず田邊と書いてゐた。その理由は今から知る由もないが、

或は田邊に住むことを誇りとしたのではあるまいか。

然るに茲に例外として、翁が變名を用ゐたことが前後二回だけある。第一回は大正元年十二月の「日本及日本人」誌上で、谷本富、浮田和民の兩博士が、乃木將軍の自刄を非難したのを讀んで翁は義憤を感じ、始めて『角屋蝙蝠』の變名で『自殺に就て』と題し筆陣を張つた。此の變名の角屋は、既載の如く福本日南が捧げたニックネームで、蝙蝠は田邊を鳥なき里に見ての意であらう。第二回は『鯀化』と云ふ號を用ゐられたと云ふことである（以上「旅と傳說」十五ノ四）。鯀化の故事に就いては知る處がないが、或は「莊子」の逍遙篇にある鯤と同じもので『鯤之大不知其幾千里也、化而爲鳥其名爲鵬』の義かも知れぬ。因に翁の法名のうち鑁覺の二字を、此の鯀化に改めたいと云ふ議があると傳聞した。

翁は自ら惡筆を以て任じ、水嶋爾保布氏に『小生は二十歳前より三十四歳の後まで、海外諸方流浪、何の用もなかりし故、落着て日本字を習はざりしため、日本字は自分にも讀み得ぬ程の澁筆なり』と云うて居るが（大日、二六五號）、書は其の性を表はすの譬で、稽古せぬ翁の字は、自然と匠氣なき脫俗の風格を具へて居た。繪畫は敎典を寫す折に、よく佛畫を臨模したものと見えて巧みであり、加ふるに標本類の寫生で相當に筆致がこなれてゐた。筆者は翁が高田屋旅館に逗留中に、全唐紙に正觀世音を畫き、それへサンスクリットで贊したもの、シヴ神像、後向きの美人畫など三枚を頂戴したことがある。

大正九年に高野山に登り、土宜管長とロンドン以來の對面をしたが、其の折に扇面へ翁は菩、管長は薩の合作をなし、更に翁は畫仙紙へ、藝妓が向ふむいて三味線を彈いて居る處を描き、それへ『佛法僧の聲をこそ――なんとか――空にひゞく三味線』と、高野山の風紀を諷刺したものを書き、その次は前の紙に『高野山その曉に寒むからん』と上の句を記して、下の句は『アイム、エヴァ、ドリーシング、フォンドリイ』と付け、和漢折衷の歌といふのはあるが、和洋折衷は己れが始めだと、大得意ださうであつた（以上、小畔四郎氏談）。此の外に他に賴まれ、又は自分で氣がむくと、色紙や短冊へ揮毫したものだが、稀に揮毫料として金品など持參する者があると、翁は臍をまげて『俺は書家でも畫師でもない』と云ひ決して書かなかつた。又、翁は書畫ともに熊楠と記し『誰も僞造する者もあるまい』とて捺印しなかつた。

翁の短歌や俳句は、悉く卽興的の口ずさみであつて、且つ模倣時代を脫して居ぬのであるが、それでも博學者だけに首を捻ねらせ腹を抱へさせるものがある。下

に筆者の知り得たるものだけを擧げる。脱漏の多かるべきは言ふまでもない。

高野山にて朝夕豆腐の食膳に上るとて

心なき身も豆腐は飽かれけり

高野の山の秋の夕飯

妹尾官林に居りし時

吾が部屋は奥山つゞき谷深く

簷端に太きつゞらをぞ見る

地方の疲弊を見て

汝や知る田舍は海の潜水器

下るにつけて上る吐息は

亡友羽山氏の故家を訪ねて

忘るなよとばかり言ひて別れてし

その朝霧のけさぞ身にしむ

偶成

さし足で吾が酒盗む寒さ哉

縄卷鮨を贈るとて

縄卷の解くる心や梅の花

高野山にて新粘菌を發見

くさびらは幾劫へたる宿對ぞ

御前講演

ありがたき御代に椿(あふち)や花ざかり

附

錄

神社合併反對意見

南方熊楠

本意見書は、明治四十五年四月十五日發行以降の雜誌「日本及日本人」に、四回にわたり連載せるものを、茲に轉載したのである。實際、明治終期に於ける神社合併事件は、明治初期に於ける排佛毀釋運動と同じく、信仰界に與へた影響は、重大なるものが在つた。翁の此の意見書は、獨り翁の國體觀・神祇觀・社會觀等々と併せて、翁の洽聞博識を知るばかりでなく、神社の合祀が如何にして行はれしかの事實と過程とを後世に傳ふる金玉の文字として珍重すべきである。神佛分離や排佛毀釋に關する記錄が多いのに反し、神社合併の文獻は、纔に此の一篇だけと思惟したので、敢て此の擧に出た。猶、挿入の寫眞數葉は省略した。（中山太郎記）

明治卅九年末、原内相が出せし合祀令は、一町村に一社を標準とせり。但し地勢と祭祀理由に於て、特殊の事情有るものと、特別の由緒有るものにして、維持確實なる者は、合祀に及ばずとし、其特別の由緒とは、次の五項也。

一、延喜式及び六國史所載の社と、創立年代の之に準ずべきもの。

二、勅祭社、準勅祭社。

三、皇室の崇敬を有せし社(行幸、行啓、奉幣、祈願、社殿造營、神封神領神寶等の寄進ありし類)。

四、武門、武將、國造、國司、藩主、領主の崇敬ありし社(奉幣祈願、社殿造營等上に同じ)。

五、祭神當該地方に功績緣故有りし社。

扨、神社には必ず神職を置き、村社は年に百廿圓以上、無格社は六十圓以上の報酬を出さしむ。但し兼職者に對しては、村社は六十圓、無格社は三十圓迄減じ得。又神社には基本財産積立法を設け、村社五百圓以上。無格社二百圓以上の現金。又之に相當の財産を現有蓄積せしむと有り。詰り神職も無く、財産も定まらざる、廢社同然の者、又運命不定の淫祀の類を除き、其他在來の神社を確立せしむるに力めたる也。

然るに此の合祀金の末項に、村社一年百廿圓以上、無格社六十圓以上の常收有る方法を立てゝ、祭典を全うし、崇敬の實を擧げしむと有り。祭典は從來人民好んで之を全うし、崇敬も大臣が一片の訓令を待たずとも、朝夕誠意を盡し居れり。新定の常收有る方法に至ては、幾年內に之を立つべしと云ふ明文無く、加ふるに合祀の處置は、一に之を府縣知事に任せ、知事亦之を功績の書き上げにのみ汲々たる郡村長に一任せしなり。地方の官公吏は、可成速急に成績を擧げんとて、氏子共に勸めしも、金錢は容易に集まらず、因て一町村一社の制を勵行して、地勢民情を問はず、成る丈け神社を多く潰すを自治の美擧と做し、社格の高下に關せず、最初五百圓積まば千圓、次に二千圓、三千圓と糶上げ、和歌山縣は五千圓、大阪府は六千圓迄、基本財産を增加して、早速積立つるやう人民に迫り、以て合併を强行し、多くは郡役所、村役場に近き社、若くは伐るべき樹木少き社を、一町村一社と定め、由緣、地勢等を一切構はず、諸社を濫りに合併して、神林を伐盡せしむ。因て人民の恐惶迷惑一方ならず、奸人機に乘じて私利を營む者多し。四年前の「神社協會雜誌」に、伊勢の神官生川鐵忠氏が、神社整理に伴ふ弊害を列擧せるは、普ねく諸府縣に行はれし事實にて、伊勢に限るに非ず。氏曰く、從來一社として多少莊嚴なりしを、合祀の爲め、卑陋なる協立小祠に變じ、詰り十社を一社に減じたるのみ。又大字限り行ひ來れる祭典は、張り合ひなしとて全く廢止す。又合祀されたる社の氏子、路遠くて多くの時間を要し、合祀先きに參り得ず、縱かに總代のみ詣ずれば、合祀の社殿を有する部落の勢ひ優れるに比して、俘虜の如く戰々たり、遂に祭日社參せざるに至る。又社地の欝林老

樹は伐拂はれ、賣て得たる金は、疾くに他の方面に流用し去られて、空しく切株を見る。殊に甚しきは、神殿、拜殿等にして、訓令の制に合はぬ點を、杉丸太の亞鉛葺き等になし、何れ改造する見込み、當分御不勝を願ふと胡麻化し了る。又多年等閑に附し來たれる神社を、一朝嚴命の下に、其人も無きに、其れ神職を置け、基本金を積めと、短兵急に迫られし結果、氏子周章、百方工夫して、辛うじて存立を得たるも、造營まで手は中々屆かず、又氏子等工夫して、神官の俸給を割引する事行はる。是れ實に一時埒明き合祀也。神社整理か、縮少か破壞か、此の如き神社と神職とに、地方自治の中樞たるを望むは、或る一部にては神道の衰頽と云ふと結論されたり。

五萬の神職、私利のみ打算して、親方の潰るゝを平然歡喜する中に、生川鐵忠氏は、眞に鐵中の錚々と謂つべし。然し乍ら、住吉の松さへ枯盡さるゝ世の中、神風も一向伊勢に吹かぬと見え、誰も生川氏の後詰をなす者無く、さしも神敎の聖地と外國まで聞えたる、伊勢熊野の土に就て、昨年六月迄に、三重縣は五千五百四十七社を減じて、九百四十二社卽ち在來數の七分ノ一のみを存し、和歌山縣は昨年十一月迄に、三千七百社を六百社卽ち從前の六分ノ一許りに減ぜり。例へば伊勢の相可一村のみにても、式內社三社を破却し、式內大分神社は式外の社に合併され、相鹿上神社は名のみ他の式內社に合祀して、神林を全伐し、他の一の式內社は、合祀後譯も無く相生神社と改稱さる。世間の事何ぞ對無らんや、紀州の瀧尻王子社は、古へ熊野參詣の輩、之を下品下乘の第一の樂土と仰ぎし由[源平盛衰記]に見え。陸奥の秀衡が黃金づくめにて建立せる七堂伽藍、天正時代まで存し、殊に前年大學にて叡覽に供し奉りし、瀧尻懷紙の成りし名所也。然るに合祀の後これを十郷神社と號し、神職の社宅を造るとて老樹を伐り賣り、其の神職は忽ち死亡せるも、今も猶近傍の神林を伐りつゝあるなり。

予、斯かる亡狀を歎き、同志と俱に抗議する事三年、就中、代議士中村啓次郎氏、衆議院に一時間宛の質問演說を試むること已に二回、又予が藏する合祀慘狀の寫眞を平田內相に示し、懇談する所有り。政府の訓令寖々寬和に赴くと雖も、地方の吏員、手を換へ品を換へ、合祀を强ふる事息まず。大臣や神社局長は、決して合祀勵行を好まずと明言せるに、本年二月和歌山縣知事の神社に關する訓示には、危激嚴酷の文字もて『無洩整理せよ』『神社收支決算の時期來れり、此機會を以て嚴に窮追督勵を加へよ』など述べたり。之が爲に日高郡などは、神社の收支を事實に關らず、二百五十圓以下に認るを得ずと命するに至る。正直の頭に神宿ると云ひ、民信無くんば

立たずと云へり、然るに何等急激事にも非ざる合祀を遂行せんが爲に、民に强ふるに虛僞を以てするも甚し。支那と言へば詰らぬ國と惑笑するが本邦人の癖也。されど予が目擊する所を以てするに、今日地方長官や屬僚が、所在定まらずに浮萍と一般なるより、永久的に地方の爲めを謀らず、書き上げを美しくする事のみに勉め、苞苴盛行、虛僞惟れ勗む。加之、淫虐亡狀、民を視る事猫犬にだに及ばざるは、淸國の滿洲官人、北亞非利加のトルコ人と異なる無し。唐の宣宗聰察あり、密かに韋澳をして、洲縣境土風物及び諸利害を纂次せしめ、一書となし「處分語」と號く。刺使入りて謝して出る有り、其處分驚くべきを言へり。建洲刺使入て辭す、宣宗問ふ、建洲京師を去る幾何ぞ、曰く八千里、宣宗曰く、鄉到彼爲政、朕皆知之、勿謂遠、此階前則萬里也。吾が爲政者、地方官吏の報告を信ずるに先ち、多大の聰察を用ゐる處あれ。

去年十二月十九日と、今年一月廿日の「讀賣新聞」に據れば、其筋の意嚮として、在來の十九萬四百の神社より、府縣社五、鄉社十五、村社五千六百五十二、無格社五萬千五百六十六、計五七二三八を合併し了り、目下合併準備中の者、府縣社一、鄉社十二、村社三千五百、無格社一萬八千九百、計二二四一三社有り、殘る十一萬計りの神社も、尙ほ減ずべき見込あれば、地方官を督して一層之を整理し、又神社境內の社地を整理せしむべしと記せり。又當局は、合祀に因て鄉黨の信仰心を高め、基本金を集め得たる等、其の效果著しと言明せる由也。之と對照して怪訝に堪へざるは、前和歌山縣知事川上親晴氏の言として、二月廿一日の「和歌山新報」に揭ぐる所也。氏退職の前、記者に語て曰く、神社整理は必ずしも惡しきに非ず、和歌山縣の神社整理は甚しき惡結果を來たせり、既に先任知事の時に合祀されたるものを、復活するは困難なれども、合祀と定まりたる諸社と雖も、まだ合祀せられずして、合祀取消の希望あるものは任意とすべしとて、通牒を役所へ發し。更に基本金を標準として、合祀を爲すは非理なるを述べ、曰く、甲乙の二家あり、甲家が、乙家の貧にして祖先の靈を祀る能はざるを理由として、其佛壇を自家に祀らんとせば、乙家必ず服せざるべしと。又合祀後神林濫伐を實視痛憂し、新宮の神官が、其の神體を撮影して、外國へ出さんとせるを憤れりと。此人在任中、予等合祀反對にて騷動を起し、十八日收監され、昨年朝野の名士に配りし「南方二書」に、氏の事を善く書かぬ所若干あり、但し獄內にて歩行中、從來ステモニチス、フスカなる粘菌の原形體は、白色と定め居たるに、深紅のものなる事を見出し、大英博物館へ贈りし所、リスター卿の姪グリエルマ孃より、斯學の犧牲たりし人の好記念發見として、永く保存すと云ひ越されたり。又煙草を欲望

せしならむと云ふ友人もありしが、そは幸ひに米國の實業植物局に於て、獄の庭に多きハナヒリグサと云ふ草の實を採り、鼻糞に代用する事を知れるが故に、更に不自由なく、却つて面白く『必要は經濟の母』と感歎せしめたり。斯かる新發見新應用は、全く名尹川上氏の賚なり。況んや氏が其後、予の言を容れて、那智の濫伐を自ら出張して禁止し、又神社保存を謀られたるをや。爰に謹んで先年惡口の罪を謝し置く。さるにても川上氏が出したる合祀取消令が、氏の退職後忽ち廢せられたるは、返す返すも遺憾なり。

當局者の言として、讀賣新聞に載せたる通りの合祀好結果有りやと問はんに、予は實際反對の惡結果のみを見る。他府縣の事は措き、紀州のみに就て述べんに、西牟婁郡川添村は、十大字、九村社、五無格社を滅却して、一村社に合せ、基本金一萬圓有る筈と云ふに、實際神林を伐り、神田を賣りて獲る所、皆無に近かりし證據は、神殿風雨の爲に破損し、雨洩りて神體を穢すまゝ放置しあり、神職を詰るに、修覆金無しと云ふ。日高郡上山路村は、大小七十二社を大字東の社に合祀し、小祠は悉く川に投ぜしむ。扨、神體などを社殿に列べ悉く燒失せるは、白井(光太郎)博士の論文に見えたる通り也。其燒跡へ合祀されたる一社の社殿を持來たり据えたるに、去年秋の大風に吹飛され、今に修覆出來ず、昨今猶社費を納め得ざる村民に對しては、そが炊飯の唯一貴重品たる鍋釜を外し取るなど、村吏が民を脅し居る有樣は、都會に在りては倒底想ひ及ばざる所也。山路を往復五六里歩まずば參り得ぬ所に合祀し、其後村吏の不注意よりして、神體、神寶悉く燒盡し、通知もせず、因て大に敬神の念を減ぜり。參詣も爲し得ぬ神社に社費の納め難きは自然の成行也。

熊野は本宮、新宮、那智の三山とす。歷代の行幸、行啓伊勢大廟より遙に多く、凡そ十四帝八十三回を算へ奉る。されば長寛二年伊勢、熊野二神の優劣を勅問あり、其れ本宮は實に日本國現世の神都と尊崇され、諸帝皆な一歩三禮、山又山を踰えて參拜ありしなり。然るに去る明治二十二年の大洪水に神殿、神寶、文書一切迹を留めず流失し、今は己前の宮地と異なる地に社殿あり、新たに出來せる石燈籠や、旅順分捕の大砲の外觀るべき物更に無し。舊社地に生ひたる老樹大木の林こそ、古への聖帝、名相、歌仙、貴嬪、高僧、勇士が、心を澄して敬神の實を盡したる舊蹟にして、當國の誇りとすべきものなるに、一昨年夏神官の社宅を作るとて伐倒さる。氏子總代、神官と一つ穴で揚々たり。斯かる英斷の神官、氏子總代古來比類稀也。老樹を伐倒さば跡地を桑畑とするに便利なりとて、之を見て哭く村民を嘲る。其の神官は他

國人にて、土地に關係なく、濫伐にて十分神威を損じ、忽ち他方に轉任し、今日小言いふにも相手なく、丸で狐に魅まれしが如し。其の前の神官は、石垣費七十圓を着服し、懲役になれり。他の神職輩辯護して曰く、貧すれば誰でも盗みますと。孰れも盗賊を恥とせぬ種族と見ゆ。

次に新宮には熊野の開祖高倉下命を祀り、火災ありし毎に廢朝仰せ出されしといふ神倉神社以下悉く合祀し、社殿社地を一日中に公賣し了れり。殊に神武帝を奉祀し來れる渡御前社をさへ合祀し、其の跡に名高き瀧(一ノ瀧)の神官を取込み、藪の筍までも私すといふ。往年、此の地より最多數(六名)の彼の大逆事件に關聯せる逆徒を出せるは、官公吏卒先して破壞主義の實行を示せるに因由する所なしと云ふを得んや。又苦々しきは、現下裁判中の那智事件にして、其の神官(以前郡書記)地方の有力者と共謀し、十六萬圓借用の證文を僞造し、曩に民有に歸せる那智の元國有林を伐盡して、三萬圓の報酬を得んと謀り、伐木にかゝる一刹那、檢擧されたる一事あり。此の擧にして實行されんか、瀑布は水源涸渇して、さしもの景勝も一朝にして泯滅すべかりしなり。

熊野參詣街道に唯一つ、昔の熊野の面影を留めたる拾子谷(ひろはこだに)の官林も、斯かる詐僞にて濫伐さるべき處、事暴露し其より引て全國に渉れる未曾有の大疑獄は、目下檢擧中なり。孰れも合祀勵行の結果、人民素朴より險惡に化し、一郡吏一村長の意見次第により、神はどうでもなる。神を畏るゝは野暮の骨頂なり、吾も人也、公吏も人也、出來るだけ惡事を爲すべしと思ふに出づ。昔、京都より本宮に詣づるに、九十九王子とて、行幸、行啓の際、必ず奉幣祈願、又御宿蹕されし分社あり、皆な風景良く名所なり。是等の多くは滅却伐絶され畢もぬ。例せば十丈王子は、村吏が其邊の惡黨二人に、此社に由緒ありとて合祀を出願すべし、さすれば神林の幾分を與ふべしとて合祀せしむ。二人其林を伐るに及び、盗伐と告訴し久しく入牢し、一人は牢死せり。西牟婁郡近野村には、史書に明記せる古帝皇奉幣の古社五社あり、村に取て面目極まる事なるに、不都合にも、平田内相すでに五千圓積まずとも、維持費確かならば合祀に及ばずと令せるよりも遙か後に、維持に堪えずと詐稱し、地價も無き禿山頂に、無由緒の金毘羅社を立て、大小十二社悉く之に合祀し、神林伐木の許可を得たり。此神林には白井博士が本邦稀有の老杉と稱せるものを始め、珍奇の植物多し。因て白井博士戸川殘花二氏より、知事に請願する所あり、知事は之に從ひ、一切伐採を止めんとせしも、屬僚等、斯くては縣廳の威嚴を損ずべしとて、其一部分、特に老杉

に接近せる樹木を伐らせ、然る後に監獄に送りし刑人の仕事なりと詐稱せり。斯かる作法にて、果して縣廳の威嚴が揚がるものにや、審しとも審し。斯くの如く合祀勵行に由て、奸民手附金を置き廻りて、神林大方伐り荒され、さしも名高かりし木ノ國も木ノ國ならず、土崩れ山壞れ、洪水風害以て常事と爲すに至り、少數人の懷を肥すために、村落は日を逐て凋落し行けり。『まだ知らぬ人もありけり逢坂の、關のあなたに住むべかりける』。昨年十月卅日の讀賣新聞、佐々木忠次郎博士の『神社合併論』を見て、東國には此事未だ濫行されざるを知り、羨み居たるに、此頃追々合併を强ふる事となり、埼玉縣の如きは、公吏故らに農桑多忙の時を俟ちて、合祀を逼る所すら有りと云ふ。予は佐々木氏と等しく、人民合祀出願に先ち、再三その利害と將來の結果とを熟慮せんことを切望す。因て親しく見聞せる神社合併の惡結果を叙ぶる事次の如し。

第一、合祀に依り、敬神思想を高めたりとは、地方官公吏の報告書に誑かざるるの甚だしき者也。

例せば、紀州の如き山岳重疊、平沙渺茫たる地には、遠路の神社に詣づる能はず、古來、最寄の地點に神社を建て、朝夕之に參詣し、朔望には全村悉く參拜して、神恩を謝せり。菅原傳授手習鑑三段目に『老爺七十の賀に、三人の媳が集ひ來て料理する間に、七十二銅と媳が吳れたる三本の扇を持ち、末廣の子供の生先き、氏神へ賴まん』とて、一人の媳を伴ひ詣づる所あり。田舍には合祀前、何處にも斯かる和氣藹々たる質撲の良風美俗を存し、平日は農稼多忙なるも、祭日毎に嫁も里に歸り、婆も娘も在所に孫の顏を見んとて往きし也。彼の小窮窟なる西洋の禮拜堂に、貴族、富人のみは車に駕し、鷹揚として說教聽問に出懸くるも、貧民は路傍に餓ゑて身の果敢なさを慨むの類にあらず。斯くて每大字の神社は、大に社交を助け、祭日には用談も方付き、麁緣なりし輩も和睦したる事例乏しからず。又每宵青年が、順番に點燈に赴く等の良風もありたり。合祀後、往復一里乃至十里も步まずば、參り得ざる處すらありて、爲めに老少婦女貧人は、敬神の實を擧げ得ず。前述せる近野村の如き、去秋新產の嬰兒と、其姉なる女兒とを伴へる一婦人、合祀先の新社へ詣でんとし、三里の山路に困憊し『誰が斯く遠方に吾が氏神を捉へ去れるぞ』と泣くを見たる通行人は、其女兒を負ひ、一里餘も送り遣れりと云ふ。近く邦人宗敎心薄く成れりなど云ふは、神社を撲滅して手柄とし私利を營む官吏、奸商の事にして、邊地の人敬神の念厚

きは、山奥に四五家起れば、必ず小祠を建つるにて明か也。然るを無闇に遠地に合祀せるより、無きに勝れりと云ふ心より、蛇狐生靈天狗などの淫祠を奉ずるに至れる者すら多し。斯くの如く合祀は、敬神の念を滅殺すること、實に顯著なりとす。

第二、合祀は人民の融和を妨げ、自治機關の運用を阻害す。

例せば田邊町に近き西の王子社を、東の王子に合併せしに、西社の氏子承知せず、他大字と絶交し、一向社費を納めず、祭日に社蹟に僧を招き祭典を濟し、祭祀する處は神か佛かも不明となり、中には懲しめの爲めと稱して神林を伐盡さんとて、既に手を下せるもの神林を伐りしに、山崩れて官道を潰す虞れあるより、郡衙遂に降參し復社を許せり。又御坊町に近隣大字の蛭子社を合併せしより、漁民大に怒り、一昨夏祭日に他大字民と大爭鬪し、警官の力及ばず、八人計り入獄せり。漁夫は命ち懸けの營業を爲す者ゆえ、信神の念甚だ堅く、不斷、蛭子神に漁獲を祈り、漁に出る時、獲物ある時、必ず之に祈願報賽し、海に人の墜落すれば祓除し、不成功なる毎に謝罪す。姦通すれば神怒に觸れ、虛言吐かば漁利無しと心得、只管、蛭子神の冥罰を畏る。斯かる漁夫より漁の神を奪ひ、獵師に山神を祭るを禁ずるは、斷じて民を安んずるの道にあらじ。原谷と云ふ處にも、合祀の遺恨より人を斬りし者あり、添の川又佐田二大字には、一昨春合祀反對の暴動すら起れり。又高田村と云ふは、白晝にも予等如き六尺の男子も往き得ずして、引き還せし程の所なり。其の南檜枝大字の天王社は、古來、社殿無きこと三輪大社の如し、社殿あらば合祀に及ばずと聞き、僅か十八戸の民が五百餘圓を捻出し、社殿を建つ。其後、一村一社の制に據り、件の社殿を破り、他の大字へ合併を命じ、東牟婁郡長、神社關係者一同を、新宮町へ招集し、合祀社の位置を郡長の選定に任すべく決議せしめ、祝賀と稱し大宴會を催し、酒二百八十餘本を飲みて、一夜に八十餘圓を費さしめしより、村民不平を唱へ、合祀承諾書に調印せず、總代の輩進退を失し行方を晦ましし、再三召喚するも出頭せず、仍つて警察犯處罰令により、各一圓づゝの科料に處し、斯くて前後七回召喚されしも、今に結末つかずと聞く。以て合祀は地方人民の融和を妨げ、兼て官衙の威信を損ずる事の大なるを知るべし。

第三、合祀は地方を衰微せしむ。

從來、地方の諸神社は、社殿と社地又多くの神林有り、氏子皆應分の入費を支出し、